

昆虫類

① 名古屋市における昆虫類の概況

名古屋市の市域は、木曾・長良・揖斐の木曾三川により形成された、濃尾平野の中央部やや東寄りに位置し、沖積平野と丘陵地からなるが、最高点は守山区東谷山（とうごくさん）の標高 198.3m に過ぎない。本来なら照葉樹林が発達する地域であるが、長い間の人の営為により生態系は攪乱され、極相に近い植生は東谷山の一部に残っているに過ぎない。市の東部には、1960 年頃まで田畑と二次林からなる里山的な景観が広がっていたが、市街化の波に押され、今日そのような景観は、守山区や名東区・天白区の一部に残るのみとなっている。市の西南部は海拔ゼロメートル地帯で、広く水田と畑が残っていたが、現在ではここも都市化が進んでいる。

生態系がどちらかといえば貧相に見える市域であるが、よく調べてみると、注目すべき昆虫が、狭い範囲に現在も幾つも命脈を保っていることが分かる。開発の波にさらされ、よりシビアな条件で生きているだけに、生息地の保全など、生態的価値の大きさによってはただちに対処すべき事例が出てくる。子どもたちにとって身近な学習のフィールドとして、保全したい自然を的確に把握しその重要性を指摘するためには、残された自然の継続的な調査とその公表が必要である。レッドリストにも県レベルよりも地域に密着した、より逼迫した意味合いが生じてくる。

現在、昆虫相の観点から名古屋市内で特に注目すべき自然として、守山区上志段味の東谷山一帯、千種区平和公園南部と東山公園・守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地公園、東部丘陵地などに散在する塚ノ杵池や大根池・猫ヶ洞池などのため池、熱田神宮などの寺社の鎮守の森、名古屋城周辺、そして庄内川の河川敷と河口のヨシ原などをあげることができる。この中で東谷山については、2010 年 4 月に、愛知県の自然環境保全地域に指定され、野生動植物保護地区を定めて湿地や照葉樹林などが保護されている。

名古屋市のレッドデータブックは 2004 年に初版が刊行され、2010 年に内容を補完した補遺版が刊行された。その際には、ため池と周辺環境の調査や、庄内川河口ヨシ原の調査結果が加味されたが、今回 2015 年版では、熱田神宮社叢の調査と、東谷山の自然環境保全地域の調査結果を加味することができた。熱田神宮調査におけるオオゴキブリの現認、東谷山におけるオオシモフリスズメやアヤコバネナミシヤクの名古屋市初記録などの成果があり、東谷山では愛知県未記録のコウチュウやガも発見されている。東谷山のシイ・カシ類の多い極相林は更に調査を継続する予定である。

名古屋市の地史については、2004 年版に概略が述べられているが、特に古東海湖に由来するシラタマホシクサやシデコブシなどの「東海丘陵要素」をはぐくむ、湧水に涵養された貧栄養の小湿地には、現在でも見るべき生物が多い。しかし市内に散在するこれらの小湿地は、植生の遷移が進み、ササの進入も著しく乾燥化の一途をたどっている。水脈の確保やササ刈り・上木切りなど、保全のための人為が与えられなければ、小湿地は早晚消滅の運命にあるであろう。

名古屋市では、このような湿地と周辺の環境に依存しているハッチョウトンボ、アカジマアシブトウシカ、ハウチワウシカ、ウラナミジャノメ、ウラギンスジヒョウモンなどの生存はま

さに風前の灯といえる。これら湿地に生息する種の多くが、環境省の絶滅危惧種に選定されている種である。

かつて市内に生息していたヒメヒカゲやコバネアオイトトンボは既に絶滅し、ヒメタイコウチも確実な生息地が減少している。また市内の湿地の昆虫の調査はすべての目（もく）について十分とはいえず、重要な種が人知れず消えていくこともありうる。そういった意味で、1996年6月に名古屋市のビオトープ公園第1号としてスタートした天白区島田湿地や、それに続く守山区八竜湿地のようにフェンスで囲い、時期を決めて一般公開するような徹底した保全は、重要な行政施策といえる。

湿地とその周辺には、ハンノキ林を伴うことが多い。ハンノキ林にも特有の昆虫が生息するが、特に2012年の環境省のレッドリスト改訂で、新たにガ類のオナガミズアオとウスミミモンキリガが準絶滅危惧に選定された。里山のハンノキ林のある環境が全国的に減少しているからであろう。両種とも狭食性で、名古屋市内でもハンノキ林のある環境に限って見られる。緑地のため池周辺に多いハンノキ林は、公園整備などで不注意に伐採しないように、特に注意が必要である。

ため池の昆虫については、2009年に名古屋城のお堀を含む、市内10ヶ所のため池について、名古屋市環境局と市民団体の協働で、名古屋昆虫同好会の支援を受け市民調査員を募り、年3回の調査が行われ、それぞれのため池の概況が明らかになった、ベニイトンボの分布拡大や、エサキアメンボの名古屋市初記録などの成果が得られたが、タガメや大型ゲンゴロウ類の絶滅、タイコウチなど大型の水生カメムシの減少などマイナスデータも得られている。

地域別にみると、守山区東谷山ではウラクロシジミ、クロヒカゲ、ウスグロクチバ、トウカイツマキリアツバなどが、現在市内でこの周辺だけに生息していて、コウチュウやカメムシにも他では見られない種がいる。近年山麓の湿地の細流で自然状態のゲンジボタルが確認された。ギフチョウやミヤマセセリは名古屋市では絶滅寸前であり、東谷山ではたとえ姿を見たとしても、瀬戸市側からの移動個体の可能性がある。ミヤマセセリは猪高緑地でもわずかに現認できる。

千種区平和公園南部と東山公園周辺は、市の中心部に近いが自然の残された緑地であり、2006年より「なごや環境大学」の事業の一環として始まった、名古屋の棲息生物調査実行委員会による児童や市民対象の夜間採集体験で、集光性昆虫のデータが得られ公表されている。ガ類では全国的な希少種マダラウスズミケンモンや湿地性で環境省の絶滅危惧に選定されているガマヨトウなどの重要な記録が出ている。守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地も、それぞれ市民団体による保全・調査活動がなされ興味深い種の現況が得られる。アベマキやコナラ主体の雑木林にはコシロシタバが局所的に多く、近年フシキキシタバも見られる。名東区猪高緑地にある塚ノ杵池では、ハイイロボクトウやクロフキオオメイガなどの湿地性種が多い。

熱田神宮社叢には、オオゴキブリなど極相に近い古い森に生息する種が残っている。名古屋城周辺では堀の石塁にウマノスズクサが多く、市内での発生が不安定なジャコウアゲハの安定した供給地となっている。以前と変わらずエノキやサクラの古木にヤマトタマムシがかなり発生し、ヒラタクワガタやコカブトムシも比較的近年の記録がある。また堀の一部にヒメボタルが毎年発生をしているのは周知の通りである。

庄内川河口のヨシ原では、ガ類ではハイイロボクトウ、ヌマベウスキョトウなどの、環境省のレッドリストに選定されている種が生息する。河口付近には汽水域に産し、幼虫は水中生活

しフジマツモ科やコノハノリ科の藻を食べることが知られるエンスイミズメイガが多産する。

以上はこの地域の在来昆虫相の中での注目種であるが、近年の温暖化現象による南方系の種の北上・東進や、海外から移入された帰化種の多発により、新たな競争が生じて今日的な昆虫相が形成されつつある。

名古屋市は、以前は年平均気温 14℃ ラインにあるとされ、1950 年代までは大体その位の平均気温であつたが、名古屋気象台測定の平成元年から平成 10 年までの 10 年間の年平均気温の平均値では、年 15.9℃ であり、平均気温が 1950 年代以前より 2℃ 近く上昇している。今世紀に入るより少し前から、南方系の昆虫の北上が目立ち始め、以前は関西以西に分布し名古屋市ではほとんど見られなかったツマグロヒョウモン、クロコノマチョウ、ナガサキアゲハ、ハマオモトヨトウ、ニジオビベニアツバ、タイワンクツワムシなどが市内で定着している。市街地でクマゼミが増加しニイニイゼミが減少していることも、表土の変化とともに温暖化が競合関係に影響している可能性がある。

帰化した外来種では、戦後早く帰化したアオマツムシなどはどこでも見られ、初秋には街路樹の樹上でリーリーと甲高い声で鳴いている。緑地の樹上でよく見かけるヨコズナサシガメも近年よく見かける。外来昆虫の中には天敵が少なく大発生して人間に様々な害を及ぼすものもある。

日本生態学会が外来の動植物の中から「日本の侵略的外来種ワースト 100」を定めているが、昆虫類は 22 種を占める。その中で名古屋市に発生が認められる主な種には次のようなものがある。

チャバネゴキブリ、オンシツコナジラミ、ヤノネカイガラムシ、マメハモグリバエ、イエシロアリ、イネミズゾウムシ、アルファルフアタコゾウムシ、ヒロヘリアオイラガ、アメリカシロヒトリ

これらの中には在来種と競合し影響をあたえるものもいるであろう。また、天敵の多寡は、昆虫の発生に直接的な影響をもっている。近年、名古屋市内のオオミノガのミノムシが少なくなっている。これは 1990 年代に中国より侵入した天敵オオミノガヤドリバエに寄生されたためである。

また近年、名古屋市東部に残る雑木林にコナラなどの成木のナラ枯れ現象が多発した結果、愛知県でほとんど採集例のない、ルイスホソカタムシやタイショウオオキノコなどが発生している。

チョウ目では、人為的な放蝶による発生と思われるものに、2003 年に守山区庄内川堤防で発見された、韓国産と思われるホソオチョウと、2010 年に名東区猪高緑地で発見された、中国産と思われるアカボシゴマダラがある。アカボシゴマダラは 2012 年には鶴舞公園でも発見されている。本来の生態系を破壊する心無い行為である。また、故意ではない移入と見られるものに、2012 年に名東区牧野ヶ池緑地で発見され、猪高緑地でも記録されたホシミスジと、2013 年に西区の新川堤防で発見されたムシヤクロツバメシジミがある。ホシミスジは、おそらく食樹のユキヤナギやコデマリ等に付いて日進市に 2010 年以前に移入された個体群が、隣接する名東区に広がったと考えられる。

このようにある地域の昆虫相は、恒久的なものではなく、様々な要因によりダイナミックに変化しているので、各分野での継続的な調査が必須である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

名古屋市で過去に記録された昆虫類は平成 26 年（2014 年）現在、3,708 種である。その中から今回の改訂で絶滅 19 種（+5）、絶滅危惧ⅠA類 16 種（-2）、絶滅危惧ⅠB類 26 種（+9）、絶滅危惧Ⅱ類 24 種（+4）、準絶滅危惧 52 種（+15）、情報不足 19 種（+3）を選定した。選定した種類数の合計は 156 種（+34）で、名古屋市産の昆虫の約 4.2%であった。種類数のあとの括弧内の数字は「レッドデータブックなごや 2010」からの増減である。またランクの上下したものもある。今回の名古屋市レッドリストの改訂では、全体で+11 とレッドリスト掲載種がかなり増加している。増加の理由で最大のものは、2012 年の環境省のレッドリスト第 4 次改訂で、昆虫は全国で 564 種から 868 種へと 1.5 倍強もレッドリスト掲載種が増加したことによる。今回の環境省の改訂の特徴として、従来の小笠原や南西諸島のような島嶼や高山帯、洞窟のような特殊な環境にすむ昆虫に加えて、身近な里山やため池などに生息する種に焦点が当てられ、多くの種が追加された。それらの大部分は、名古屋市においても同様に減少傾向にあるので、基本的に環境省のリストアップした種で過去にあげられていない種は、名古屋市のリストに新たに選定した。これによって全国的な比較がより容易となる。

レッドリスト掲載種の選定には統一した観点が必要である。今回の選定に当たっては、専門研究者や同好者の意見をまとめ、名古屋市の現在の自然の実態を正確に表すように努めた。また、名古屋市のレッドリスト改訂のために 5 名の専門家調査員により 2 年間、焦点を絞った多くの現地調査が行われ、絶滅種は確実に絶滅と判定され、また旧版で絶滅危惧とされたものの幾つかは、新たに産地が発見されたり、採集条件によっては少なくないなどの新知見が出たりして、ランクを下げた。

名古屋市には、市内で最初に発見され、名古屋市が模式産地となり、市の標本が完模式標本（ホロタイプ）となっている昆虫が次の 9 種ある。

キイロヤマトンボ、ナゴヤサナエ、アカジマアシブトウンカ、ヒメシジミガムシ、シワムネマルドロムシ、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタマムシ、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、ヒメカバナミシャク

このうち、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタマムシ、ヒメカバナミシャク以外の種は、幾つかの県でレッドリストに挙げられていて、水域の環境をよく表す種で、市内でも減少している種なので名古屋市のレッドリストにあげている。

研究が不十分な目（もく）や調査が不十分な目は、今回は除外した。またクツワムシ、タイコウチ、オオクワガタ、ガムシのような一般に良く知られた種や身近に生息している種、市民が関心を持っている種で、減少が明らかな種はなるべくとりあげた。

過去に記録があっても、実際に市域に発生したかどうか疑わしい種は除外した。例えば戦前にオオムラサキの記録があるが、市外からの飛来種の可能性があり、掲載しなかった。

名古屋市の絶滅危惧種を概観すると、多くがため池や湿地などの水域に関係するものであることが分かる。また草地環境に生息するものも比較的多く、堤防や原野などの草地環境の消滅がシルビアシジミを絶滅させ、草原性のチョウ目やバッタ目・コウチュウ目を減少させている。1960 年代に市東部で大発生したドクガ駆除の為に東部丘陵に農薬の空中散布がなされたが、その後のマツ枯れ対策の農薬散布とともにやむを得ない措置とはいえ、大きな影響を受けた昆虫は多いであろう。市内での保全への対策や留意点は、焦点が定まりつつあるように思われる。

（執筆者 田中多喜彦）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各クモ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境庁編，1995）に準拠した。

公表されてから年数の経過もあり、その後の新しい取り扱いがある場合にはそれに準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境庁（編），1995）に準拠した。

公表されてから年数の経過もあり、その後の新しい取り扱いがある場合にはそれに準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 －日本の絶滅のおそれのある野生生物－ 5 昆虫類」（環境省，2015）の全国でのカテゴリーも併記した。

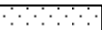
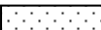
【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は  で示した。また、トンボ目に関しては、1999 年以前の記録のある区域を  、2000 年以降も記録のある区域を  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については、【過去の生息状況／絶滅の要因】として、対象種の名古屋市における過去の生息状況、絶滅の主な要因について文献に基づき記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

昆虫類 <トンボ目 アオイトトンボ科>

コバネアオイトトンボ *Lestes japonicus* Selys

カテゴリー

【選定理由】

もともと産地は局地的で個体数も多くなかった。愛知県下では1980年代から記録が絶えている。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫は体長40mm内外。金属緑色の同属4種の中では最も小型。本属はイトトンボ類の中では大型で体も太く頑丈である。本種は同属他種との区別がやや困難であるが、尾部下付属器で識別するのが一番良い。

幼虫の尾鰓の先端は丸みがあり、不鮮明な斑紋を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、守山区、緑区、天白区で局地的に記録されている。

【県内の分布】

平地、丘陵に広く分布したが局地的である。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。

【生息地の環境／生態的特性】

平地、丘陵地の抽水植物に富む水質の良い古い池沼に生息する。生息場所が局限される理由として、同属他種に比べ産卵管が脆弱なため産卵可能な抽水植物に限られることによるとする見方もある。成虫の出現期は6～11月である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

愛知県下では1980年代以降確実な記録はない。市内ではより早期に姿を消している。全国的にも減少が著しい。

もともと僅かしかない生息可能な池沼の潰廃や改修等による環境変化、池沼周辺の環境悪化が減少要因である。

【保全上の留意点】

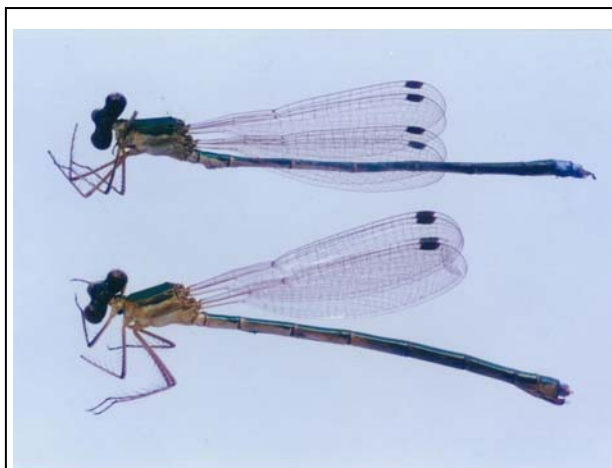
生息地の発見は不能と断じてよい。一般論としては、本種の限られた生息可能な池沼の現状保全が必要である。

【特記事項】

未熟の同属他種を本種と誤認する例、写真のみの提示による不確実な報告例を見るので注意を要する。

【関連文献】

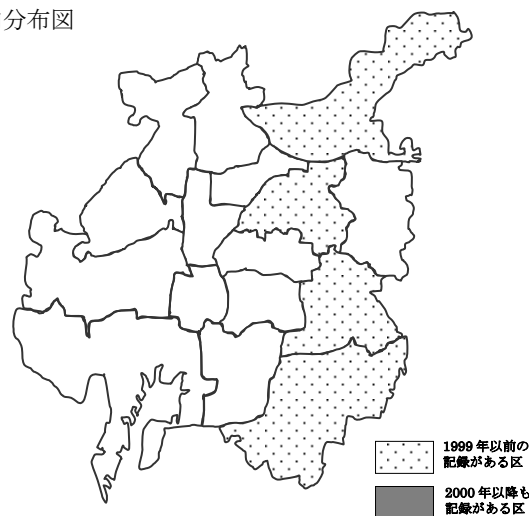
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.



コバネアオイトトンボ 上雄 下雌

千種区東山公園付近、1951年10月6日、高崎保郎 採集

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 カワトンボ科>

アオハダトンボ *Calopteryx japonica* Selys

カテゴリー

【選定理由】

1960年代以降市内では確実な生息の記録がない。生息可能な河川環境がなく絶滅したと見られる。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長 57mm 内外。雄の体色は金属緑色。翅は雄では青藍色に輝き美しい。雌ではやや透き通り白色の偽縁紋を有する。

幼虫は 3 本の尾鰓が長く、普通種ハグロトンボの幼虫に酷似する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、北区、昭和区、守山区。

【県内の分布】

主として西三河以東の丘陵、低山地に分布する。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、ロシアシベリア。



アオハダトンボ 雌
守山区竜泉寺、1951年5月26日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵から低山地にかけての流水面にエビモなどの水生植物の葉が浮かび岸に抽水植物が生育する清澄な中小河川や時に矢作川のような大河の緩流部に生息する。

局所的に産するが、産地では群をなして生殖活動を行う。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内でもかつては清流であった山崎川や千種区内の水路、北区の庄内川畔などに生息していた。現在では市内で本種が生息可能な流水域は皆無である。

市街地やその近傍における清澄であった流水の顕著な水質悪化と、河川の人工排水路化により生息困難となり絶滅した。

【保全上の留意点】

市内では絶滅しているが、一般的には清澄な水質と植生豊かな流路の保全が必要である。

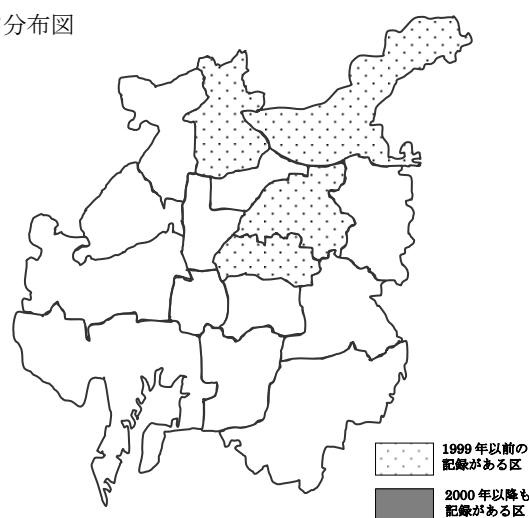
【特記事項】

多産する近似種ハグロトンボとは、雄の翅が青藍色に輝くこと、雌では目立つ白色の偽縁紋を有することで容易に区別できる。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫（上），pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

ヒヌマイトトンボ *Mortonagrion hirosei* Asahina**【選定理由】**

極めて特殊な環境にしか生息しないため産地は局限される。
市内生息地は消滅し絶滅。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫の体長 28mm 内外。雄の胸部は黒色の地に黄緑斑紋を有する。若い雌の胸部は橙色で、成熟すると汚褐色になる。雄胸部前面の4個の黄緑色の円紋は目立ち本種の特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区と南区の近接した場所で記録された。

【県内の分布】

愛西市（旧立田村）に分布し、刈谷市で近年記録された。飛鳥村では消滅した。

【国内の分布】

本州の東北地方南部以南、九州北東部に極めて局地的に分布する。

【世界の分布】

台湾、中国。



ヒヌマイトトンボ 雄

愛知県愛西市葛木町（旧立田村）、1985年7月21日、

高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川下流の汽水域のヨシ原の中の湿地状態に限って生息する。成虫はヨシ群落内に潜み、余り外部に出ず体躯も小型細身で見付けにくい。年1化で成虫の出現期は6～8月である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内唯一の堀川下流左岸の狭隘な産地は埋立てにより消滅し、本種は絶滅した。刈谷市の新産地は環境の変化により生息が確認できなくなっている。

汽水域で伏流水などのきれいな水で涵養された湿地という極めて特異な環境は、河川堤防の改修や堰の造成を始めとする環境変化で容易に失われ本種は生息できなくなる。

【保全上の留意点】

本市では絶滅したが、一般的には河川の汽水域のヨシ原中の湿地の保全が必要である。

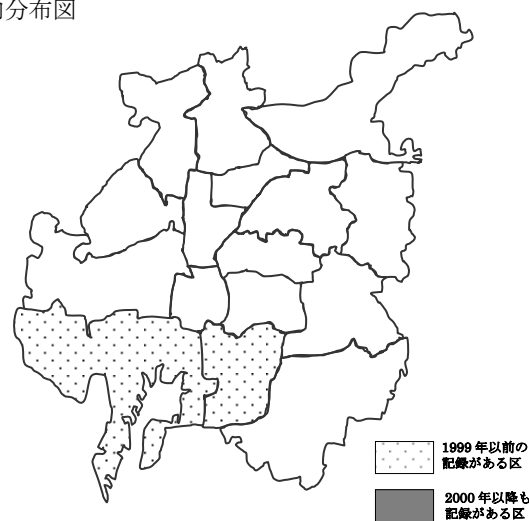
【特記事項】

刈谷市の新産地は 2008 年に発見された。河川汽水域の丹念な調査により県内でも他の産地が見つかる可能性はないとは言えない。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
清水典之・鵜殿清文・鵜殿 茂, 1972. 名古屋市南区のトンボ 5 種の新産地と種類追加. 佳香蝶, 24(93):73.
鵜殿清文, 2009. 愛知県でヒヌマイトトンボの新産地を発見. 佳香蝶, 61(237):7.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤマトンボ科>

キイロヤマトンボ *Macromia daimoji* Okumura**【選定理由】**

かつては市域の庄内川水系に生息していたが、河川の汚濁と水辺環境の悪化により姿を消してから久しい。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は78mm内外。大型種。体は細身の黒色で鮮やかな黄斑を有する。普通種のコヤマトンボに似るが、腹部第3節の黄斑が背側と腹側に分断されることにより区別される。

幼虫は大型扁平で肢が長い。その先端の爪が明らかに長いことでコヤマトンボ幼虫と区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

主に三河の丘陵地、低山地に局所的に分布する。

【国内の分布】

茨城県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシア、東南アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は丘陵、低山地の清冽な中河川の砂泥底に生息する。矢作川のような大河からも羽化する。若い個体は発生河川近くの開けた場所の中空を飛翔する。産地は局所的である。成虫の出現期は6～9月上旬である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内では砂泥底の清流という河川環境はなくなり、絶滅と考えられる。近隣からの飛来も殆ど期待できない。中河川の水質悪化と人工化が著しい尾張平野では生息は望み得ないが、三河では矢作川水系、豊川水系の流域から何ヶ所か生息地が知られている。

砂泥底の浅い緩やかな清流という幼虫のやや特殊な生息環境の衰失が絶滅の要因である。

【保全上の留意点】

市内では絶滅と見られるが、一般的には中河川の中、下流域の砂泥底の清流という環境の維持が必要である。

【特記事項】

本種は故松井一郎氏により現守山区で採集された個体により1949年新種記載された。

【関連文献】

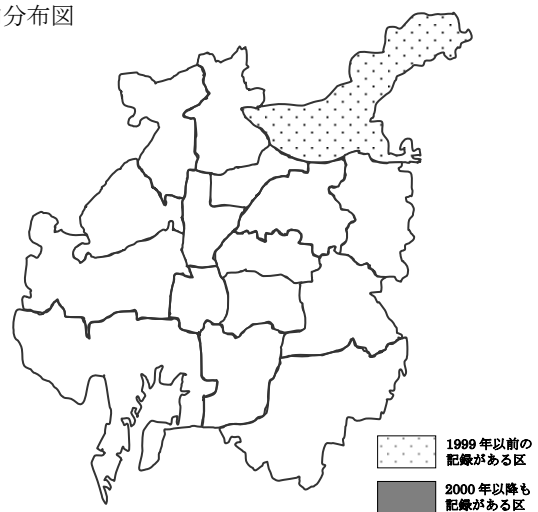
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.



キイロヤマトンボ 雌

愛知県豊田市香嵐溪、1986年6月14日、鶴殿清文 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

マダラナニワトンボ *Sympetrum maculatum* Oguma

カテゴリー

【選定理由】

もともと局地的に分布する本種は、近年全国的に急減してきた。市内では絶滅した。近隣からの供給も期待できない。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫は体長33mm内外の小型種。アカトンボでありながら体は赤くならず黒化して、雄は黄から暗緑斑、雌は黄斑を有し翅の基部が橙黄色を呈する。

幼虫は小型で腹部側棘が長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、守山区、緑区、天白区。

【県内の分布】

尾張東部丘陵を主とし、三河の刈谷市、作手村でも記録されている。

【国内の分布】

東北の日本海側秋田県以西、中部・関西を中心に広島県まで記録されている。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵のアカマツを主とする二次林内、林縁に所在する池沼を主な生息場所とする。遠浅で岸には或る程度の空間があり、日当たりよく水生植物が繁茂し、汀線には丈の低い湿生植物が生育し、湿地状をなす条件の池沼を好む。中部、関西では池に、東北では湿地に生息する。

産卵は浅い水面又は岸の植生上か裸地に連結飛翔しながら卵を落下させる。晩秋全く干上がった池底へも産卵する。或る程度の移動分散力が認められる。成虫出現期は7～11月である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内では千種区赤坂町のような街に近い所でも生息していたが、1970年代前半頃までに主として市街化により姿を消した。隣接する長久手市丘陵の安定した産地でも1990年代に見られなくなった。近年県内での産地は犬山市、豊田市西端丘陵の2ヶ所しか知られていない。全国的に衰退が著しく、近年生息するとされるのは東北から関西までの8県20ヶ所足らずに過ぎない。

生育に適する池沼の消滅、植生遷移などの生息環境変化などが減少要因である。

【保全上の留意点】

本市では絶滅しているし、保全対象となる良好な生息適地も見当たらない。一般的には本種が残存する生息地の現状維持が必要である。草刈りによる湿地草本の高茎化防止は有効とされている。

【特記事項】

本種は既に100年以上前、尾張藩士吉田平九郎（雀巢庵、1895年没）により現千種区で発見されている。

【関連文献】

安藤 尚, 2009. アカトンボ愛知と岐阜の記録. pp.96-99. 自刊.

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

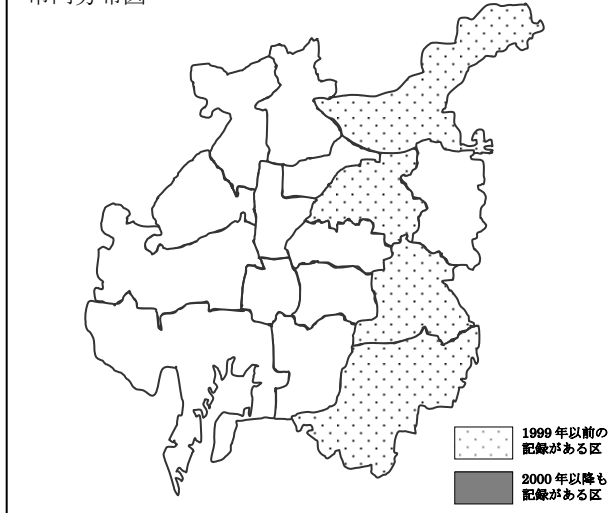
二橋 亮, 2013. マダラナニワトンボ部会 2012年度活動報告. *Pterobosca*, (18B):38.



マダラナニワトンボ 雄

守山区竜泉寺、1958年8月10日、高崎保郎 採集

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

ベッコウトンボ *Libellula angelina* Selys

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

市内での最終記録は1991年、愛知県のそれは2004年で以来長期にわたり発見されず、近県からの飛来定着の可能性も先ずない。

【形態】

成虫の体長は42mm内外。未熟雄と雌は黄褐色であるが、成熟雄は濃黒褐色になる。ずんぐりした体躯。前後翅の基部、結節部、縁紋付近に黒褐色斑と前縁に沿う淡橙黄色条を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、西区、中川区、港区、名東区、天白区。

【県内の分布】

尾張、三河の平野部から丘陵にかけて局地的であるが広く分布した。

【国内の分布】

静岡県、山口県、福岡県、大分県、鹿児島県。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



ベッコウトンボ 雌
名東区猪高町上社猪高緑地、1987年5月21日、
高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

海岸近くのヨシ原を含む低地から丘陵地に所在する池沼に生息する。共通する環境は、透視度50cm以上の比較的良好な水質と泥底であること、水深の浅い部分がある程度の面積を有し、そこには生長過程の丈の低い疎なヨシ、ヒメガマ、マコモ等の抽水植物群落が存在すること、池の周りに草地を伴うことなどである。

成虫の出現期は4月下旬から5月一杯の短期間。移動分散力は標準的には300m～2km、長い場合は8～10km程度と推定される。マーキングにより確認された最長距離は17kmである。一時的な定着はこのような移動分散に起因するとみられる。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

名古屋における最終飛来と推定されるのは千種区茶屋ヶ坂公園の1991年、一時的定着地からの最後の発生は名東区猪高緑地の1988年である。愛知県では知多半島常滑市での2004年の生息が最後である。1980年代末の本市や日進市における一時的定着の飛来源と推定された同半島方面の多産地での発生もなくなり、本市への供給も全く期待できなくなった。全国的にみても、本州2県、九州3県内で局地的に残存するのみである。

もともと数少ない生息適地たる池沼の消滅が主因であろうが、全国的に絶滅がほぼ同時進行した原因は定かではない。

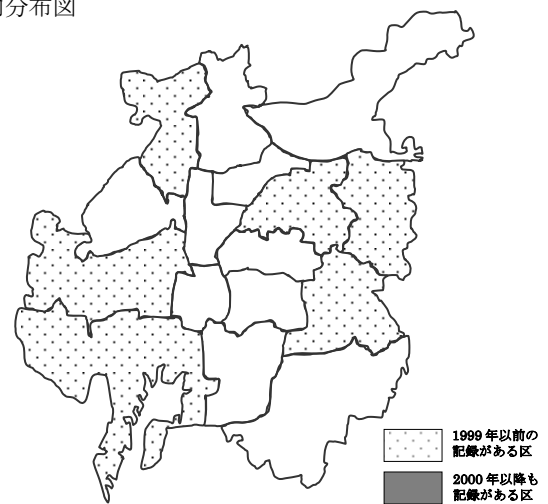
【保全上の留意点】

市では絶滅しているが、一般的には生息に適する限られた条件の池沼の法的強制力も伴う保全が望まれる。また、アメリカザリガニの幼虫捕食圧も看過し得ない原因と見られている。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1997. ため池の衰退を反映するベッコウトンボの滅亡. ため池の自然, (26):1-6.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <カメムシ目 コオイムシ科>

タガメ *Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy)

カテゴリー

【選定理由】

各地で普通に見られたが、水田における農薬使用で個体数が激減した。さらに、ため池などの生息水域が埋め立てられ、生息地そのものが消滅し、都市化が進む平野部から姿を消した。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 48～65mm と本州産水生半翅類では最大の種である。体色は、灰褐色～褐色をしており、前脚は強大な捕獲脚となっている。

【分布の概要】

【市内の分布】

かつてはどこにでも見られた普通種であったため、正式な記録が残されていない。

【県内の分布】

新城市、豊川市、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市、尾張旭市、春日井市、犬山市など。

【国内の分布】

北海道、本州、隠岐、四国、九州、対馬、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州、サハリン）、中国、朝鮮半島、台湾。



タガメ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主として抽水植物の豊富なため池などに生息し、水田地帯の水路や休耕田で泥が堆積した水たまりなどでも見られる。

雌は水面上の植物体などに産卵し、雄は孵化するまで卵塊を保護する。しばしば灯火に飛来する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

平野部から丘陵地にかけて普通に見られた種であるが、名古屋市付近では絶滅して久しい。近年は、西三河および東三河地域の丘陵帯で確認されている。

水田では農薬の使用、池沼では水質の悪化や埋め立てによって減少した。最近では、ペット業者による乱獲も心配される。

【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復・復元を待つ必要がある。

【特記事項】

従来 *Lethocerus* 属に所属させられていたが、タガメ亜科の分類学的研究により、*Kirkaldyia* 属に所属変更された。

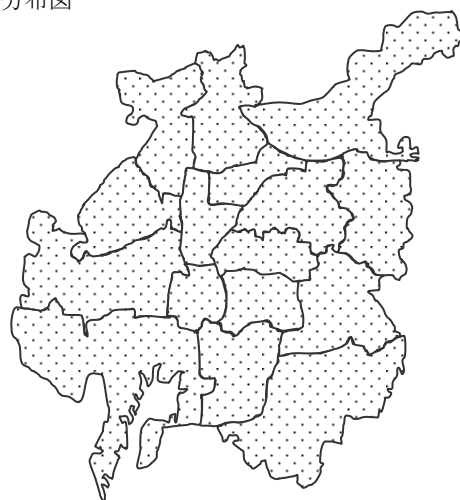
【関連文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫 (上), pp.123-162. 愛知県.

Perez Goodwyn, P. J., 2006. Taxonomic revision of the subfamily Lethocerinae Lauck & Menke (Heteroptera: Belostomatidae). *Stuttgarter Beiträge zur Naturkunde Serie A (Biologie)*, 695:1-71.

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60(234):165-200.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 ナベバタムシ科>

トゲナベバタムシ *Aphelocheirus nawae* Nawa**【選定理由】**

全国的にも生息地が限定され、主に平野部の河川に生息するため、水質悪化や河川改修などで激減した。県内では1940年代の古い記録しか存在せず、市内では昭和区山崎川における記録しかない。

【形態】

体長9～10mmの扁平な体型で、前胸背と腹節の側縁は、顕著に後方に突出する。通常は短翅型であるが、稀に長翅型が出現する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区石川橋付近（山崎川）が唯一。

【県内の分布】

西尾市八面、春日井市勝川橋付近（庄内川）のみである。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

ロシア（極東、東シベリア）、カザフスタン、朝鮮半島。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



トゲナベバタムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から丘陵地の河川で、底質が砂や細かい礫の早瀬に生息する。

プラストロン呼吸により、終生水中で生活する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

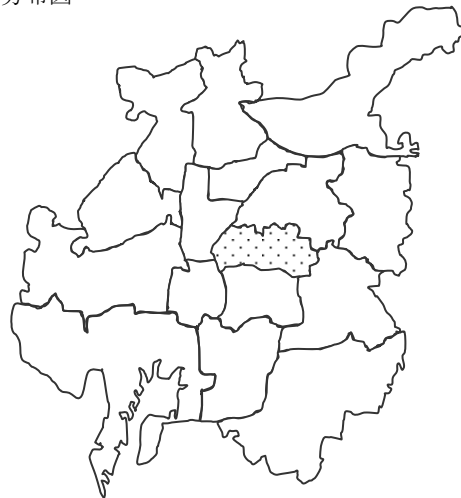
かつて山崎川に多産したとされるが、生息地はコンクリート護岸の単調な都市河川と化し、1940年代の報告を最後に、県内から発見されていない。

主として平野部の河川に生息するため、水質悪化や河川改修の影響を受け、激減したものである。

【保全上の留意点】

現在残された自然状況に近い平野部の河川環境をそのまま維持し、自然状態での回復・復元を待つ必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2006. 穂積俊文博士から寄贈された名古屋市産トゲナベバタムシの標本について. 豊橋市自然史博研報, (16):55-57.

(執筆 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ハンミョウ科>

カワラハンミョウ *Cicindela laetescripta* Motschulsky**【選定理由】**

河川や海岸の砂地を生息地とする種であることから、生息環境の消滅により全国的に減少している。名古屋市内では守山区庄内川河川敷に生息していた。比較的目立つ種でありながら、40年以上にわたって生息情報が途絶えており、また生息環境も残されていないことから、絶滅したものと考えられる。

【形態】

暗緑色で、上翅には白紋があり、互いの白紋は外縁に沿って融合する。白紋の発達程度は、個体、地域によって変異が多い。

体長は14～17mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区竜泉寺下の庄内川河川敷で採集されたという記録がある（穂積，1955）。

【県内の分布】

他に尾西市～八開村にかけての木曽川河川敷、内海海岸、伊良湖岬から記録があるが、いずれも現在生息確認ができなくなっている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、済州島、中国、サハリン、モンゴル、シベリア南東部。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類



カワラハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

河川、海岸の砂浜に生息する。

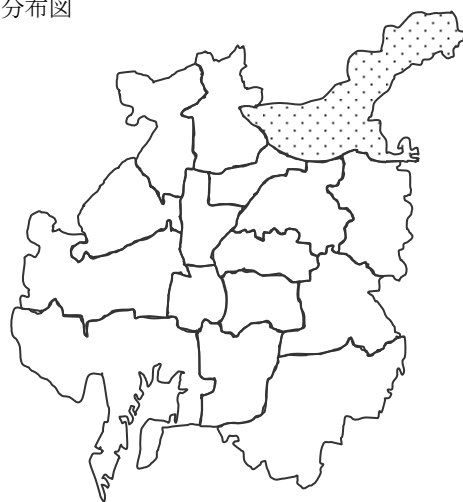
【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内で採集記録が残されている竜泉寺下付近の庄内川河川敷はかつて良好な砂地が広範囲に存在しており、1950年代には少ないながら生息していた。しかしその後長く生息に関する情報がなく、同地の環境も悪化した。市内に本種が生息しうるような環境は他に残されていないため、絶滅したと考えられる。絶滅の要因としては、砂防堤などの設置による砂地の減少、河川敷の公園、緑地化による生息地の消滅があげられる。

【保全上の留意点】

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明，2001．穂積先生のコレクション．穂積俊文博記念論文集，pp.365-368．
穂積俊文，1955．東海甲虫誌（1）．佳香蝶，7(26):24-26．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

キベリマルクビゴミムシ *Nebria livida angulata* Banninger

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

平野部を中心に分布する種で、市内からは守山区竜泉寺、天白区八事付近で採集された記録があるが、いずれも古いもので、近年その生息が確認できなくなっている。

【形態】

頭部は黒色、前胸背は前後縁部を除いて黄褐色、上翅は黒色で縁部が黄褐色で縁取られる。同属のカワチマルクビゴミムシに似るが、上翅の第3間室に剛毛孔点があり、複眼の間に1対の赤紋がある。

体長は13～16.5mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺、天白区八事付近で採集記録がある。

【県内の分布】

他に春日井市高蔵寺の庄内川河川敷で知られるが現在は見るできない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、シベリア東部、中国。基準亜種はヨーロッパからアルタイあたりまで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部に多い種で、河川敷などに生息する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内からの記録は、いずれも古いもので、かつて生息確認がされていた場所に現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。

減少の要因としては、河川の汚れ、改修によって生息環境である砂地が消失したことが大きいと推定される。

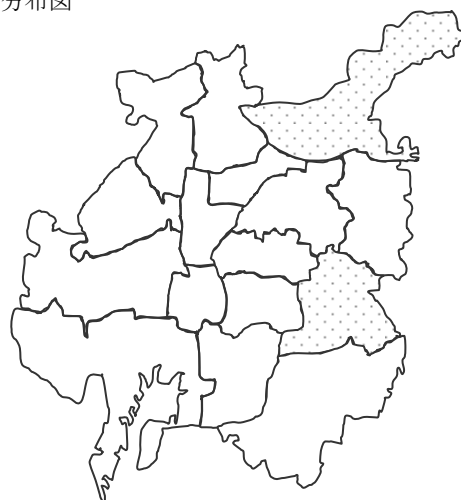
【保全上の留意点】

生息環境の確保が最小限必要である。また同時に生活史の解明など本種についての詳細な調査研究を進め、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。



キベリマルクビゴミムシ

市内分布図



【関連文献】

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌 (9). 佳香蝶, 12(41):17-23.

穂積俊文ほか, 1975. 庄内川の昆虫, 40pp, 12pls. 建設省庄内川工事事務所.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

エチゴトックリゴミムシ *Oodes echigonus* Habu et Baba

カテゴリー

【選定理由】

沿岸部の水辺に生息するが、過去に採集された場所は環境が変わり、絶滅したと考えられる。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 14.0～15.2mm。体型は上翅が方形に近く、特に雌において著しい。前胸背板の陥没は認められない。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区（穂積，1961）。

【県内の分布】

名古屋市。

【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

日本固有種。



エチゴトックリゴミムシ 雌
港区、1942年4月24日、長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

分布は、内陸部よりも沿岸部に偏り、生息環境は日陰の閉鎖的な水域を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

穂積により港区からオオトックリゴミムシと記録された個体は、再検討（長谷川ほか，2014）により、エチゴトックリゴミムシであることが判明した。しかし、その当時採集された場所は、環境が変わり生息は不可能であると考えられる。

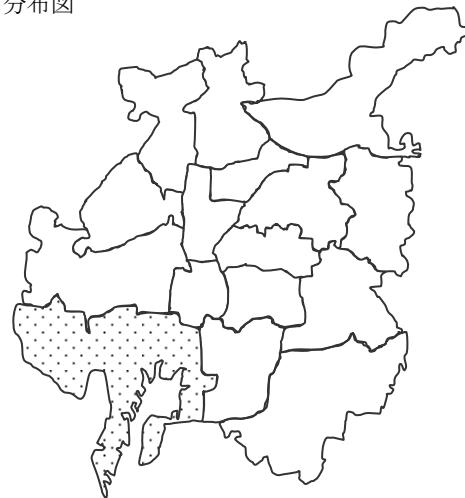
【保全上の留意点】

市内のため池などの止水環境を埋め立てず残し、護岸の一部でも土にしておく事が重要である。

【特記事項】

オオトックリゴミムシに類似するが、下唇中央歯の先端が陥入しないこと、前胸腹板突起が縁取られることによって区別できる。トックリゴミムシ類は良好な水辺環境の指標として有用な存在であり、全国的に減少が指摘されている。

市内分布図



【引用文献】

穂積俊文，1961. 東海甲虫誌（10）. 佳香蝶，13(46):61-82.
長谷川道明・蟹江昇・戸田尚希，2015. 愛知県のトックリゴミムシ類. 豊橋市自然史博研報: (25):21-24

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.29,p.160. 保育社，大阪.
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.
佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（I）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

ゲンゴロウ *Cybister chinensis* Motschulsky

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて人里で普通にみられた種でありながら、高度経済成長期を境に全国的に急速に減少した。市内でも少なくとも1950年代までは各地にみられ、標本も残されている。しかし40年以上にわたって生息情報はなく、生息環境もほとんど残されていない。また、県内に数えるほどしか残されていない生息地からも遠く離れており、自力で分布を回復できる可能性は極めて低いことから市内では絶滅したと考えられる。

【形態】

扁平な卵型。背面は緑がかった黒色で、側縁は黄色に縁取られる。脚、腹部は黄色。体長は34～42mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区茶屋ヶ坂、港区土古町の記録があるが、いずれも1960年以前のものである。

【県内の分布】

少なくとも1950年代までは、広く分布していたものと推測されるが、現在は三河地方に数カ所の生息地が残るのみ。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、シベリア。

【生息地の環境／生態的特性】

ヒルムシロ、オモダカなどの水草の多い池や沼に生息し、かつては水田でも見られた。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

大型で目立つ種でありながら40年以上にわたって生息情報がなく、市内では絶滅したものと考えられる。

絶滅の要因としては、生息地である池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が考えられる。

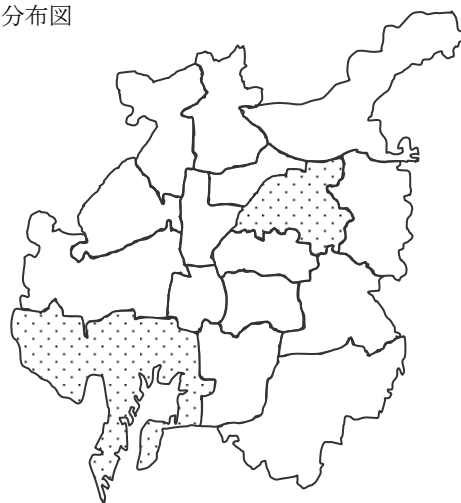
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



ゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2001. 穂積先生のコレクション. 穂積俊文博士記念論文集, pp.365-368.
穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(31):1-10.

(執筆 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus lateralis* (Fabricius)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて人里で普通にみられた種でありながら、高度経済成長期を境に全国的に急速に減少した。市内でも少なくとも1950年代までは各地で見ることができ、標本も残されている。しかし県内を含む中部地方全域を見渡しても近年の生息情報はない。

【形態】

ゲンゴロウとよく似るが、一回り小型で、腹面は暗赤褐色となる。
体長は24～29mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町、守山区の記録があるが、いずれも1970年以前のものである。少なくとも1960年代までは、市内に広く分布していた。

【県内の分布】

平野部～低山地の温暖な地域を中心に分布していたものと推測されるが、低温に弱い南方系の種であるため、はたして県内で越冬していたかについては疑問がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島。

【世界の分布】

アジア、アフリカ、オーストラリアにかけて広く分布する種で、7亜種に分類されている。このうち台湾、朝鮮半島、中国に日本産と同じ亜種が分布するとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から低山地の水生植物の生えた池、沼、水田など生息する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

東海地方では絶滅したと考えられるが、九州では分布の拡大が確認され、数年前では三重県でも見つかった。

沿岸域を中心に東南アジア～アフリカに広く分布する南方系の種であるため、今後再侵入の可能性もある。

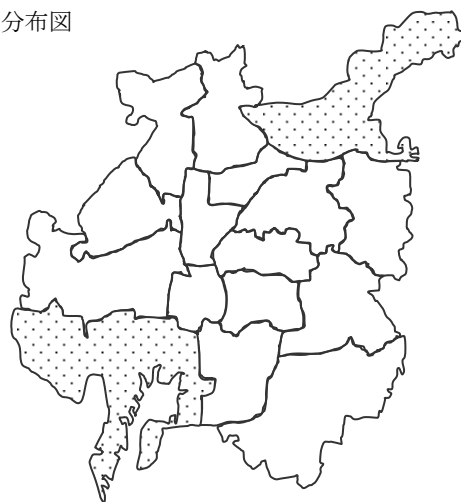
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



コガタノゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(31):1-10.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

マルガタゲンゴロウ *Graphoderus adamsii* (Clark)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

平野部を中心に分布する中型のゲンゴロウで、かつては比較的普通種であったが、高度経済成長期あたりを境に全国的に減少している。名古屋市内からも記録があり、標本も残されていることからかつて生息していたことは間違いないが、長らく生息情報が途絶えている。

【形態】

卵形、前胸背は黄褐色で、前後縁に黒帯がある。上翅は、黄色地に黒色の細かい網目模様がある。

体長は12～14.5mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町（穂積・佐藤，1957）、守山区（長谷川，2002，採集年は1959年）の記録がある。

【県内の分布】

豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

近隣地域では、三重県内にまだ生存している。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国など。

【生息地の環境／生態的特性】

平地や丘陵地の水田、湿地、池、沼などに生息する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内の記録は、1960年以前のもので、現在は絶滅している可能性が高い。絶滅の要因としては、生息地である池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活汚水などによる水質の悪化が考えられる。

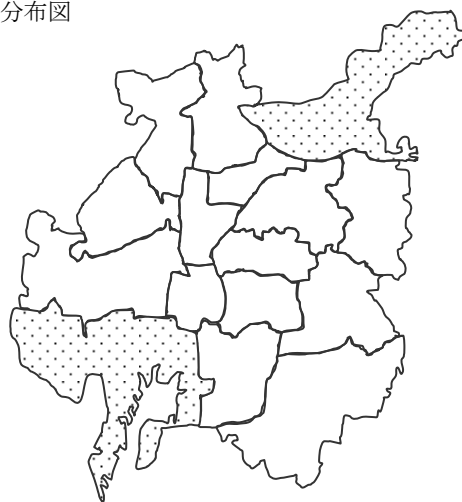
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



マルガタゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第3報）．佳香蝶，9(31):1-10．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

スジゲンゴロウ *Hydaticus satoi* Wewalka

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅

【選定理由】

かつては比較的普通にみられた種であったとされるが、おそらく高度経済成長期を境に急速に減少し、現在では全国的に生息情報が得られなくなっている。名古屋市内では、1950年代以前には、しばしば採集され記録、標本も残っているが、1960年代以降の生息情報がない。

【形態】

体型は長めの卵型。黒色で、頭部前半部と前胸側部は黄色、上翅の両側には2条の黄色の縦条があり、中央後方で融合する。

体長は12～14.5mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町（穂積・佐藤，1957）、守山区（穂積・佐藤，1957；長谷川，2002）の記録がある。

【県内の分布】

瀬戸市、安城市の記録がある。

【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州、トカラ列島（中之島）。

【世界の分布】

台湾、中国、フィリピン、東南アジアに広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

水草の繁茂した池や沼。かつては水田にも生息していた。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内に残る最も新しい記録ならびに標本が1959年に守山区で採集されたものである。この年、同地では7月から8月にかけて採集された6個体の標本が残されている。それ以降の採集記録など生息情報に関する記録は途絶えている。この守山区での記録は、灯火に飛来したもので、生息していた水域を特定することはできないが、1959年当時と現在では採集地周辺の環境は激変しており、現在も生息環境が残されている可能性は極めて低い。また、県全体をみわたしても本種の生息情報はなく、市内では絶滅したと判断せざるを得ない。池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が市内での絶滅の原因であると考えられる。また、東南アジアに広く分布する南方系の種であることから、特に沿岸部において生息可能な池・沼が消失したことが、本種の分布拡散、回復を阻害している可能性がある。

【保全上の留意点】

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

【関連文献】

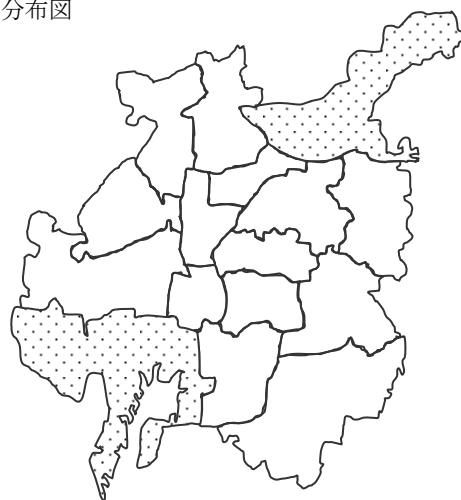
長谷川道明，2002. 豊橋市自然史博物館森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類，豊橋自然史博物館研報，(12):49-53.

穂積俊文・佐藤正孝，1957. 東海甲虫誌（第3報）. 佳香蝶，9(31):1-10.



スジゲンゴロウ

市内分布図



（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

マダラシマゲンゴロウ *Hydaticus thermonectoides* Sharp

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

全国的にも生息域が限定された種で、現在までに知られる生息地のほとんどは愛知県と近畿地方に偏っている。市内からも記録があり、標本も現存しているが、50年以上にわたって生息に関する情報が得られず、また生息環境も残されていない。

【形態】

卵型。淡い黄褐色で、現在でも普通に生息するコシマゲンゴロウに似るが、背面の模様はスジ状にならず、中央下方付近に黒帯状の紋が出現する。

体長は9～10mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区（長谷川，2002，採集年は1959年）の記録がある。

【県内の分布】

もともと稀な種で、美浜町（佐藤，1971）が知られるのみである。

【国内の分布】

本州にのみ分布する。基準産地は長野県であるが、その後の記録は、愛知県及び近畿地方に限られている。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

水がきれいで、冷たい貧栄養な止水域が生息環境と考えられている。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

守山区の記録は、灯火に飛来したもので、生息していた水域を特定することはできない。ただし、採集された1959年当時と現在では採集地周辺の環境は激変しており、現在も生息環境が残されている可能性は極めて低い。もともと生息水域が限定される少ない種であったことに加え、池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が市内での絶滅の原因であると考えられる。

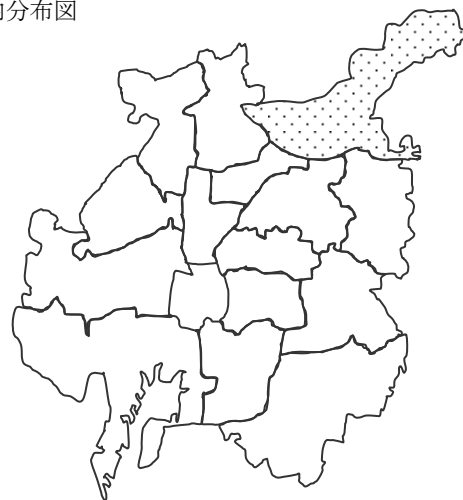
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



マダラシマゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．

佐藤正孝，1971．知多半島の水生甲虫類．日本昆虫学会東海支部報，24:2-3．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 シジミチョウ科>

シルビアシジミ *Zizina emelina emelina* (de l'Orza)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧IB類

【選定理由】

名古屋市内では西区新福寺町の庄内川堤防から1951年に記録されたが、その後の確認報告がない。愛知県下では多産した木曽川堤防でも1963年を最後に記録がなく、河川の補強改修工事等による何らかの生態系の変化により、県下の本種は絶滅したと考えられる。

【形態】

開張 22～28mm。ヤマトシジミに似るが、前翅裏面の中室には黒斑がない。雄の翅表は青藍色で、より紫色を帯びる。雌の翅表は全体に暗褐色で、一部に青藍色が現れることがある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

1951年6月24日に、西区新福寺町の庄内川堤防で1雄1雌が採集されているのみ。

【県内の分布】

木曽川、矢作川等の堤防が主産地。他に知多半島、瀬戸市、三河川合などの記録が散発的にあるが、40年以上前の古い記録である。

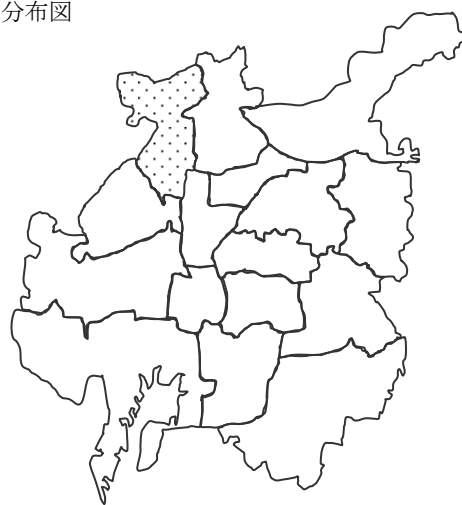
【国内の分布】

関東地方以南の本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島南部より台湾、中国、西はインド、南はマレー半島、東はニューギニア島からフィジーまで、広域に分布する。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

河川敷、田畑の周囲等の明るい草地に生息し、4月から11月まで、年5～6回発生する。幼虫はマメ科のミヤコグサを主食草とするが、他県ではシロツメクサで発生した地域もある。愛知県下でコマツナギを食草としている例も報告されている。九州南部以南ではヤハズソウ・メドハギなど各種のマメ科の草本や低木を食べている。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

この地域の個体群の食草がミヤコグサに限定されると仮定すれば、ミヤコグサ群落のあった堤防や河川敷が従来の採草地としての利用が廃れ、環境の多様性を失った結果、ミヤコグサ群落が激減したことが絶滅の主因といえる。今日、30以上の府県で本種が絶滅または絶滅危惧種にあげられているが、本土域における本種の急激な減少の要因には、尚不明な点が多い。

【保全上の留意点】

旧来の河川敷の生態系を維持するには、草刈りには極力機械を使用せず、計画的にトラ刈りにするのも一つの方法であろう。ミヤコグサ群落が再生すれば、本種が復活する可能性は少ないながらある。なお近縁の帰化種セイヨウミヤコグサが市内でも港区などで見られるようになり、他県で発生例も知られているので、今後注意する必要がある。

【引用文献】

各務晃司, 1952. シルビヤシジミ名古屋市内に産する. 佳香蝶, 4(18):45.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
安藤 尚, 2003. 愛知県木曽川堤防最後(?)のシルビアシジミ. 佳香蝶, 55(216):74.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.31, p.141. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑, 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe* (C. Felder et R. Felder)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

本種はかつて、本州以南の山地草原や低地の河川敷等の草地に広く分布していたが、1960年代以降全国的に急減し、今日確実な産地は中国地方と九州にわずかに知られるのみとなった。名古屋市内では北区の矢田川河原の古い記録があるのみである。

【形態】

開張 60～80mm。雌は雄より大型で日本産ヒョウモンチョウ類の中では最大、特に温暖地の個体は大型。裏面後翅の外縁の銀白色斑の内側の縁取りは、ウラギンヒョウモンでは単純な山型であるが、本種では中央の凹んだ山型でMの字のように見える。

【分布の概要】

【市内の分布】

1937年頃北区の矢田川堤防に多産した。

【県内の分布】

上記以外には名古屋市近郊(平手, 1937)、南知多(神谷, 1956)の文献記録があるだけである。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

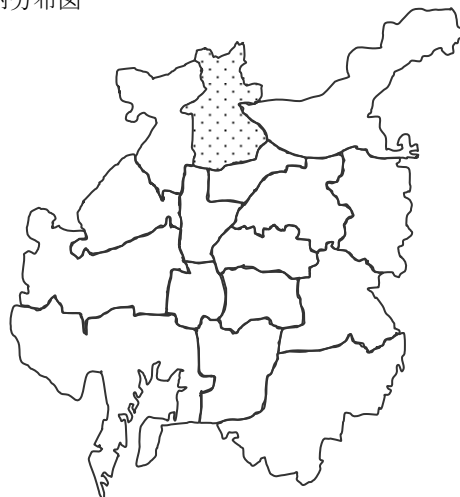
【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布し、東アジア型分布の代表種の一つである。

【生息地の環境／生態的特性】

低地では河川敷や堤防などの明るい草原が生息地となる。快活に飛び、アザミ類、ヒメジョオンなど各種の花に集まる。幼虫の主食草はスミレ科のスミレで、タチツボスミレなどの有茎種はほとんど食べないという。低地では6月に発生し交尾、7月中旬頃に夏眠、秋に再び活動し産卵する。

市内分布図



【過去の生息状況／絶滅の要因】

1937年の記録(加藤, 1942)では、「大曾根付近の矢田川堤防に多産、半径百米位の範囲で一日数十頭採集」という状況であった。かつて多産した本種が、1950年代には市内でも県下でも絶滅したと考えられる。絶滅の原因は定かではないが、食草群落の減少を主因とした生息環境の悪化であろう。

大型で群棲する傾向にある本種は、安定した発生を続けるには、単位面積当たり他種より多量のスミレを必要とする。戦前は刈草等の需要もあり、田畑や堤防の草刈り、里山の手入れが行き届き、スミレ群落が均質に維持されてきた。今日、確実に発生が見られるのは、山口県の秋吉台、阿蘇外輪山、九州の自衛隊演習場内などに過ぎないが、これらの生息地は定期的な草刈りや火入れ等で、一定の広さの草地環境が維持され、本種が生息できる環境が保たれていると考えられる。

【保全上の留意点】

全国的な減少・絶滅の原因が必ずしも明らかでなく、積極的な保全対策は困難である。しかしスミレ類を食草とする草原性のヒョウモンチョウ類の多くが、やはり全国的に減少しているので、残された良好な草地環境の維持・保全への配慮が望まれる。

【引用文献】

- 平手雅二, 1937. 名古屋市近郊の蝶目録. 昆虫研究, 1(1):10-12.
 加藤一三, 1942. 学林, (117):61-66.
 神谷一男, 1956. 南知多・渥美・蒲郡地方に産する昆虫類. 三河湾自然公園調査報告書, pp.50-61. 愛知県.
 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.

【関連文献】

- 福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ). 保育社, 大阪.
 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.46, p.217. 保育社, 大阪.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus arothius* Okada et Torii

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

名古屋市では、この地方に多い丘陵の湧水湿地に限って見られた。開発により湿地が減少し、産地が孤立化するとともに、遠距離の移動性を欠くため、生息地間の遺伝子交流も困難になり、種個体群の衰弱が著しく、1990年ごろに絶滅した。

【形態】

開張 32～38mm。雄の翅表は暗褐色、雌はやや淡い褐色で斑紋等はない。翅の裏面は明るい橙褐色で、その外縁に沿ってはっきりした黒い眼状紋が、前・後翅とも数個ずつある。眼状紋の中心には小さい白点があり、眼状紋の周囲には黄色の環をもちよく目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

1960年代まで守山区、名東区、天白区、千種区、昭和区、緑区の湿地に生息したが、1980年代末には、守山区を最後に絶滅した。

【県内の分布】

ほぼ庄内川と矢作川の間丘陵地や山間の湿地にかつては多産し、岡崎市周辺や豊橋市(葦毛)、新城市(作手)などにも知られていたが、大部分絶滅し、今日では保護されている葦毛や作手の湿原を除いて見ることはできない。

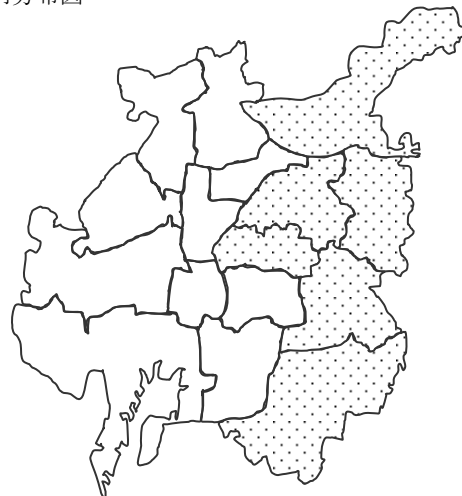
【国内の分布】

本州の特産で、中部地方以西の本州。長野・群馬県の山地草原、東海地方と近畿・中国地方の湿地や草原に局地的に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島・中国からヨーロッパ中部にかけてユーラシア北部に広く分布する。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

名古屋市とその周辺の生息地は、シデコブシやシラタマホシクサなど東海丘陵要素と呼ばれる植物の生える、比較的小規模の明るい湧水湿地であった。湿地のイネ科・カヤツリグサ科の草本の葉に止まっていて、晴天時にゆるく飛翔し、時にヒメジョオンなどの花で吸蜜した。年1回の発生で、6月上旬から7月上旬にかけてみられた。幼虫はショウジョウスゲ、ヒメカンスゲ等のカヤツリグサ科を主食草とし、越冬態は3齢幼虫である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

本種の生息地は、大部分が都市部に近い丘陵の湿地で、開発の好適地であり、短期間に宅地・工場・廃棄物処分場等となり、それに伴う区画整理・道路建設等により水脈が絶えて、壊滅的な打撃を受け消滅した。残された湿地も遷移が進み、周辺の林からササの侵入や樹木の被覆による日照低下などで、生息環境が悪化した。

本種の場合、小湿地に発生する全個体を採集することは容易であったことから、減少時の乱獲が、絶滅に拍車をかけたことは確実であり、チョウ愛好者は反省しなければならない。

【保全上の留意点】

尾張地方では絶滅し、積極的な保全対策は困難である。湧水湿地は特異な生態系を有し、他の目(もく)では未知の種が発見される可能性もあるので、特に市内に残存する湿地は、進入するササを刈るなど人為により遷移を遅らせるとともに、水脈を保存し、周辺の環境も含め永く保全したい。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
 山田芳郎, 2008. チョウ目(チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
 愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.65, p.296. 保育社, 大阪.
 福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ). 保育社, 大阪.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 ムカシヤンマ科>

ムカシヤンマ *Tanypteryx pryeri* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

守山区で記録されてきたが、個体数も生息可能な湿地も極めて稀である。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長70mm内外。太めの体躯で黒色地に黄斑を有する。複眼は離れかつ小さい。翅の緑斑が長い。

幼虫は頑丈でごつごつした感じ。腹部背面に毛束が2列に並ぶのが特徴で大型である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区で記録されている。

【県内の分布】

尾張東部丘陵以東から三河の丘陵、低山地、山地に分布する。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫の生息地は一般には山地の日当りのよいコケが生え水がしたり落ちる崖とされているが、尾張東部丘陵では東海丘陵要素のシデコブシ、準要素のミズギボウシなどが生育する湿地林内の谷底湿地、斜面湿地が主たる生息場所である。

若齢幼虫は湿地の落葉、落枝下の平な部分に、中令・成熟幼虫は湿地のへりの斜面に穴をうがって棲む。水中でなく湿泥中が生活の場であることが特徴で、羽化までに2～3年から数年を要すると見られる。

成虫の動作は緩慢で、白シャツや帽子に止まったりする。成虫の出現期は5～6月である。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区だけから若干の採集例が知られる。かつては竜泉寺辺りでも得られたが、現存するのは上志段味東谷の東谷山南麓付近だけである。

この他非常に珍しい事例として、2006年に中区名古屋城付近で1頭の飛来が記録されている。市近傍では尾張東部丘陵の一角である瀬戸市海上の森に多産する。

もともと稀であるが、守山区では生息場所が著しく減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

守山区上志段味方面の数少ない湿地の現状保全が重要である。

【特記事項】

本種の移動分散能力は、成虫の緩慢な行動から低いと見られているが、上記事例はその考え方を改めなければならない可能性を示唆するものである。

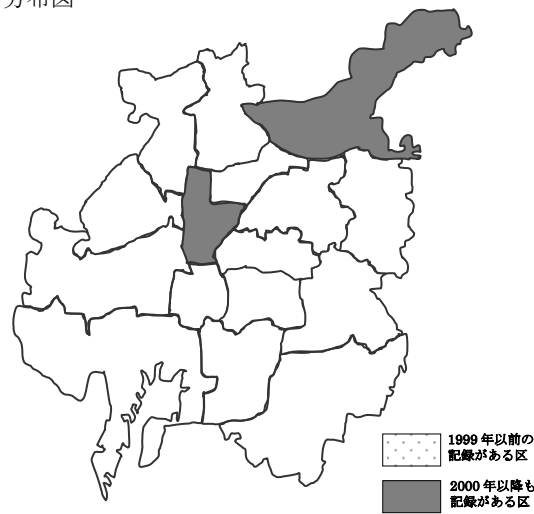
【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2002. 愛知万博会場予定地におけるムカシヤンマの生息環境と羽化生態. 月刊むし, (377):36-41.
横地鋭典, 2013. 名古屋市中区三の丸周辺の2006～2007年のチョウ等の記録. 佳香蝶, 65(255):43-47.



ムカシヤンマ 雄
守山区上志段味東谷、2013年6月5日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

オオキトンボ *Sympetrum uniforme* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

やや特異な産卵場所を好むもともと多くない種であり、限られた産卵適地の衰退により、著しく減少した。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫体長は49mm内外。本邦最大のアカトンボ。体は斑紋がなく橙黄色一色で翅は前後翅共淡橙色を呈し美しい。

幼虫はアカトンボの中で最大で背棘を第9節にも有することが特徴。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和区、熱田区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

尾張、三河平野部に分布した。東三河山地の記録もある。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。



オオキトンボ 雌

千種区東山、1950年7月9日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

開けた遠浅の大きな池で、池畔に草原を伴い、汀線内外に水生植物や丈の低い湿性植物が存在するような場所を好んで産卵する。

雄は汀線に沿って巡回し縄張りを形成する。移動分散性が強いと考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともと生息地が限られ個体数も少なかった。市内での単独個体の終見は1973年である。県内での最後の安定的発生地は日進市の機織池であったが1988年を最後に没姿した。全国的にも激減しており産地は少ない。実質絶滅であるが、移動分散性が強いと考えられるので飛来の可能性が無くはない。

環境選択性が強いいため、数少ない適地の消滅が減少要因である。

【保全上の留意点】

産卵に適する環境を有する池沼の保全。例え現在は不在でも、生息可能な環境を有する池は飛来に備え現状を維持しておくことが必要である。

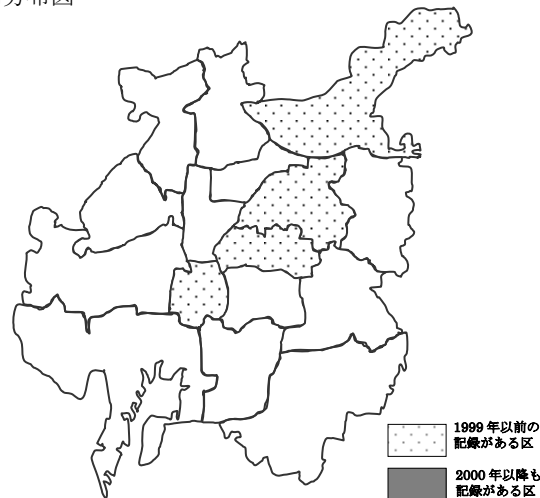
【特記事項】

世間ではショウジョウトンボの雌や未熟雄が本種と誤認されることがあるので注意を要する。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1987. 名古屋市名東区及び日進町のため池の注目すべきトンボ2種. ため池の自然, (5):3.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <カメムシ目 コバンムシ科>

コバンムシ *Ilyocoris cimicoides exclamationis* (Scott)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

全国的にも産地が限定され、主として沿岸部の低地に生息するため、開発の影響を受けやすい。市内では水草が豊富であった古い時代の記録があるのみで、水質の悪化などで確認されなくなった。

【形態】

体長は11～13mm。体型は扁平な小判型をしており、生時は緑がかった光沢があるが、死後は黄変する。

前脚は鎌状を呈し、捕獲脚となっており、腿節は非常に太い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区名古屋城、港区土古町の2ヶ所。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺のみであったが、近年の調査で新たな産地が見つかった。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



コバンムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

生息地は極めて局所的で、ヒシ、ヒルムシロなど、特に浮葉植物が繁茂するため池に生息する。

ヒシの浮囊など水草の組織内に産卵するとされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城濠では、水質の悪化によってかつて生育していたヒシなどの浮葉植物が消滅し、近年の調査でも見つからない。港区土古町は、本種を始め、現在ではほとんど見られなくなった貴重な水生昆虫類が得られていた産地であったが、住宅地と化した。既知産地での再発見は、絶望視せざるをえない。

水質悪化のほか、産卵基質となる浮葉植物の消失が減少要因となっている。

【保全上の留意点】

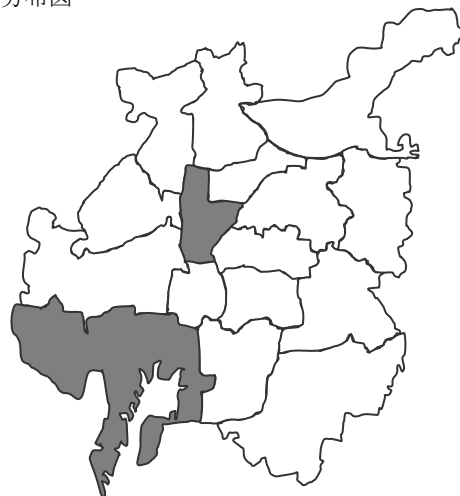
特に平野部から丘陵地に残されたため池では、浮葉植物を保護し、水質悪化を防ぎ、オオクチバス（ブラックバス）などの外来種が入り込まないよう留意する必要がある。

【関連文献】

広 正義ほか, 1983. 名古屋城外堀生物調査報告書. 59pp. 名古屋城管理事務所.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60(234):165-200.

(執筆 矢崎充彦)

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 イトアメンボ科>

イトアメンボ *Hydrometra albolineata* (Scott)**【選定理由】**

かつてはため池や河川などに普通に見られたとされるが、1960年代にはすでに稀な種となっており、現在確実な産地は全国的にもごくわずかである。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長は 11～14mm とイトアメンボ科では非常に大型である。体は細長く、触角第 2 節と第 4 節がほぼ同じ長さである。

雄の腹部第 7 節腹面には長毛を密生し、雌の腹部第 7 節腹面には後縁に微小な突起がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区、中川区の記録があるが、再検討が必要。

【県内の分布】

豊田市、岡崎市、春日井市、犬山市などの記録があるが、ほぼすべて誤同定と考えられる。

【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬、トカラ列島（中之島、宝島）、奄美大島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

生息地は極めて局所的で、まばらに草本類が生育する休耕田など、開放的な水面が広がる環境で見られる。

灯火に飛来することがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年の記録は皆無である。従来の記録もほぼすべてが誤同定と考えられ、県内における生息の可能性は低い。

水質悪化のほか、ため池や低湿地の埋め立てなどによる生息地の消失が減少要因となっている。

【保全上の留意点】

主として低地に生息するため、平野部のため池や湿地、休耕田などの環境維持と水源となる周辺の後背林を保全する必要がある。

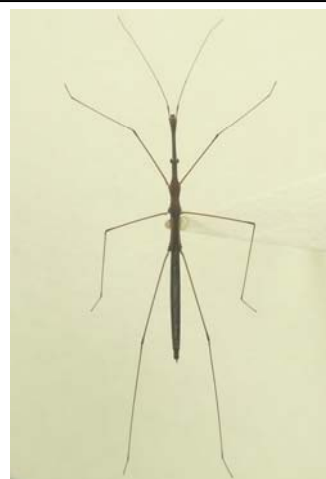
【特記事項】

県内からいくつかの記録があるが、ほぼすべてがヒメイトアメンボ *H. procera* Horváth の誤認と判断される。

【関連文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60(234):165-200.

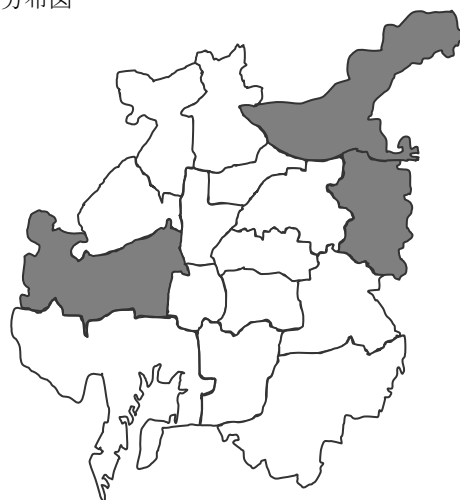
(執筆者 矢崎充彦)



イトアメンボ

矢崎充彦 撮影

市内分布図



昆虫類 <コウチュウ目 カワラゴミムシ科>

カワラゴミムシ *Omophron aequale* Morawitz

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

汚れない河川の砂地に生息する種で、かつては市内にも生息していたが、河川の汚れ、河川敷の改修により生息地が壊滅状態にあり、市内から絶滅する危険性が極めて高い。

【形態】

体型は円形で、鮮やかなオレンジ色、頭部は広く緑色を帯びた金属色。前胸中央部に長円形、上翅にはやや複雑な3条の緑色を帯びた金属色の紋がある。

体長は5.5～6.5mm

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区吉根、竜泉寺、瑞穂区雁道、東区の矢田川で記録がある。

【県内の分布】

旧弥富町、旧足助町、旧旭町で記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、ロシア沿海州、中国。



カワラゴミムシ

【生息地の環境／生態的特性】

河川や湖などの砂地に生息する。県内での生息地は、河川の中流域から下流域（庄内川、矢田川、矢作川）、河口部（弥富市）であるが、上流域のごく狭い砂地にも生息する。

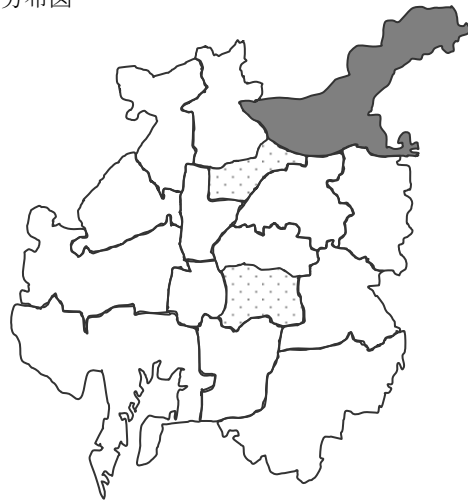
【現在の生息状況／減少の要因】

市内からの記録は、いずれも古いもので、河路（1981）の守山区吉根から記録が最後である。かつて生息確認がされていた矢田川などに現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。減少の要因としては、河川の汚れ、改修によって生息環境である砂地が消失したことが大きいと推定される。

【保全上の留意点】

生息環境の確保が最小限必要である。現在最も生息の可能性が高い守山区内の庄内川においては特に河川敷環境の保全が必要である。

市内分布図



【引用文献】

河路圭吾, 1981. 庄内川で採集したカワラゴミムシ. 佳香蝶, 33(126):31.

【関連文献】

穂積俊文, 1955. 尾張地方の甲虫相. 新昆虫, 8(11):36-38.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

フタモンマルクビゴミムシ *Nebria pulcherrima* Bates

カテゴリー

【選定理由】

河川の中下流域の礫と砂が混じるような環境に生息する種で、市内では庄内川に確実に生息していた。しかし 1975 年に採集されたという情報を最後に生息情報が途絶えてしまっている。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

赤褐色で上翅中央下部に一对の特徴的な大きな黒紋がある。前胸は心臓形で側縁は基方で強く湾曲し、上翅の第3間室には背面に剛毛孔点がない。

体長は 11～12.5mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺付近の庄内川河川敷で採集記録があるほか、西区の庄内川河川敷でも採集されたという情報が寄せられている。

【県内の分布】

この外に記録は知られていない。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、台湾。



フタモンマルクビゴミムシ

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷に生息する。礫と砂が混じるような環境を好む。

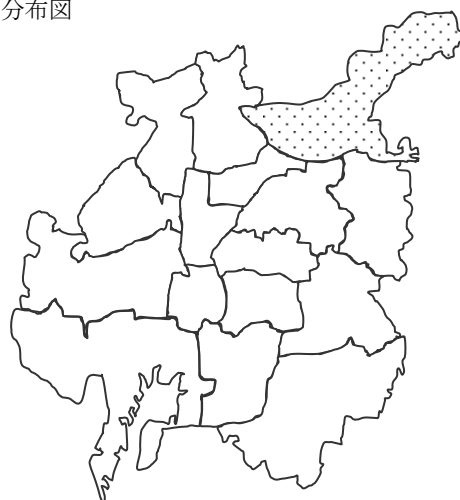
【現在の生息状況／減少の要因】

市内からの記録は、いずれも古いものである。現在は河川改修により、生息環境は悪化しているが、庄内川には砂礫環境も残されている。しかし、生息は不明である。

【保全上の留意点】

生息環境の確保が最小限必要である。また同時に生活史の解明など本種についての詳細な調査研究を進め、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。

市内分布図



【関連文献】

長谷川道明, 2001. 穂積先生のコレクション. 穂積俊文博記念論文集, pp.365-368.
穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌 (9). 佳香蝶, 12(41):17-23.
穂積俊文ほか, 1975. 庄内川の昆虫, 40pp, 12pls. 建設省庄内川工事事務所.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

オオヒョウタンゴミムシ *Scarites sulcatus* Olivier**【選定理由】**

守山区吉根から記録があり、かつては市内の庄内川の河川敷に生息していた。しかしその後生息情報がなく、また生息環境も悪化しているため、絶滅の危険性が高い。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

細長く大きな黒色の甲虫で、大あごがクワガタムシのように発達している。前脚はちょうどモグラやケラの前脚のように発達し、地中に潜るのに適応した形態をしている。前頸節の外縁には2本の棘がある。

体長は28～38mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

1975年に発刊された「庄内川の昆虫」の中で、「10年ほど前に吉根橋で死体をみたことがある」という記述がある（穂積，1975）。

【県内の分布】

木曽川河川敷、渥美半島沿岸部の砂浜に生息している。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾、東南アジア、インド。

【生息地の環境／生態的特性】

河川、海岸などの砂浜に生息し、砂中に深い坑道を掘る。

【現在の生息状況／減少の要因】

吉根橋周辺から勝川橋あたりには本種の生息が可能な良好な砂浜があったことから、少なくとも1960年代までは本種が生息していたと思われる。しかし40年にわたって生息に関する情報が途絶え、現在では同地の環境も、砂防堤などの設置による砂地の減少、河川敷の公園、緑地化により生息環境の悪化が進んでいる。

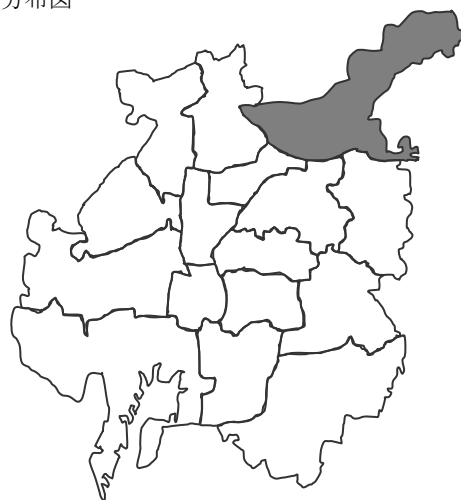
【保全上の留意点】

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



オオヒョウタンゴミムシ

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文ほか，1975．庄内川の昆虫，40pp,12pls．建設省庄内川工事事務所刊．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科>

ムツボシツヤコツブゲンゴロウ *Canthydrus politus* (Sharp)**【選定理由】**

水草の繁った良好な自然環境に生息する種であるが、生息場所の消失とともに姿を消し、長らく市内からの生息情報が途絶えている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体型は逆卵形。背面は黄～オレンジ色で強い光沢があり、上翅の肩から下方に1紋、その内方に中央前まで広がる1紋、中央後ろ会合部に横長の1紋があるが、変化がある。体面下は赤黄色。

体長は2.4～2.6mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町（穂積・佐藤，1957）。

【県内の分布】

他に知多市、美浜町、豊橋市で記録されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



ムツボシツヤコツブゲンゴロウ

【生息地の環境／生態的特性】

水草の茂る池、沼に生息する。

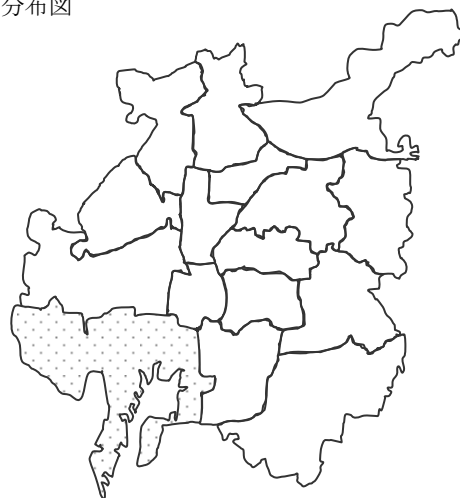
【現在の生息状況／減少の要因】

市内の記録は、いずれも古いもので、かつて生息確認がされていた場所に現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。しかし、県下にはまだ生息している地域も残されていることから、再発見の可能性がないわけではない。池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が市内での減少の原因であると考えられる。

【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第3報）．佳香蝶，9(31):1-10．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

クロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aubé

カテゴリー

【選定理由】

平野部では普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池もなくなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息地も極端に少なくなった。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長20～25mm。体は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で光沢がある。体下面は暗赤褐色で、腹部第3～4節の両端に黄褐小粒を具える。上翅には3点刻裂があり、翅端近くに小さな黄褐紋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区茶屋ヶ坂（蟹江・長谷川，2001）、港区土古町（蟹江・長谷川，2001）。

【県内の分布】

豊田市、設楽町。

かつては平野部の水域に多く見られたが、現在では山間部に残された僅かな池にのみ生息する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

水生植物の生えた池沼、水田などかなり広い水域に適応している。幼虫は5～8月に見られ、成虫は8～9月に出現し、成虫で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

平野部での自然度の高い池の亡失、水田の圃場整備によって非常に少なくなった。

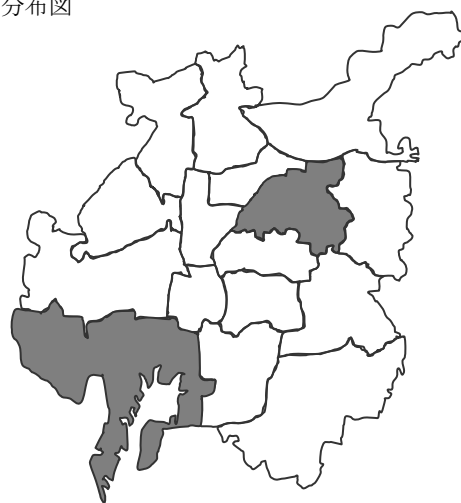
【保全上の留意点】

残っている自然度の高い池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水域環境を作ることが望まれる。



クロゲンゴロウ
豊田市上切町、1999年4月18日、戸田尚希 撮影

市内分布図



【引用文献】

- 蟹江昇・長谷川道明，2001．甲虫類-東海地方を例に-．ため池の自然-生き物たちと風景，pp.15-164．信山社サイテック，東京．
 佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231，愛知県農地林務部自然保護課．
 愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブックあいち 2009- 動物編，p.293．同県環境部自然保護課．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 クワガタムシ科>

オオクワガタ *Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

平野部から低山地に生息する日本最大のクワガタムシであり、各地で減少傾向が甚だしい。近年の飼育ブームにより本種の外国産を含む多くの飼育個体が増加しており、放虫や逃走個体による遺伝子汚染の恐れも高まっている。

【形態】

体長 25～65mm。雄では大あごを含めると 70mm を超える個体もいる。黒色でよく発達した大あごは中央より前方に斜め上方へ向く内歯を持つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺（長谷川，1998）、昭和区八事（佐藤ほか，1990）、千種区東山（佐藤ほか，1990）。

【県内の分布】

瀬戸市、春日井市、小牧市、津島市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島、タイ、インド。



【生息地の環境／生態的特性】

平野部の河畔林や低山地の雑木林などに生息する。成虫は夜行性で 6～9 月に活動し、コナラやヤナギの樹液に集まる。幼虫はアベマキ、ポプラ、エノキなど広葉樹の枯れ木の白色腐朽した部分を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

里山の減少や河畔の整備により、本種が棲める様な太い大木が減ったことが、最大の原因であろう。

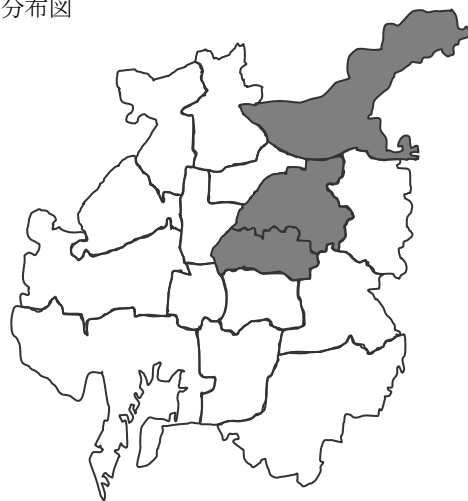
【保全上の留意点】

河畔林の整備や雑木林の開発と共に、飼育ブームに伴う放虫や逃亡が危惧される。

【特記事項】

ペット業者などによる過度の採集を防止する必要がある。

市内分布図



【引用文献】

長谷川道明，1998．昆虫類Ⅰ 豊橋市自然史博物館所蔵クワガタムシ科標本目録．豊橋市自然史博物館資料集（6）．
佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.293．同県環境部自然保護課．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ツチハンミョウ科>

マメハンミョウ *Epicauta gorhami* Marseul**【選定理由】**

かつては、マメ類の害虫として知られた種であるが、幼虫が寄生するイナゴ類の数が減少し、近年発見が困難になった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

艶のない黒色で、頭部は赤色。この地方に産するものは、前胸背正中線上、上翅両縁、会合部、中央に灰白色の縦条が現れる。

体長は12～18mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

市内に残されている採集記録は、港区寛政町（穂積, 1957）が知られるに過ぎない。

記録はないが、戦後しばらくは中区でも普通に見られた。

【県内の分布】

残されている記録は他に旧一宮町、春日井市、小牧市からあるのみ。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



マメハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫が寄生するイナゴ類が生息する草地、河川敷など。

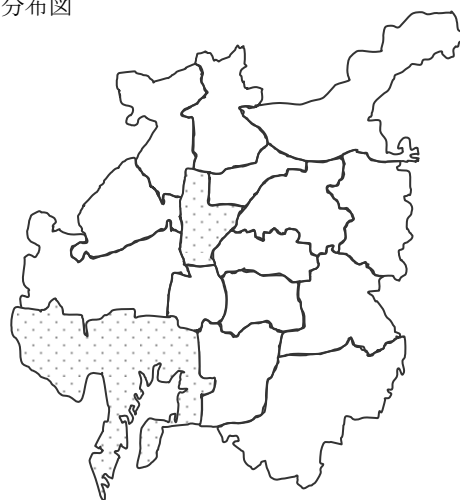
【現在の生息状況／減少の要因】

かつてマメ類の害虫として著名であったが、現在発見は困難な状況にある。減少の要因としては、農薬の普及と、自然環境の変化よりも耕作地に害虫として繁栄し、ヒトへの依存度が高かったことも急に減少した要因として考えられる。

【保全上の留意点】

本種の野生状態での生息地となりうる河川敷の草地の環境を確保することが必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文, 1957. 東海甲虫誌 (第5報). 佳香蝶, 9(33):3-8.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 カミキリムシ科>

ヨツボシカミキリ *Stenygrinum quadrinotatum* Bates

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

1970年代までは平地から低山地にかけて普通の種で、灯火に誘引されて室内にもよく飛来したが、1980年代になって減少傾向が指摘されるようになり、少なくとも20年以上市内から生息情報が途絶えている。

【形態】

黄褐色～赤褐色で、上翅中央に4つの顕著な明色の紋がある。

体長は8.5～13.5mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

東区山口町、守山区志段味で採集記録がある。1950年代には、中区でも灯火に飛来した。

【県内の分布】

奥三河から尾張まで記録がある。

【国内の分布】

沖縄県を除くほぼ日本全土。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島～インドシナにかけて分布する。



ヨツボシカミキリ

【生息地の環境／生態的特性】

平地から山地の広葉樹林（おそらくコナラやアベマキなどの雑木林）に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内での採集記録は、いずれも古いもので、1980年代以降の公表された情報はない。1990年以降の記録は、県下では旧旭町から知られるのみ。

減少の要因としては、燃料としての需要がなくなったため、重要な繁殖の場であった薪が無くなったこと、平行して薪の生産地である雑木林が消失、荒廃したことが考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されている里山の雑木林の管理、保全。

なぜ急激に少なくなったかよく判らないので、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。

【引用文献】

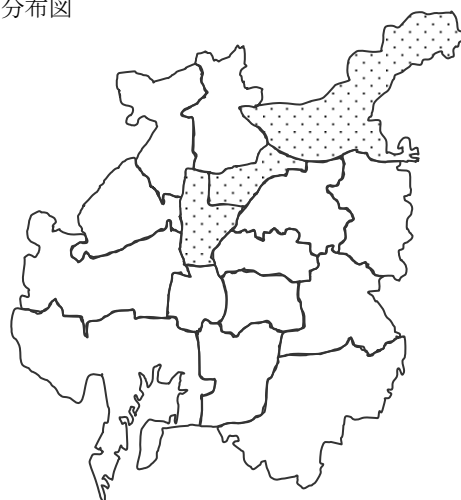
湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知の昆虫(上), pp.389-433. 愛知県自然保護課.

【関連文献】

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文, 1972. 東海甲虫誌(第18報), 佳香蝶, 24(92):37-56.

市内分布図



(執筆者 長谷川道明)

昆虫類 <コウチュウ目 カミキリムシ科>

オオシロカミキリ *Olenecamptus cretaceus cretaceus* Bates

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

ケヤキやムクノキの大木に依存する珍しい種で、愛知県下からこれまで知られる生息地は、豊根村分地、豊橋市豊橋公園、名古屋市熱田神宮など数ヶ所に過ぎない。熱田神宮は尾張地方唯一の生息地であるが、都市中心部に孤立した環境で、面積は狭く、他の生息地とは孤立している。さらに、近年は乾燥化によって樹林内の環境は必ずしも安心できるものではない。

【形態】

橙黄色～赤褐色で、表面は白色の鱗毛に覆われている。側面は複眼の後方から前胸上翅にかけて地色が露出し、橙黄色の帯が縦走する。上翅には側面の縦帯に接したやや角ばった円紋が各3対、中央後方には独立した一対の小円紋がある。触角と脚は橙黄色～赤褐色。体長は16～23mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

熱田区（熱田神宮）、東区東新町で記録がある。正式な記録にはなっていないが、中区の神社でも戦後しばらくは毎年採集されていた。

【県内の分布】

他に豊根村、豊橋市など数ヶ所で確認されているに過ぎない。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾。台湾産は別亜種とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

ケヤキ、ムクノキなど寄主植物の大木を有する森林に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

東区東新町の記録は1950年代のもので、現在も生息環境が残されている可能性は低い。熱田神宮は調査の機会が限られるため、1971年に記録されて以来情報がないが、生息環境は保護されているので、現在も生息している可能性が高い。しかし、熱田神宮は都市部に孤立した自然で、他の生息地とは遠く離れていること、樹林内の乾燥化など生物にとっての環境は必ずしも将来にわたって安心できるものではない。

【保全上の留意点】

現在の生息地である熱田神宮の森の保護保全。幼虫は、ケヤキ類の枯れ枝につくため、枯れた下枝や林内に落ちた枯れ枝などを除去しない。また林内の乾燥を少しでも防ぎ、森内の生物多様性を確保するためにも、落ち葉や枯れ木、枯れ枝は放置しておく必要がある。

【関連文献】

佐藤正孝, 1978. 熱田神宮林の昆虫類. 熱田神宮林苑保護委員会調査報告書, pp.93-110.

成瀬善一朗, 1957. オオシロカミキリ東区で採集. *Napi News*, (22):8.

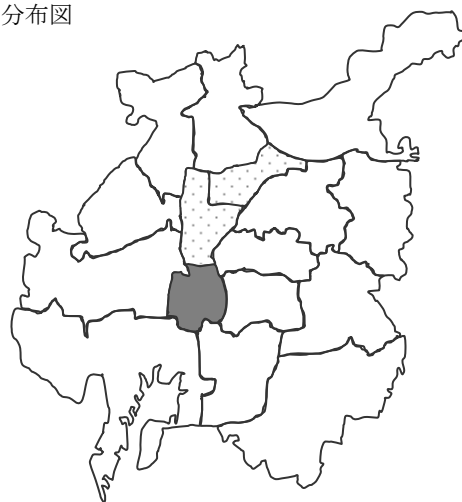
深田雅之, 1971. 名古屋市内で採集したオオシロカミキリ. 月刊むし, (7):36.

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知の昆虫(上), pp.389-433. 愛知県自然保護課.



オオシロカミキリ

市内分布図



(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <チョウ目 セセリチョウ科>

ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市とその近郊では、疎林の間のススキ草原や、丘陵間の小湿地の周りに見られたが、近年本種の生息に適した環境が開発等により激減し、本種の姿を見ることができなくなっている。

【形態】

開張32～36mm。雄雌の色彩斑紋はほとんど同じだが雌はやや大型。雄の前翅表面には斜走する弱い性標がある。後翅裏面中央の中室部に明瞭な銀白紋をもつ。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区平和公園、天白区八事裏山、名東区猪高、守山区上志段味などに記録がある。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河山地まで広く分布するが、局地的で近年産出量は少ない。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布するが、最新の学研日本産蝶類標準図鑑では「まれ」とある。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部。



ミヤマチャバネセセリ

田中多喜彦 採集・撮影

【生息地の環境／生態的特性】

温帯性のセセリチョウで、丘陵や山地の渓谷沿いや林縁の比較的小規模な明るい草地に多く、愛知県では丘陵の小湿地の周辺の草地で見ることが多い。幼虫はススキやチガヤを主食草とし、高茎イネ科草本群落を好む。蛹で越冬し、成虫は4月中旬～5月と7月下旬～8月の年2回出現し、ツツジ類、アザミ類、ヒメジョオンなど各種の花に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980年頃までは、市内でも東部丘陵に散見され住宅の庭にも飛来し、まれな種ではなかった。減少の原因は、目下のところ不明であり、より詳細な全国的な調査が望まれる。

【保全上の留意点】

全国的に減少傾向にあることが分かったのは最近のことである。食草は普遍的な種であり、他の原因による何らかの生態的な脆弱性があると思われる。当面、極力残された湿地を含む草地環境を保全するとともに、遊興施設等での広範囲な農薬散布には十分な配慮が望ましい。

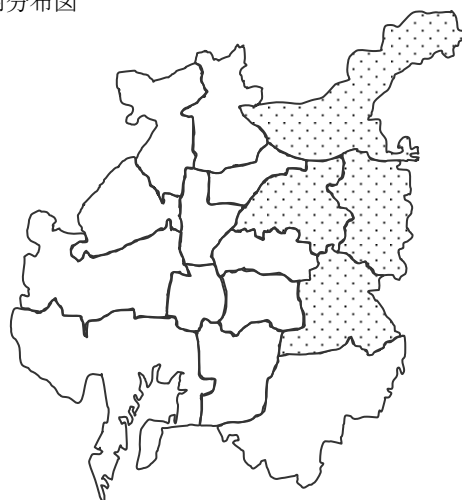
【引用文献】

大曾根剛, 1975. 名古屋市内におけるミヤマチャバネセセリとアサマイチモンジの記録. 佳香蝶, 27(103):40.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目(チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.71, p.323. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

市内分布図



(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 アゲハチョウ科>

ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市の都心部に近い産地は開発等により絶滅し、唯一残された産地である守山区東部の丘陵地も、生息に好適な明るい雑木林が減少し、食草のカンアオイ類とともに生息環境が悪化している。

【形態】

開張 56～62mm。雌はやや大きく前胸背に赤褐色毛がある。前・後翅とも黄と黒の目立つ縦縞模様がある。後翅尾状突起の基部に赤い斑紋がある。交尾した後の雌には腹部に交尾付属物がつく。

【分布の概要】

【市内の分布】

1950年代に千種区、昭和区、守山区で発生地が確認されていた。最近、守山区で再び記録されたが、ほとんど市内での記録はない。

【県内の分布】

尾張東部の丘陵地から三河山地にかけて分布していて、標高 400m 以下の山地に多い。

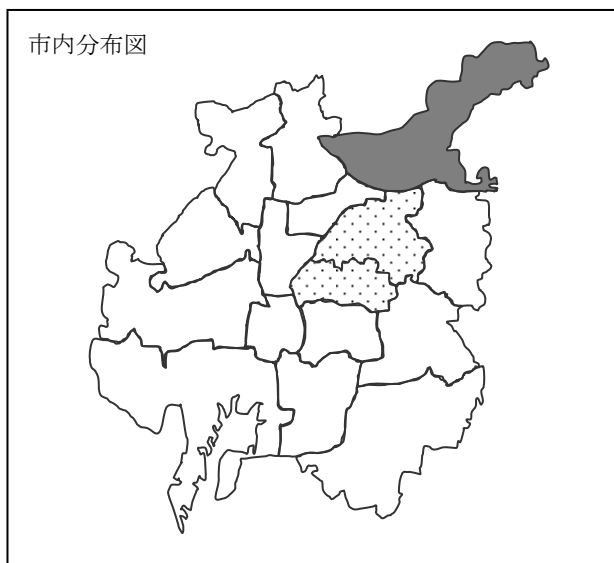
【国内の分布】

本州の特産種。北限は秋田県由利本庄市、西は山口県まで分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

明るい落葉広葉樹を主とした雑木林の林縁や林間の開けた場所でみられる。年 1 回、3 月下旬から発生し、ソメイヨシノの開花期と本種の発生期がほぼ一致する。雄は山頂占有性がある。晴天時に活動し、名古屋市近郊ではショウジョウバカマ、スミレ類、ツツジ類、サクラ類の花で吸蜜する。幼虫の食草は、名古屋市周辺ではヒメカンアオイとスズカカンアオイであり、蛹で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

都心部に近い千種区と昭和区の丘陵地の個体群は絶滅したが、守山区と瀬戸市、尾張旭市との境界付近で 1998 年の記録がある。東谷山では瀬戸市側からの飛来も考えられる。

開発による雑木林の消失・孤立化が減少の主因であるが、雑木林の放置により遷移が進行し、照葉樹が繁茂した結果、林床の照度低下がカンアオイ類の生育に悪影響を及ぼしていること、都市周辺の緑地では剪定や下草刈りなどの過度な管理、害虫駆除目的の薬剤散布等も減少に拍車をかけていると思われる。なお、本種に関しては、チョウ愛好者による採集圧も無視できない。

【保全上の留意点】

里山的な、適度に管理された雑木林環境の維持継続が第一と考えられる。また衛生・樹木害虫駆除目的の薬剤散布を、必要以上にかつ広域に行わないことも大切である。

【引用文献】

- 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
 石塚三郎, 1999. 名古屋市守山区におけるギフチョウの採集記録. 佳香蝶, 51(197):11-12.
 山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
 愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.1,p.4. 保育社, 大阪.
 福田晴夫ほか, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I). 保育社, 大阪.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata nipponica* Murayama

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市では守山区竜泉寺周辺に生息地があったが、著しく減少している。西南日本に分布する種で、本州の太平洋側は神奈川県小田原市以南、日本海側は福井県南部以西に分布しているが、分布の北の境界に近い地域では、個体数の減少や生息地の消滅が近年明らかになってきている。

【形態】

開張38～42mm。翅表は全体に暗褐色で、前翅端と後翅端に小さい眼状紋がある。翅の裏面には細かいさざ波状の紋があり、前翅面に1個、後翅に3個の黄色の環で縁取られている大きい眼状紋が目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺、大森に記録がある。大森の八竜湿地では1985年まで記録がある。

【県内の分布】

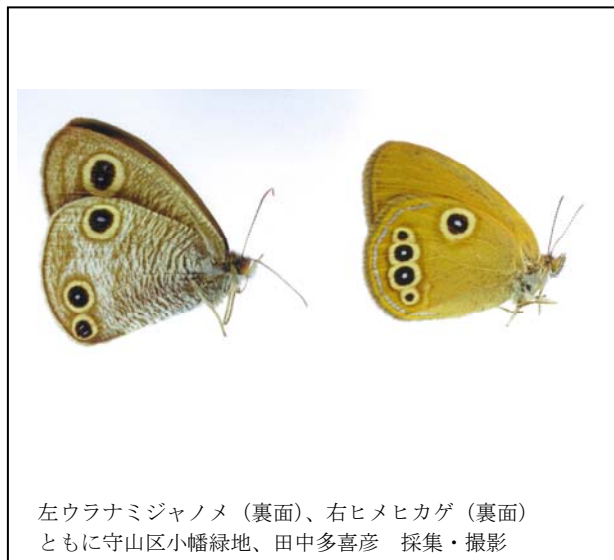
犬山市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地にかけ、低標高地に局地的に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国。



【生息地の環境／生態的特性】

生息地の多くは、ヒメヒカゲの生息地である湿原やその周辺の低木の生える疎林である。湿地への執着はヒメヒカゲほど強くはなく、田畑周辺の草地にも発生することがある。

名古屋市では6月～7月に第1化がみられ、9月に第2化が少数発生する。幼虫は各種のイネ科やカヤツリグサ科植物を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては守山区の湿地周辺に比較的多く見られたが、最近では湿地を含む周辺の植生の遷移が進み、本種も減少している。

田畑への農薬散布の余波を被ったこと、ドクガの駆除や松枯れ防止のための広域的な薬剤空散の影響もあるであろう。

【保全上の留意点】

名古屋市に残された、かつての発生地の湿地及び周辺の草地環境が、今後も継続的に維持されるならば、再発見される可能性も少ないながらある。害虫防除のための薬剤散布は、最小限とすることが必要である。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.59, p.270. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅳ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

オグマサナエ *Trigomphus ogumai* Asahina

カテゴリー

【選定理由】

平地から丘陵にかけて最も普通のサナエトンボであったが、平野では絶滅状態、丘陵では減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫の体長は50mm内外、邦産本属4種のうち最も大きい。黒色地に未熟時は黄色成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は1本。

幼虫は腹端第10節が筒状を呈する本属3種のうち、本種が最も長く、第9節も細長で全体として腹部が細長い印象が一番強い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録された。

【県内の分布】

尾張から三河の平地、丘陵に分布するが、平地では絶滅状態である。

【国内の分布】

石川県、長野県、愛知県以西の本州、四国の一部、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵、低山地の池沼に生息する。水生植物の存在は必ずしも必要条件ではないが、泥底で汀に多少なりとも平坦な地面が続くか、低い岸であることが必要である。

羽化は水面の浮遊物上か汀の地面や低い杭上などで行われる。羽化はこの地方では通常4月第2週頃始まる。未熟成虫は周辺の林内空地や樹上で過ごす。成虫出現期は4～5月、主に池畔で見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては平野から丘陵地、低山地まで広く産したが、現在では平地では絶滅状態、丘陵でも産地は減少している。1940年代末には名古屋城で、1950～1960年代には千種区東山公園でも見られ、1970年代には天白区、現名東区に産し、名東区の最終と思われる記録は1986年である。守山区東縁の丘陵では2014年現在極く限られた一、二の池に生息しているがこれは隣接する尾張旭市の森林公園の広大な二次林帯に負うところが大きい。本市東部に接する尾張東部丘陵（瀬戸市、長久手市、日進市）では現在も比較的普通に見られる。

開発が著しい平野部での生息池沼の水質悪化や周辺を含む自然環境の悪化が減少の主要因である。

【保全上の留意点】

本市では絶滅状態であるが、一般的には岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保持と環境保全、改修による水位上昇の抑制、周辺林の保全が必要である。

【特記事項】

本種幼虫は名古屋のトンボ研究の先覚である故松井一郎氏、故山本悠紀夫氏により発見された。

【関連文献】

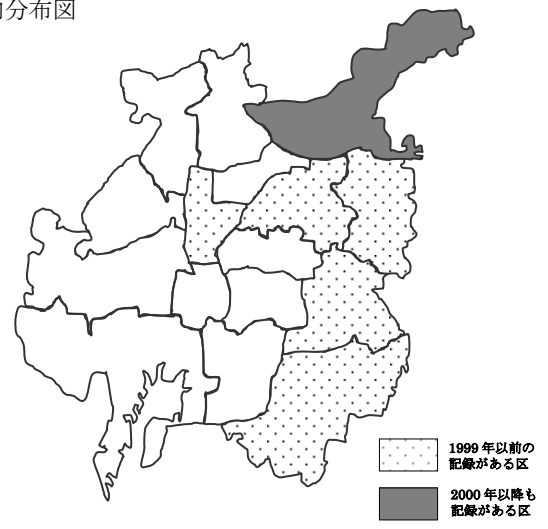
- 安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
 安藤 尚, 2008. 愛知と岐阜のトンボ分布資料(10). 佳香蝶, 60(記念号):23-36.
 高崎保郎, 2010. 名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然, (49):12-18.

(執筆者 高崎保郎)



オグマサナエ 雄
守山区下志段味、2014年4月27日、高崎保郎 撮影

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys)**【選定理由】**

平野から丘陵にかけて最も普通のサナエトンボであったが、平野では絶滅状態、丘陵でも減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫の体長は47mm内外。黒色地に未熟時黄色、成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は2本であることが、オグマサナエと見分け易い識別点。

幼虫はオグマサナエに比較し腹部第9節は幅広く、円筒状の第10節はやや短いことで区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張から三河の平地、丘陵に分布するが、平地では絶滅状態である。

【国内の分布】

福井県、静岡県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵、低山地の池沼に生息する。水生植物の存在は必ずしも生息条件ではないが、泥底で汀には多少なりとも平坦な地面が続くか低い岸であることが必要である。

羽化は水面の浮遊物上か汀の地面や低い杭上などで行われる。羽化はこの地方では常にオグマサナエの羽化の一週間遅れで始まる。未熟成虫は周辺の林内の空き地や樹上で過ごす。成虫出現期は4～6月上旬。主に池畔で見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては平野から丘陵、低山地に広く産したが、現在では平地では絶滅状態、丘陵でも産地は減少している。1940年代末には名古屋城で、1950年から60年代には千種区東山公園などでも見られ、1970年代には天白区、緑区、現名東区に産した。守山区東縁の丘陵では2014年現在一つの池に生息している。オグマサナエと同様隣接する二次林帯に負うところが大きい。本市東部に接する尾張東部丘陵（瀬戸市、長久手市、日進市）では現在も比較的普通に見られる。

開発が著しい平野部での生息池沼の水質悪化や周辺を含む自然環境の悪化が減少の主要因である。全国的にも地域により減少している。

【保全上の留意点】

本市では絶滅状態であるが、一般的には岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保持と環境保全、改修等による水位上昇の抑制、周辺林の保存が必要である。

【関連文献】

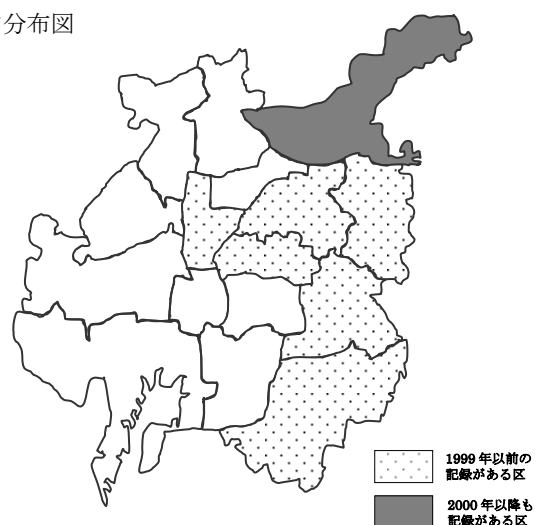
安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
安藤 尚, 2008. 愛知と岐阜のトンボ分布資料(10). 佳香蝶, 60(記念号):23-36.
高崎保郎, 2010. 名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然, (49):12-18.



フタスジサナエ 雄

守山区下志段味、2014年4月27日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

ホンサナエ *Shaogomphus postocularis* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

平野の緩流を主な発生源としているため、特に尾張平野では激しい開発の影響を受け絶滅状態になっている。

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長51mm内外、体形が太短い中型のサナエトンボ。黒色地に未熟時は黄色、成熟すると灰緑色の斑紋を有する。

幼虫はサナエトンボとしては中型。やや細長い紡錘状。触角は細長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、西区、中村区、昭和区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

現在は主として三河の丘陵、低山地に分布する。稀に尾張部で偶発的発見例がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、極東ロシア。



ホンサナエ 雄成虫 守山区竜泉寺、1951年5月3日、幼虫 守山区中志段味、2013年4月15日、いずれも高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平野や丘陵の泥底中小河川を主たる発生源とし、庄内川、矢作川などからも発生する。琵琶湖のような波のある大湖にも生息する。

成熟成虫は河床の石やコンクリート河岸に静止し縄張を張り、時々水面を敏速に飛翔する。丘陵の灌木帯にも飛来する。成虫の出現期は4月下旬～5月。

【現在の生息状況／減少の要因】

三河の矢作川水系、豊川水系では現在でも比較的普通に産する所があるので県のレッドリストの対象になっていないが、かつては東山公園や守山区竜泉寺などにも普通であった。尾張部では典型的な絶滅種である。稀に尾張平野の低地や瀬戸市内尾張東部丘陵で発見されることがあるが、木曽川や庄内川又はその支流からの飛来であろう。現在幼虫の生息が確認されているのは守山区の庄内川畔だけである。

都市化の影響を強く受ける市近郊田園地帯や隣接丘陵地を主生息地としたため著しく減少した。

【保全上の留意点】

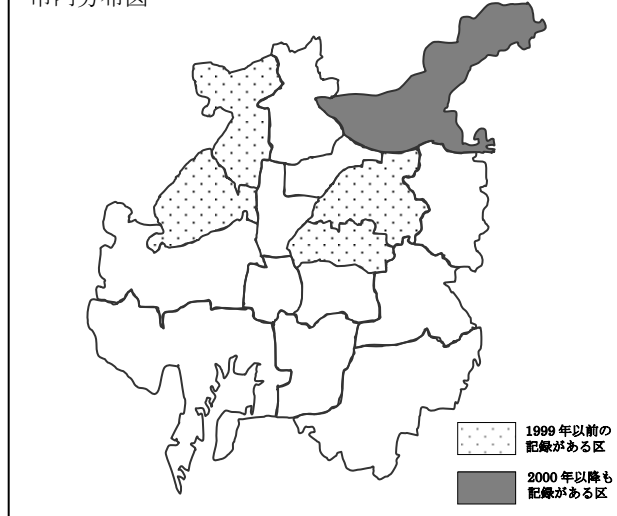
市内では既に絶滅状態であるが、一般的には水田地帯、隣接丘陵地の小流の水質、自然的な河川環境の保全が必要である。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.

(執筆者 高崎保郎)

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

かつては平地から丘陵地にかけての緩流に広く生息していた普通種であったが、分布域、個体数の減少が著しい。

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長65mm内外、やや大型のサナエトンボ。黒地に未熟時黄斑、成熟時灰緑色斑を有する。近似種ヤマサナエに比べ概して胸側2本の黒条は細い。雌の産卵弁が下方に突出するのが特徴。ヤマサナエ雌は突出しない。

幼虫の腹部後半はヤマサナエより細身。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、昭和区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

尾張東部丘陵から三河の丘陵、低山地にかけて分布する。

【国内の分布】

新潟、関東以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地、丘陵の砂泥底の緩やかな小・中河川に生息する。泥が多く植物質の薄い堆積があるような所を好む。時に低山地の川の砂防堰堤にせき止められた広い池状止水域や、大河川の汀の緩流部に生息する。

雌は浅い砂泥底に打水又は打泥産卵する。雄は近くの地面に静止し雌の飛来を待つ。成虫の出現期は5～6月。

【現在の生息状況／減少の要因】

開発の影響を強く受ける平地や平地に接する丘陵に所在する中・小河川に幼虫が生息するため本種は著しく減少した。開発による影響が比較的少ない丘陵から低山地の小河川や林縁の細流を生息の場とする近似種ヤマサナエの方が現在でも比較的普通に見られ、混棲地では往時とはその多寡が逆転した。かつて市内の名古屋城や東山公園でも普通に見られたが、現在市内で生息するのは守山区の庄内川畔付近に限られると思われる。県内でも稀になった。

平地の中小緩流の喪失、河川環境や水質の悪化が減少要因である。

【保全上の留意点】

市内では生息地が限られたが、一般的には平地、平地に接する丘陵の中小河川の水質や河川自然度保全が必要である。

【関連文献】

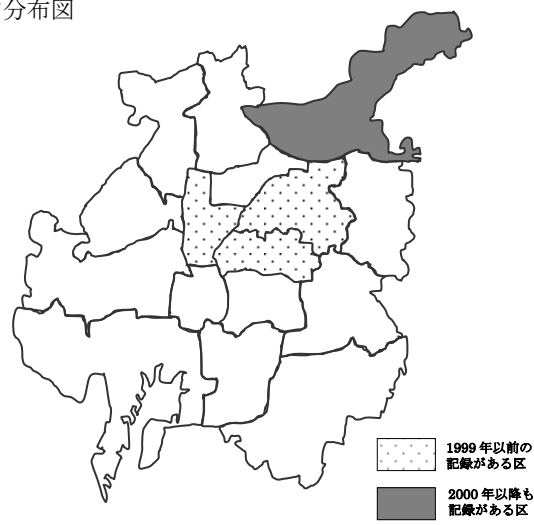
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

(執筆者 高崎保郎)



キイロサナエ 雄成虫 千種区東山公園、1951年5月30日、
幼虫 守山区上志段味、2013年4月29日、
いずれも高崎保郎 採集

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 エゾトンボ科>

エゾトンボ *Somatochlora viridiaenea* (Uhler)

カテゴリー

【選定理由】

市内での記録は極く僅かしかない。幼虫の生息に適する湿地も限られる。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長60mm内外、金属緑色の中型種、同属他種に似るが、尾部付属器、腹部黄斑の有無などにより識別できる。

幼虫は肢が長く、同属他種に酷似するが、背棘の形状の微妙な差異などで識別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和区、守山区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

丘陵地から山地にかけて局所的に分布する。

【国内の分布】

北海道全域、本州、四国、九州の一部。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。



エゾトンボ 雌
千種区田代町、2010年9月18日、安藤泰樹 採集、
横地鋭典 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は丘陵から山地にかけての明るい大小の湿地に生息する。7月頃の羽化期から秋にかけて雄は湿地や水田上、林間の空地や路上を地上1~2mの高さでゆっくり行きつ戻りつする。幼虫期は1~3年程度と見られる。この地方では少ないが稀に比較的多数見ることもある。成虫の出現期は7~9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

県全体でも現在では確認されている産地は少なく、名古屋市での記録は数例以下である。比較的近年では守山区大森八竜湿地（2000年）と千種区田代町の平和公園（2010年）での記録があり、数少ない市内の湿地に極く稀ではあるが現在のところ残存していると見られる。隣接する長久手市では多くはないが安定的に発生している。

都市周辺にあつては、丘陵地形の開発による湿地の消失、1990年代に入ってからのも水傾向の気象の影響、山地にあつてはダム改修の水位上昇による池上部の湿地の縮小、消滅などによる生息地の減少が主な減少要因であろう。

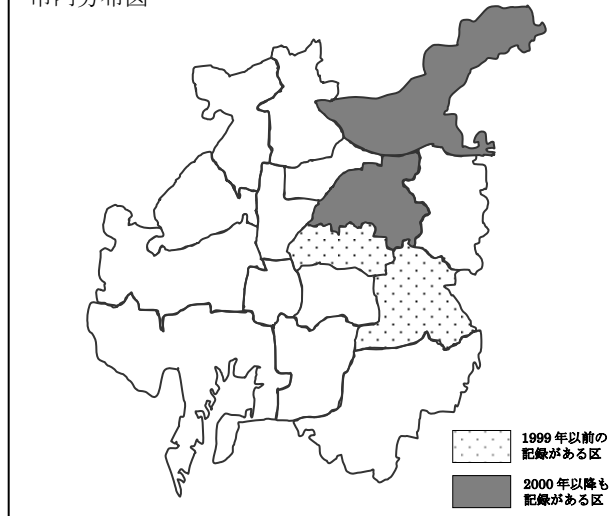
【保全上の留意点】

集水域である周辺の林も含む湿地の保全が必要である。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
安藤泰樹, 2011. 名古屋市千種区のエゾトンボの記録. 佳香蝶, 63(247):79.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

キトンボ *Sympetrum croceolum* (Selys)**【選定理由】**

発生源が限られもともと個体数は多くなかったが、近年は市内で見ることがなくなった。県内でも著しく減少した。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫の体長は42mm内外。体に斑紋はなく橙黄色一色で、翅は前後翅共基部と前縁が鮮やかな橙黄色を呈し、アカトンボでは最も美しい。

幼虫は背棘を第9節に有することが特徴。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、西区、中村区、中区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

現在は主として丘陵から低山地にかけて局所的に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。



キトンボ 雄
名東区猪高町上社猪高緑地、1986年10月18日、
高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地、低山地に所在する水生植物が豊富で樹林を伴う池沼で見られるが、散発的で個体数も少なく多産地以外ではたまたま飛来したという印象が強い。安定的多個体の発生源は、水が清澈で遠浅の岸にタヌキモ類が繁茂するような産卵に適する環境を有する池である。

岸に沿って沈水植物が存在する水面上空を連結して飛び産卵する。成虫出現期は6～11月であるが、羽化は秋まで続き多産地にあつては翌年1月初・中旬積雪上に静止する個体を見、かなり耐寒性を有する。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては名古屋城水堀や南区の池など平地でも見られた。現在市内では発見できないが、飛来の可能性もなくはない。隣接する尾張東部丘陵で極く稀に飛来個体を見ることがあり、どこかに発生源が存在するのであろうが、県全体でも近年安定的な発生地は知られていない。平地から低山地にかけての産卵に適する池が減ったことが減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内では絶滅状態であるが、一般的には水生植物が豊富で産卵の適地となる池沼の保全が必要である。

【特記事項】

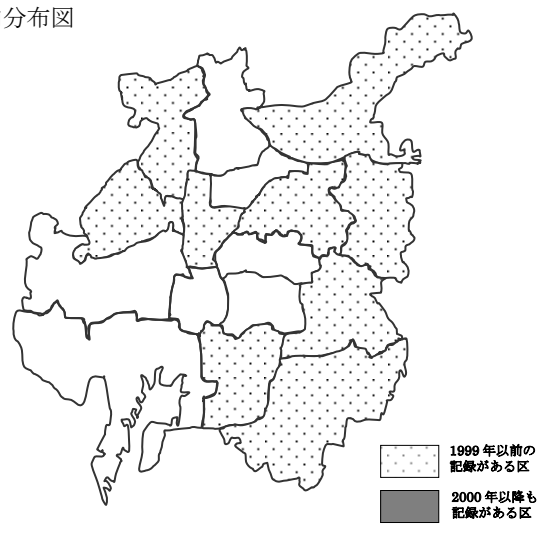
近傍では1980年代末まで、瀬戸市海上の森篠田砂防地に多産した。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

(執筆者 高崎保郎)

市内分布図



昆虫類 <バッタ目 クツワムシ科>

クツワムシ *Mecopoda niponensis* (de Haan)**【選定理由】**

‘鳴く虫’の代表的種類。林縁のマント群落や河川敷のクズの繁茂するような草地に見られる。こうした環境は開発や整備のため減少しつつあり本種の存続が懸念される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

有翅。雌腹端の産卵器は直刀状で 27～31mm ほど。愛知県内産直翅類の内では最大級の種類。体色は緑色のものと褐色のものがある。雄の翅は幅広く短め、雌では幅は狭く長め。

体長（翅端まで）は雄 49～55mm、雌 51～67mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

瑞穂区、中区。

【県内の分布】

知多半島、渥美半島を含め広く分布する。岡崎市、西尾市、犬山市、瀬戸市、豊田市（足助町、猿投町、笹戸町など）南知多町、武豊町、美浜町、渥美町、作手村（豊根地区）など。

【国内の分布】

本州、四国、九州（対馬を含む）など。

【世界の分布】

中国、韓国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

広葉樹林林縁のマント群落や河川敷・堤防のり面などのクズが繁茂するような草地などに見られる。夜間は草上に出て“ガチャガチャ……”と大きな声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の一つは瑞穂区山崎川。この場所はコンクリートブロックで護岸されてしまったため、本種の最近の生息は確認できていない。中区の記録は、人為的な移動を含め、全くの偶産と考えられる。

【保全上の留意点】

河川敷や堤防のり面などの草本の過度の刈り込みを控え、クズやその他の丈の高い草も適度に刈り残すこと。また、広葉樹林のマント群落の刈り込みを控え、適度に残すこと。

【特記事項】

天白区天白川河川敷には、別種タイワンクツワムシが生息している。

この種も河川敷の草刈りにより生息数が減少傾向にあるため、保護対策を考慮する必要があるかもしれない。

【関連文献】

岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目 (2). 愛知県の昆虫 (下), pp.5-20. 愛知県.

日浦 勇, 1993. クツワムシ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.65. 保育社, 大阪.

水野利彦, 2008. 新修 名古屋市史 資料編 自然 目録, p.99. 名古屋市.

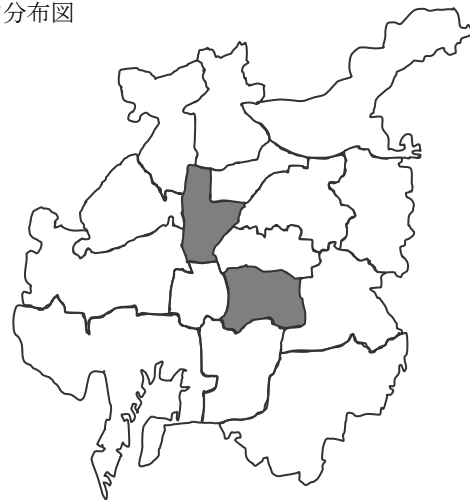
日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.130, p.440. 北海道大学出版会, 北海道.



クツワムシ

知多郡美浜町、1999年10月、岡田正哉 撮影

市内分布図



(執筆者 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <カメムシ目 グンバイウンカ科>

ハウチワウンカ *Trypetimorpha japonica* Ishihara**【選定理由】**

全国的にも産地が限定され、特に低地の湿地環境に生息するため、開発などで生息環境が減少している。
市内では守山区東谷山における古い記録しか存在しない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長約 3mm の非常に小型のグンバイウンカの一つである。

後脚脛節の側棘は 2 本。前翅中央部が黒色で、そこから外縁に向かって放射状に黒色帯が見られる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山から唯一の記録がある。

【県内の分布】

豊田市、みよし市、大府市、春日井市、日進市など。

【国内の分布】

本州（関東以西）、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島。



ハウチワウンカ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけて、ススキ・チガヤなどが点在して生育する湿地帯に生息する。草本類が繁茂する湿地よりも、砂礫地が広がる比較的明るい環境で見られる。

成虫は 8 月～9 月にかけて出現し、長翅型と短翅型が知られるが、長翅型は稀である。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年の生息情報はほとんど得られていない。東谷山麓の湿地は宅地造成などで大部分消失したとされ、生息環境は悪化している。東谷山における最近の調査でも発見できていない。

主として平野部の湿地環境に生息するため、宅地造成などで生息地そのものが消滅した。

【保全上の留意点】

特に平野部における湿地環境の保全および水源地である後背林を維持し、乾燥化を防ぐ必要がある。

【特記事項】

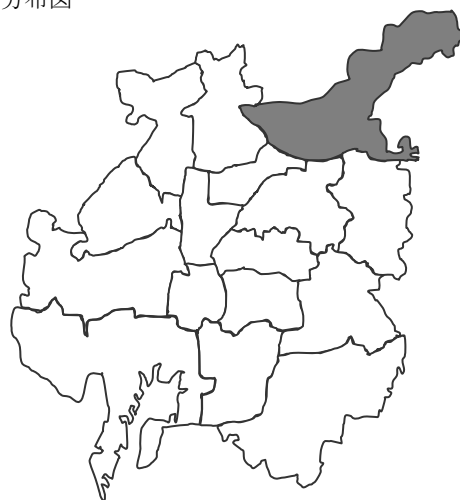
最近の調査で、県内では新たな産地が見つかった。

【関連文献】

堀 義宏, 1989. 都市環境下の昆虫相について (1) 名古屋市の類吻類. 名古屋市衛生研究所報, 35:118-123.
堀 義宏・浅岡孝知・原田猪津夫, 1990. 愛知県の類吻亜目. 愛知県の昆虫 (上), pp.105-122. 愛知県.

(執筆者 矢崎充彦)

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 アカジマウンカ科>

アカジマアシブトウナカ *Ommatidiotus japonicus* Y. Hori

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

これまで生息が確認された産地は、シラタマホシクサなど湿性植物が生育する都市近郊の低湿地である。植生遷移、埋め立てなどによって生息地そのものが消滅する危険が極めて大きい。

名古屋市がタイプ産地となっており、学術的にも重要である。

【形態】

体長は翅端まで、雄は約 4.2mm、雌は約 5.2mm。体色は灰緑色で、背面は頭頂から小楯板の先端まで赤色の条線がある

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区から唯一の記録がある。

【県内の分布】

新城市、豊田市、みよし市。

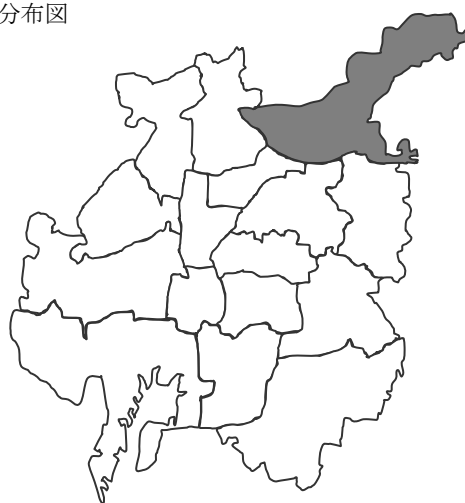
【国内の分布】

本州（東海地方）。

【世界の分布】

日本固有種。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

名古屋市東部丘陵帯に点在するシラタマホシクサなどが生育する湿地に限って生息する。

成虫は6月～9月にかけて得られるが、元々得難い種で、詳しい生態は不明である。

【現在の生息状況／減少の要因】

東谷山における近年の調査では確認されていない。県内でも最近の生息情報は得られておらず、既知産地のいくつかも消滅した。

湿地に生息するため、宅地造成などの埋め立てにより、生息地そのものが消滅した。

【関連文献】

Hori, Y., 1977. A new species of the genus *Ommatidiotus* (Homoptera, Issidae) from Japan. *Annotations Zoologicae Japonenses*, 50(2):127-130.

堀 義宏, 1982. 愛知県の半翅目. 昆虫と自然, 17(12):22-25.

堀 義宏, 1989. 都市環境下の昆虫相について (1) 名古屋市の頰吻類. 名古屋市衛生研究所報, (35):118-123.

堀 義宏・佐藤正孝, 1984. 半翅類. 愛知の動物, pp.99-107. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

堀 義宏・浅岡孝知・原田猪津夫, 1990. 愛知県の頰吻亜目. 愛知県の昆虫 (上), pp.105-122. 愛知県.

(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 アメンボ科>

オオアメンボ *Aquarius elongatus* (Uhler)**【選定理由】**

平野部から山地にかけて、ため池や河川上流域の緩流部に生息している。最近特に、平野部での生息確認ができにくくなった種の一つである。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長20～27mmで、本州産アメンボ類では、最大種である。通常、雄の方が雌よりも大型で、雄の大型個体では、中脚が顕著に長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、熱田区。東部丘陵帯を中心に広く分布していたと考えられるが、正式な記録がほとんど残っていない。

【県内の分布】

新城市、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市、春日井市、日進市、犬山市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、韓国（済州島）、台湾。



オオアメンボ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹林に囲まれた比較的水深の深い大きなため池などに生息し、やや薄暗い場所を好む。

夏以降になると、ため池から移動し、河川上流域の緩流部で見られる場合がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に丘陵地から山地にかけて、樹林に囲まれた比較的大きなため池に生息し、谷筋の砂防堰堤の水たまりや河川上流域の緩流部などで見られることもある。

平野部での減少の大きな要因としては、ため池の改修や埋め立て、水質の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されたため池の環境を維持すること。広い解放水面が必要であるため、スイレンやホテイアオイなど観賞用水草を軽々しく投入しないよう留意する必要がある。

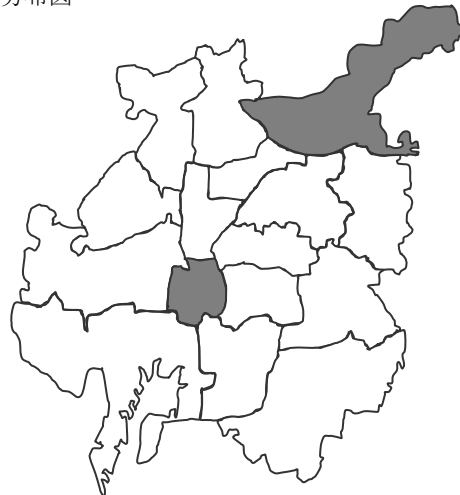
【特記事項】

吉富・長谷川（1997）では、かつて千種区東山公園に生息していたという情報が述べられているが、正式な記録は残されていない。

【引用文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
吉富博之・長谷川道明, 1997. 愛知県のアメンボ. 豊橋市博研報, (7):35-39.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 アメンボ科>

エサキアメンボ *Limnporus esakii* (Miyamoto)**【選定理由】**

全国的にも生息地が限定され、ため池環境の悪化により、生息適地が年々少なくなっていると考えられる。
市内ではごく最近になって生息地が明らかになった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 8~10mm の小型で細身のアメンボである。体色は暗赤褐色~赤褐色で、体側に銀白色の毛による縦帯をもつ。
触角は第4節が最も長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区（名古屋城濠）、名東区（塚ノ杵池）の2ヶ所。

【県内の分布】

新城市、豊橋市、田原市、豊田市、安城市、春日井市、日進市、一宮市、東浦町、常滑市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。



エサキアメンボ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけて、ヨシやガマなど抽水植物が繁茂するため池に生息する。

抽水植物帯の中に生息し、開けた水面上にはほとんど出てこない。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城の濠では抽水植物が減少傾向にあり、生息環境の悪化が見られたが、2014年の調査では、多くの個体を確認できた。塚ノ杵池は安定した産地と考えられるが、オオクチバス（ブラックバス）などの外来種が入り込んでおり、注意が必要である。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

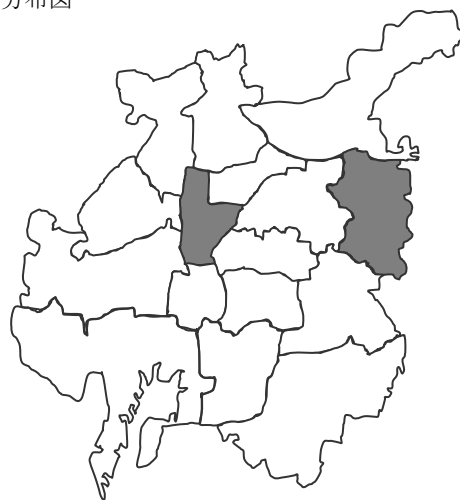
【保全上の留意点】

生活排水の流入などによる水質悪化を防ぎ、現存する抽水植物帯を保全する。特に抽水植物帯は本種の生息に必須の条件であるため、ため池の改修作業などではこれが失われないよう十分に注意する必要がある。

【引用文献】

矢崎充彦, 2010. 名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類. 佳香蝶, 62(243):51-55.

市内分布図



(執筆 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ハンミョウ科>

ホソハンミョウ *Cicindela gracilis* Pallas**【選定理由】**

もともと多い種ではない上に、主要な生息地が耕作地や河川敷であるため、人為的な影響を受けやすい。かつては尾張地方の平野部各地に生息していたと考えられるが、都市化や河川整備による生息地の消失のため、現在では発見が困難になっている。

【形態】

後翅が退化して肩が丸まった細型の種。光沢のない黒色で、上翅後半部側部に2対の黄色の紋がある。また上翅後方に赤色の紋をもつ型もある。

体長は10～12mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区小幡、庄内川勝川橋、中村区日比野町（河路，1986）。

【県内の分布】

尾張地方の平野部のみ知られる。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、シベリア。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



ホソハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

桑畑、果樹園などの耕作地や、河川敷の草地と裸地が混在するような環境に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

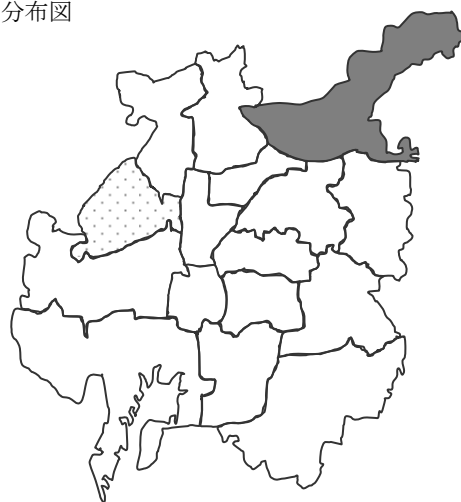
守山区内の庄内川河川敷では1980年代までは生息情報がある。庄内川河川敷には、わずかながら生息可能な環境が残っているので、現在も生息している可能性は高いが、個体数はかなり少ないものと推測される。

減少の要因としては、宅地造成、耕作地の消失、河川改修などによって生息環境が失われたこと、生息地であった耕作地での農薬使用などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在の生息地である河川敷をむやみに開発しないこと。また、生息地周辺では、農薬の使用を制限するなどの配慮が必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

河路掛吾，1986. ホソハンミョウの記録. 佳香蝶，38(148):60.

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コガシラミズムシ科>

マダラコガシラミズムシ *Haliphus sharpi* Wehncke**【選定理由】**

平野部から丘陵地にかけて生息したと推測されるが、平野部の多様な水域の減少で生息地が激減したと考えられ、近年の生息情報を持たない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3.3～3.8mm。上翅の黒紋は明瞭で、基部には横紋がある。側方の円紋および中央紋より斜め前方の紋が明瞭である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区福田川（名古屋市環境保全局，1996）。

【県内の分布】

1961年に安城市から記録されている。現在は、豊明市、豊橋市で生息が確認されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平野部の止水域に生息し、成長は5月～8月にかけて見られる。

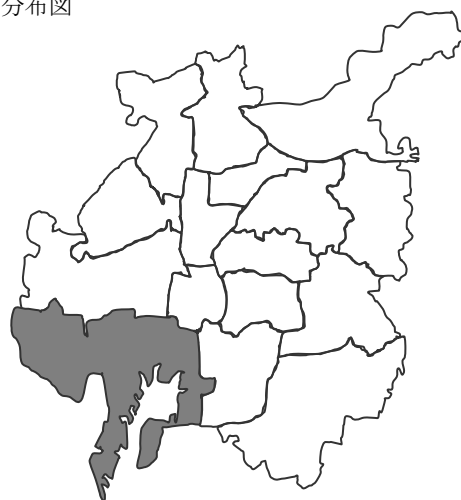
【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発、水田の減少、圃場整備などにより生息地が減少、また農薬散布や生活污水により環境を受けたと考えられる。

【保全上の留意点】

現在ある自然環境に近い池や水辺環境を保全することが、将来的な回復の可能性を残すことになると思われる。

市内分布図

**【引用文献】**

名古屋市環境保全局，1996．平成8年版 名古屋市環境白書（資料編）．名古屋市．

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.293．同県環境部自然保護課．

神谷一男，1961．東海地方の珍しい昆虫．名古屋鉄道刊，名古屋．

中根猛彦，1985．日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討．北九州の昆虫，32(2):61-67．

佐藤正孝，1984．日本産水棲甲虫の分類学的覚え書き，Ⅰ．甲虫ニュース，(65):1-4．

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），愛知県，pp.200-477．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科>

キボシチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky)**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧IB類

【形態】

体長3.0～3.4mm。体型はやや長い逆卵形。背面は微細印刻を持ち強い光沢がある。頭部、前胸は淡赤褐色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白区（池竹，2012）。

【県内の分布】

日進市（戸田ほか，2013）、長久手町（戸田ほか，2013）、美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、タイ、ミャンマー、ベトナム、インド。



キボシチビコツブゲンゴロウ

天白区、2011年9月26日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、ヨシやガマなどの抽水植物が豊富な池に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在、発見された溜池は、池干しが行われた後、開放水面が減少し簡単には本種の確認ができない状態にある。安易な池干しは、本種などの昆虫の極端な減少を招く。

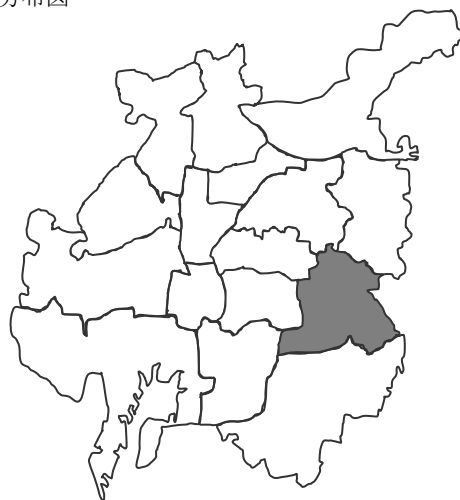
【保全上の留意点】

市内のため池では、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

佐藤（1984）によって1962年と1963年に知多半島の Gonodo-ike から得られた個体が日本初記録として報告された。その後の記録が無かったが、愛知県からは48年ぶりに名古屋市で確認された（池竹，2012）。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（I）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県.
池竹弘旭，2012. キボシチビコツブゲンゴロウを愛知県名古屋市で採集. ホシザキグリーン財団研究報告，(15):10.
戸田尚希・蟹江 昇，2013. 愛知県から採集された甲虫II. 佳香蝶，65(256):53-56. 名古屋昆虫同好会.

【関連文献】

佐藤正孝，1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書I. 甲虫ニュース，(65):1-4.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑II，pl.33,p.182. 保育社，大阪.
森 正人・北山 昭，2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版，東京.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

コミズスマシ *Gyrinus curtus* Motschulsky

カテゴリー

【選定理由】

かつて北海道から九州にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

体長 4.9～5.6mm。成虫は水面の上下を同時に見られるように複眼が分かれ、脚は扁平で水面を高速で泳ぎ回れるようになっている。比較的小型。

【分布の概要】

【市内の分布】

緑区（佐藤，1990）。

【県内の分布】

豊田市（足助町）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、千島。

【世界の分布】

サハリン。



【生息地の環境／生態的特性】

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある水域に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

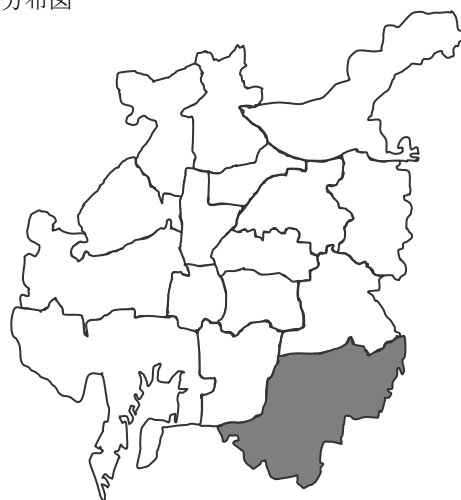
【保全上の留意点】

市内のため池では、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

ミズスマシと似ているが、体長は少し小さい。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.37, pp.202-203．保育社，大阪．

新修名古屋市史資料編集委員会（編），2008．昆虫類．新修名古屋市史資料編 自然，pp.102-156．名古屋市．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平野から山間部まで普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池も無くなり、その他生育に適した水域が開発によって失われ、生息地が極端に少なくなった。近年極端に数を減らしている種である。

【形態】

体長 33～44mm。後胸突起は腹部第2節に達する、腹部は無毛。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中村区中村公園（森・吉田，2006，採集は1954年）。

【県内の分布】

弥富市鍋田干拓、犬山市池野、春日井市、尾張旭市森林公園、豊根村三沢、豊川市一宮町日吉原、岡崎市秦梨、安城市池浦町。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾。



ガムシ

【生息地の環境／生態的特性】

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来した。

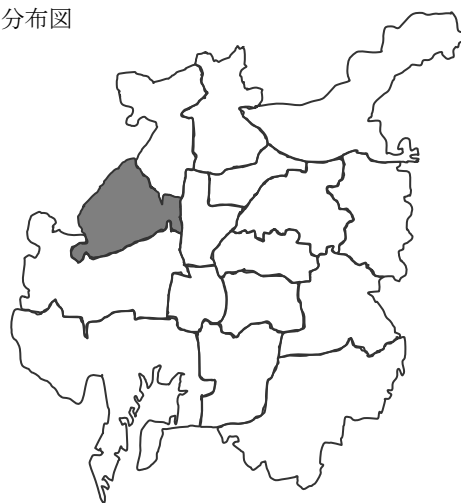
【現在の生息状況／減少の要因】

水田の放棄、ため池の消失、汚水の流入などによって減少したと思われる。近年の減少は著しい。

【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

市内分布図

**【引用文献】**

森 功一・吉田拓朗，2006．名古屋市内で採れた甲虫の古い記録．佳香蝶，58(225):21-23．

【関連文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp. 204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

上野俊一・黒沢吉彦・佐藤正孝（編），1985．原色日本甲虫図鑑（II），p. 215．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 シデムシ科>

ヤマトモンシデムシ *Nicrophorus japonicus* Harold**【選定理由】**

平野部に生息する代表的なシデムシとして知られていた種であるが、小動物の死骸を埋葬して産卵する習性のため、良好な自然環境が必要であり、減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

黒色で、各上翅には2帯の鮮やかな赤色の帯状紋がある。帯状紋は、会合線に達することはない、中に黒点を含まない。後脚頸節は強く湾曲する。

体長は14～20mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区で記録がある。

【県内の分布】

尾張地方～西三河平野部で記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾。



ヤマトモンシデムシ

【生息地の環境／生態的特性】

平野部に生息し、小動物の死体に集まる。

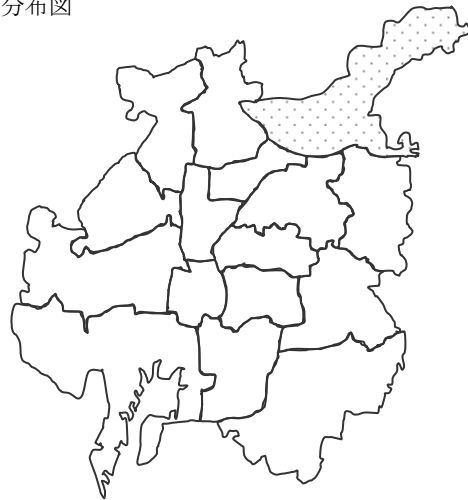
【現在の生息状況／減少の要因】

最近の生息情報はほとんど得られていない。残されている記録、標本はいずれも1950年代のものである。減少の要因としては、都市化とともに生息環境が失われたこと。野生動物の減少や衛生環境の改善により、餌である動物の死体等がなくなったことが考えられる。

【保全上の留意点】

減少の背景に衛生環境の改善による影響も少なく考えられるので、保全対策は簡単ではない。河川敷など比較的自然環境が残された地域を維持することが必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文, 1956. 東海甲虫誌 (2). 佳香蝶, 8(28):1-8.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 コガネムシ科>

アカマダラハナムグリ *Poecilophilides rusticola* (Burmeister)**【選定理由】**

幼虫は、猛禽類やサギ類などの巣材の中で成育し、成虫は樹液に集まる。よって猛禽類の減少が、本種の減少に深く関与している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	情報不足

【形態】

背面は全体に赤褐色で小黑点が散在する。腹面は赤褐色の中胸突起を除いて黒色。生きている時は鮮やかなオレンジ色をしているが、死ぬと暗赤色になってしまう。前脚頸節には2個の外歯がある。

体長は14～20mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区八事と東区で古い記録(穂積, 1958)がある。

【県内の分布】

三河地方の丘陵地に記録が多い。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、シベリア東部、中国、モンゴル。



アカマダラハナムグリ

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地の雑木林に生息する。

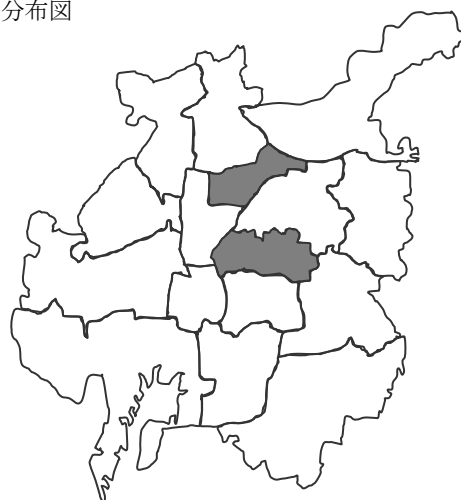
【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の記録は1950年代のもので、少なくとも近年同好会誌などに掲載された採集報告はない。豊田市、長久手市では生息している。

【保全上の留意点】

猛禽類の営巣する里山などを保全する必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文, 1958. 東海甲虫誌 (第6報). 佳香蝶, 10(34):1-14.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 タマムシ科>

クロマダラタマムシ *Nipponobuprestis querceti* (E. Saunders)**【選定理由】**

エノキなどの大木に見られるが個体数は少ない。生息地は平野部に偏る傾向があるが、平野部に残存する大木は少なく、都市化や乾燥化に伴い生息できる環境は縮小している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長17～28mm。黒色で、赤銅あるいは青緑色の光沢を帯び、上翅には多数の黄白色の小円紋を持つ。近似のアオマダラタマムシとは、体色の他、上翅の陥凹紋を欠くことなどで区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区、名古屋城（長谷川，2002，採集は1950年採集）。

【県内の分布】

稲沢市（穂積，1965）、岡崎市（大平，1985）、豊橋市（穂積，1990）。

【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州。

【世界の分布】

中国中部。



クロマダラタマムシ

岡崎市矢作町、1998年7月26日、戸田尚希 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平野部及び丘陵部のエノキ等の大径木のある雑木林に生息。成虫は5～7月に出現し、樹幹部に見られ、幼虫はウロの周囲や枯死部で見つかることが多い。

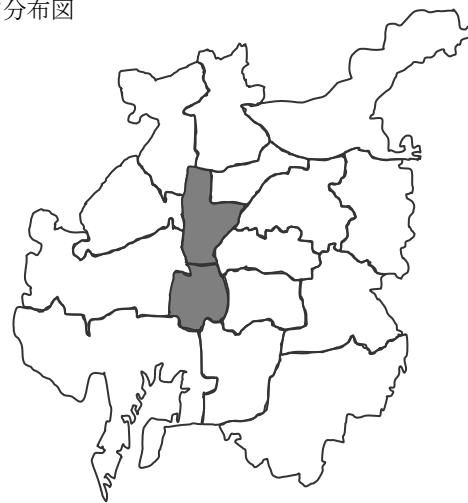
【現在の生息状況／減少の要因】

近年の記録は聞かれないが、私信によると熱田神宮から採集例がある。

【保全上の留意点】

大径木が寺社林や河畔林に多い為、現存する発生木並びに周辺環境の保全が急務と思われる。

市内分布図

**【引用文献】**

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵 森部一男コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．

穂積俊文，1965．船越俊平氏の標本箱より．ナビニュース，55:550．

穂積俊文，1990．愛知県の甲虫類（Ⅱ）．愛知県の昆虫（上），pp.232-308．愛知県農地林務部自然保護課．

大平仁夫，1985．岡崎市の昆虫類．岡崎市史，自然，pp.1024-1096．

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生動物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.298．同県環境部自然保護課．

蟹江昇・戸田尚樹，2008．愛知県のタマムシ．佳香蝶，60(234):207-230．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ホタル科>

ゲンジボタル *Luciola cruciata* Motschulsky**【選定理由】**

清流に生息する種で、戦前には瑞穂区の石川橋周辺（山崎川）にも生息していた。河川の汚れや河川改修などによって減少した他、「保護」の名の下で行われる放流事業や他個体群の移入による遺伝子汚染の脅威も拡大している。

【形態】

黒色。前胸背は赤色で、十字の黒紋がある。
体長は10～16mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

戦前までは市内各地に見られた。現在見られる生息地には少なからず人の手が加わっており、どこまで自然個体群と判断していいのか難しい。市内での自然分布域は、守山区に1ヶ所だけ残存している。

【県内の分布】

丘陵地～山地にかけて広く分布する。

【国内の分布】

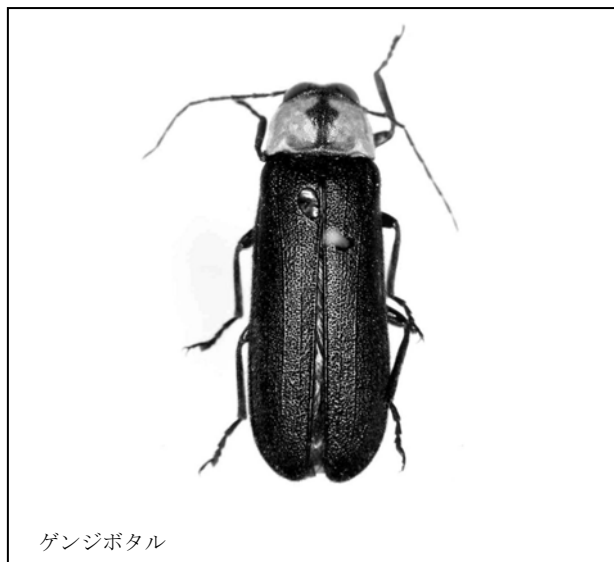
本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



ゲンジボタル

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫の餌であるカワニナ類が生息する清流に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

放流事業が盛んに行われているため、天然の個体群の生息状況については、把握しにくくなっているが、守山区には自然個体群と思われるものが生息している。減少の要因としては、河川の汚れや改修による生息地の消失が主要因として考えられる。また目には見えないが、放流事業による遺伝子汚染がかなり進行していると見るべきであろう。

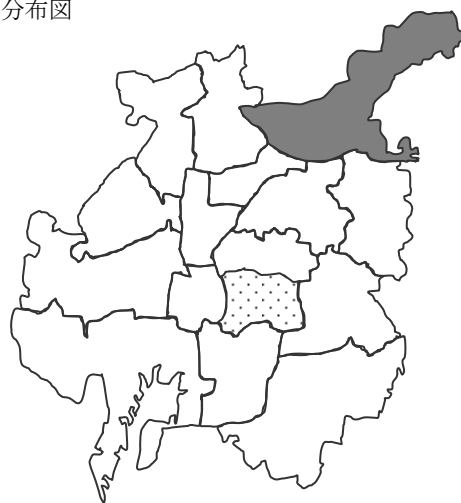
【保全上の留意点】

ホタル保護の名目の下、各地で放流事業が盛んに行われているが、安易な放流は、生態系の攪乱や遺伝子汚染を招き、わずかに生き残った自然個体群を絶滅させかねない危険な行為であることを認識する必要がある。

【関連文献】

名古屋市環境保全局, 1994. なごやのほたる, 24pp. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ホタル科>

ヘイケボタル *Luciola lateralis* Motschulsky**【選定理由】**

水田や池、湿地などに生息するホタルで、かつては市内各地に生息していたと考えられるが、非常に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

ゲンジボタルに似るが小型で前胸背中央の黒条は十字にならない。

体長は7～10mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

確実な採集記録として残されているのは千種区東山のみであるが、少なくとも戦前は各地に生息していたものと思われる。

【県内の分布】

平地から山地にかけて広く記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、シベリア。



ヘイケボタル

【生息地の環境／生態的特性】

水田、湿地、池などに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市街化によって水田は宅地になり、ため池は埋め立てられ、生息できる場がほとんど失われた。また、畦をコンクリートで固める農業の構造改善による蛹化場所の亡失や農業による水質悪化とともに水田は、ホタルの生息できる場所ではなくなった。

人間生活の影響で、ごく普通であった種が激減した例のひとつである。

【保全上の留意点】

生息環境としての水辺環境の回復が第一の条件である。その後に自然での定着を待つことが本来の方法である。しかし、生息域の分断から、市内での回復は見込めないと思われるので、一時的には近隣からの移入も必要であろう。

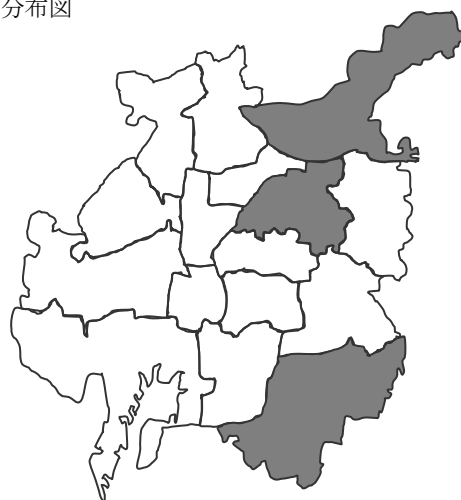
【引用文献】

高橋敬, 1975. 甲虫雑記 (1), 名古屋市東山の甲虫. 佳香蝶, 27(101):9-10.

【関連文献】

名古屋市環境保全局, 1994. なごやのほたる. 24pp. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <チョウ目 ツトガ科>

マエジロツトガ *Pseudocatharylla infixella* (Walker)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

全国的に既知産地が局限されている。愛知県では名古屋市の庄内川河口に産するほか、旧弥富町鍋田でも記録されている。汽水域に近い河口付近のヨシ群落を生息地とするため、環境の改変により容易に産地が消滅する恐れがある。

【形態】

開張雄 17~20mm、雌 23~28mm。年2化で、1化目の個体は翅の地色は淡黒褐色、2化目の個体は全体に銀白色、前縁部側に顕著な白帯~淡褐色帯を現す。1・2化とも雄雌で翅型と大きさが異なり、雌は大型で前翅が長く翅頂は突出する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区南陽町七島新田流作場~珍寿野の、庄内川河口付近のヨシ原に限って生息する。

【県内の分布】

上記の他に旧弥富町鍋田に記録がある。

【国内の分布】

千葉県、神奈川県、三重県、徳島県、佐賀県の河口部から記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国。



マエジロツトガ

港区南陽町流作場、2009年9月20日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低湿地性の蛾で、いずれの産地も河川の河口のヨシ原から記録されている。昼間はヨシの桿上に静止しているが、夜間灯火に飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口部のヨシ原のうち河口から約1kmまでに多い。環境は大雨による出水・水没、港湾の浚渫等から必ずしも安定した状況ではない。ゴミの漂着も著しく、生息環境は悪化している。成虫は水銀灯に誘引され、分布が攪乱される恐れがある。

【保全上の留意点】

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。汽水域を含め特異な生態系であり、希少な生物が多く生息している。護岸改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

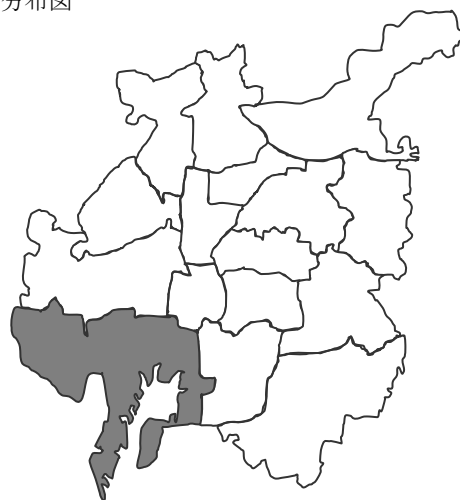
【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.
田中多喜彦, 2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶, 63(247):63-67.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか(編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I~IV. 学習研究社, 東京.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ツトガ科>

エンスイミズメイガ *Eristena argentata* Yoshiyasu

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

和名の「塩水」が示すように、河口など海水が混じる汽水域に生息する珍しいガであり、名古屋市内では、港区の庄内川・新川河口に生息するが、環境の悪化で生息地が狭められている。

【形態】

開張12～16mm、小型のミズメイガで、翅は細長く、前後翅とも地色は橙色。白色～銀白色で黒に縁取られた縦線が、前後翅とも翅底から翅頂付近に向かって走り、前翅には同様な横線も見られる。後翅外縁に明瞭な2黒紋をもつ。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川・新川河口の、港区南陽町七島新田珍寿野に多産することが2009年に分かった。

【県内の分布】

旧弥富町鍋田の標本がパラタイプとなっていて、鍋田が唯一の既知産地。

【国内の分布】

中部地方以西に分布し、愛知県、三重県、愛媛県、熊本県、対馬、奄美大島から記録がある。現状では日本の特産種である。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫はミズメイガの名が示すように、気管の入り込んだエラで呼吸をする水中生活者である。幼虫は食草である汽水域の藻をつづて巣をつくり、中に隠れて生活するという特異な生態をもつ。寄主植物としては、タニコケモドキ（フジマツモ科）、ホソアヤギヌ（コノハノリ科）が知られている。

成虫は5月から10月にかけて見られ、本州では年3化。発生地を遠く離れることはなく、昼間は汽水域のヨシに静止している。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川・新川河口は著名な藤前干潟が拡がり、環境保全への一定の配慮がなされている。しかしヨシ原に多量のゴミが流れつくなど、水質環境は良好とはいえない。

2009年の調査では庄内川河口に塩生藻類が生育していたが、面積は広くなかった。

【保全上の留意点】

新川は上流の漁協への航路となっている。将来、庄内川河口の砂泥地も含め、過度の川底の浚渫（しゅんせつ）などが行われると、簡単に生息地が破壊されてしまう。河口付近の環境の改変には、生態的見地からも十分な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
間野隆裕，1989. 木曽川河口の湿地の蛾. 蛾類通信，(143):283-287.
田中多喜彦，2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶，63(247):63-67.

【関連文献】

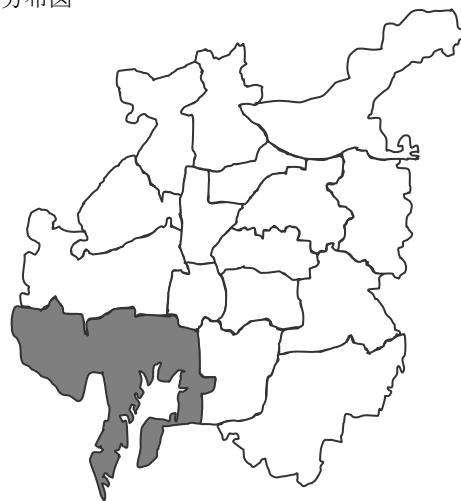
Yoshiyasu, H., 1988. A New Estuarine and an Unrecorded Species of the Nymphulinae (Lepidoptera, Pyralidae). *Kontyu*, 56(1):35-44.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.



エンスイミズメイガ

港区南陽町珍寿野、2009年8月18日、田中多喜彦 採集

市内分布図



(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

低地・丘陵地のため池や河川敷などに生育する、ガマなどの大型の挺水植物を食草とする低湿地の蛾であるが、今日埋め立てや河川改修などにより、本種の生息環境は全国的に悪化の一途をたどり、レッドリストにあげる県が多い。

【形態】

開張 35～52mm。雌は雄に比べ大型で、腹部はきわめて長い。前翅は全面濃赤褐色で、外横線はわずかに黒点列が現れる。中室下縁に沿って黒色条があり、中室端に白点をもつ。後翅は淡い黄白色で、外縁部が暗化する個体もある。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区中平（2003）が唯一の記録。

【県内の分布】

田原市蔵王山（1981）の記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布するが、湿性環境に産し、産地は局限される。

【世界の分布】

中国（黒龍江省）、ロシア南東部。



オオチャバネヨトウ

天白区中平、2003年6月30日、福住和也 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシ・ガマなどの群生する沼沢地が本種の住みかであるが、都市部のこのような環境は十分な調査がなされずに埋め立てられる場合も多い。年1化で7～8月に出現。一般に灯火採集では雄が得がたいという。

大型の湿性単子葉植物の茎に入り込んで食害するシンクイムシ（borer）で、ガマの茎の中から幼虫が発見されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

市街地である天白区中平の記録は、おそらく近くの日白区島田の大根池あたりで発生した個体が飛来したものであろう。成虫に移動性のある可能性がある。

減少の要因は、湿性環境の喪失である。

【保全上の留意点】

現存する湿性環境をできるだけ保存したい。特に公園緑地内にあるため池や小河川などの湿性環境は、過度な整備や池畔の改修などを避け、多機能的な自然を温存したい。

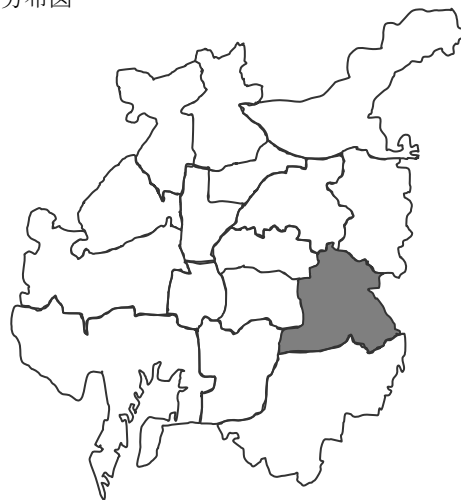
【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.
小木広行，1982. オオチャバネヨトウとキスジウスキヨトウの幼虫. 誘蛾灯，87:11-13.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

明るい湿性草原に多いヒョウモンチョウ類の1種であるが、近年、県内の草地で観察される個体数が減少し、名古屋市市内でも同様に観察されることが少なくなっている。

【形態】

開張 58～66mm。雌は大型で翅型は丸味をおび、前縁の前翅端近くに三角形の白紋がある。雄には前翅の表面の後縁近くに翅脈に沿って2本の黒色発香鱗条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

瑞穂区、北区、守山区で確認されている。

【県内の分布】

丘陵地から山地まで、また半島部に至るまで広範囲に記録されている。

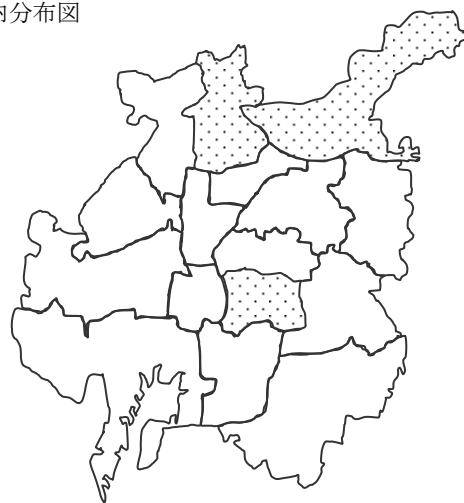
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

サハリン、朝鮮、中国からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

林縁や湿地周辺の草地に生息し、愛知県では「湿地のヒョウモンチョウ」といわれるほど、ヒメヒカゲを産したような湿性草原に多い。年1化で6月に現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消し、秋に活動を再開しアザミ類、ヒヨドリバナ等の花に吸蜜を訪れる。県下での自然状態での食草は不明であるが、タチツボスミレ、フモトスミレなど各種のスミレ類を食べるという。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、名古屋市市内を始め周辺の尾張平野、知多半島などの低地での観察例が著しく少なくなり、以前比較的多くみられた三河の低山地から奥三河の山地でも個体数が減少している。自然状態での食草の好みなど、生態の主要部分の多くが不明なため、減少の理由は明らかではない。

【保全上の留意点】

全国的な本種の減少により、環境省は2012年のレッドリスト第4次改訂で、本種を準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類にランクアップしている。今日、草原性のチョウが全国的に減少傾向にあるが、本種の場合は生態に不明な点が多く、具体的な保全対策の提案が困難である。

しかし市内に残存する湿地や湿性草原は、他にも多くのレッドリスト掲載種が生息するなど、生態的価値が高いので、周辺の二次林環境も含めた永続的な保全が必要である。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.44, p.209. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅱ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ウラギンヒョウモン *Fabriciana adippe pallescens* (Butler)

カテゴリー

【選定理由】

代表的な草原性のヒョウモンの一つで、北海道から九州にかけて広く分布しているが、山地草原に多く、平地～低山地ではむしろ少ない種である。近年全国的に個体数の減少がみられ、名古屋市内でも減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 58～68mm。雌は雄より大型で翅形は幅広く、地色は濃色。後翅裏面の銀白紋は大きく明瞭、亜外縁の銀白斑紋列の形は山型。雄の前翅の表面には2本の発香鱗条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

瑞穂区、千種区平和公園、守山区小幡、庄内川畔で古い記録がある。平和公園南部では2005年にも1雌が採集された。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河山地まで広く記録されている。近年、個体数の減少が著しい。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

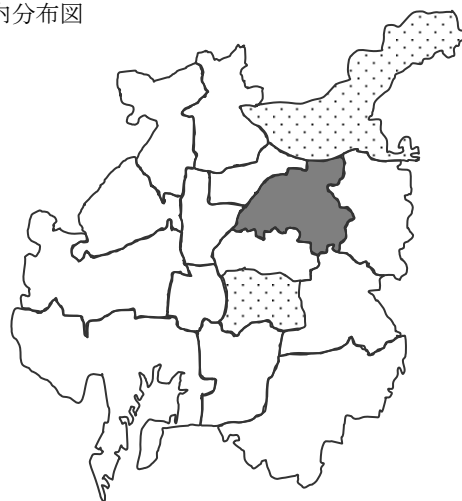
【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

広々とした明るい草原を好み、アザミ類など草花の多く咲いている山地の草原では、群棲することがある。年に1回発生し、平地では6月上旬から現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消すが、秋に再び現れる。幼虫はタチツボスミレ等のスミレ類を食草としている。

市内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

近年尾張平野と丘陵地で本種を観察した報告がほとんどなく、愛知県内でかつて多産した山間盆地の周囲にある草原でも、花を訪れる個体が著しく減少している。近年の減少の要因は、正確にはわからないが、草原性ヒョウモンチョウ類の減少傾向の中で、本種は最も顕著な例である。

【保全上の留意点】

ウラギンズジヒョウモンと同様、自然状態での食草の好みや周年経過など、生態の主要部分が必ずしも明らかでなく、保全対策が難しい。しかし市内に残存する自然の草地環境は貴重であり、生態的価値が高いため、できる限り永続的な保全が必要であろう。極力農薬の散布等の化学的汚染をしないように配慮したい。

【特記事項】

本種は、DNAの知見や翅形、発香鱗条の形状、交尾器の形状等から、系統の異なる複数の別種が含まれていることが示されている（新川・石川，2005）。中部地方ではサトウラギンヒョウモンとヤマウラギンヒョウモンが混じっている可能性がある。名古屋市内に産するものは、前者の可能性が高いが、市内産の古い標本が過去に図示されていないので、本書では学研日本産蝶類標準図鑑（白水，2006）に従い、ウラギンヒョウモンとして表示する。

【引用文献】

白水 隆，2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社，東京.
新川 勉・石川 統，2005. 分子系統によるウラギンヒョウモン3種と形態. 昆虫と自然，40(13):4-7. ニューサイエンス社.

【関連文献】

愛知県，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.
川副昭人・若林守男，1976. 原色日本蝶類図鑑，pl.46,p.217. 保育社，大阪.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか，1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫（下），pp.21-95. 愛知県.
中島悦雄，2005. 名古屋市千種区でウラギンヒョウモンを採集. 佳香蝶，58(225):24.
福田晴夫ほか，1983. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）. 保育社，大阪.
山田芳郎，2008. チョウ目（チョウ類）. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.464-475. 同 目録，pp.194-202. 名古屋市.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

ベニイトトンボ *Ceriagrion nipponicum* Asahina

カテゴリー

【選定理由】

平地から丘陵地にかけて局地的ながら広く産したが、生息地の消滅や環境悪化により産地が減少した。近年に限れば、多少増加傾向があるが、過去の状態には及ばない。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長38mm内外。雄は全体赤色、雌は赤みがかった黄色、無斑。体は太くイトトンボとしては大型である。目立つし識別容易なので指標種に適する。

幼虫は体が太く頭部が大きい。尾鰭は幅広く丸味がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、熱田区、中川区、港区、緑区、名東区、天白区に記録がある。

【県内の分布】

平野、丘陵に分布する。

【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。



ベニイトトンボ 雄

千種区星ヶ丘山手、2013年7月10日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水郷の側溝緩流、平地丘陵の浮葉植物と適度な密度の抽水植物が存在する池沼に好んで生息する。湿生植物が密生する開水面が乏しい環境や廃田、新設人工池にも生息することがある。山地には分布しない。

依存する池沼の環境に限られる傾向があるためか、産地は局地的であるが、移動分散力に富むと推定される調査データがある。成虫の出現期は6～10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

1940年代から2000年代初頭の間に、県全体では63ヶ所の生息地が記録された。調査の進展による新産地の増加に並行し、生息地である池沼の潰廃や環境悪化による消滅も進行し、2003年に残存する生息地は市内推定0ヶ所、県全体で10ヶ所に激減した。生息地の潰廃、環境悪化が減少の要因である。ところがその後名古屋市東部と尾張東部丘陵地帯を中心に生息地が増加に転じ、2012年までに市内で生息が確認された場所は5ヶ所になった。但し一時的定着の場所もある。

【保全上の留意点】

現生息地の良好な環境を保全すると共に、移動分散による飛来を受け入れられる水生植物に富む良好な池の保全にも留意する。

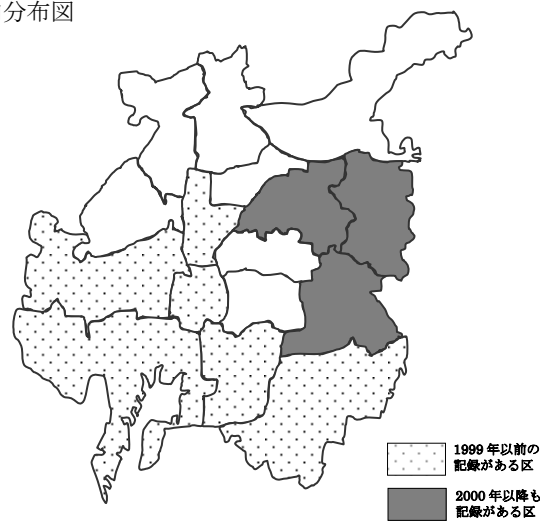
【特記事項】

上記増加状況に基づき、ランクを絶滅危惧Ⅱ類に引き下げた。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
 高崎保郎, 2003. 愛知県のベニイトトンボ(第2報). ため池の自然, (38):1-8.
 高崎保郎, 2012. 愛知県のベニイトトンボ(第3報). ため池の自然, (52):13-17.

市内分布図



(執筆 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

オオイトトンボ *Paracercion sieboldii* (Selys)**【選定理由】**

かつては平地、主として丘陵の池沼に普通のイトトンボの一種であったが、減少が著しく近年市内での記録がない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫の体長33mm内外、雄は水色と黒、雌は黄緑色に黒の色調。眼後斑が大きく洋なし型をしている点で他の同属3種と区別できる。

幼虫は同属他種との区別がむづかしい。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録された。

【県内の分布】

平野から主として丘陵地、山地にも分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島に分布する。



オオイトトンボ 雄

愛知県長久手市阿畑、1985年5月28日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から山地にかけての水生植物が豊富な池沼に生息する。関東以北では平地にも普通であるが、この地方での主たる生息地は丘陵から山地にかけてである。水面に浮かぶ植物質に、時に水中まで潜り産卵する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内にとどまらず愛知県全域での生息地の減少が著しい。安定的生息地は丘陵、山地の一部に限られるようになった。同属の4種の中では、生息水域の水質や環境の影響を最も受け易いと考えられる。西日本広域に減少傾向が見られるが、その要因は明らかでない。

【保全上の留意点】

市内では残存の可能性は低い、一般的には水生植物豊かな池沼の保全、ため池の人工的改変の阻止が必要である。

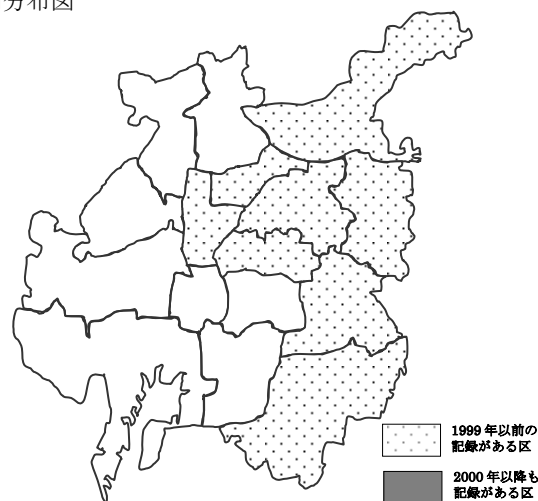
【特記事項】

同属のムスジイトトンボに最も似るので同定に注意を要する。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

ネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera* Selys**【選定理由】**

樹林内外の限られた湿地や矮小な水溜りを発生場所とするものとも稀な種で、かかる生息地の消滅が著しい。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長80mm内外。体は太目で黒色地に黄緑斑を有する。特に未熟時翅の基部が顕著に褐色を呈するのが名前の由来である。

幼虫は腹部5～9節の側棘が顕著なこと、8～9節にヤンマ科では本種だけ背棘を有することが特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、昭和区、熱田区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平野から丘陵地にかけて分布する。

【国内の分布】

宮城、新潟以西の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地、丘陵地の明るい湿地や、林縁、林内の小湿地、小池、水溜りに生息する。

成虫は昼間、林縁や林内で行動するのを見ることがあるが、黄昏時水田、湿地上を他の黄昏飛翔性ヤンマと共に飛翔し、多産地では群飛する。餌として巣を張っているクモを狩ることもある。成虫出現期は6～9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

マルタンヤンマと同様、その生態から確実な生息の把握は困難である。1970年代までは市内各区の公園、社寺林、林地などに生息していた。比較的近年まで記録があった守山区吉根大鼓ヶ根(2005)や天白区黒石(2010)の生息地は宅地造成で失われた。現在では東部各区に残存する規模が大きい緑地内の水系に拠っていると考えられる。県全体でも稀である。

幼虫の生息水域を含む緑地の開発による消滅が減少の主要因である。

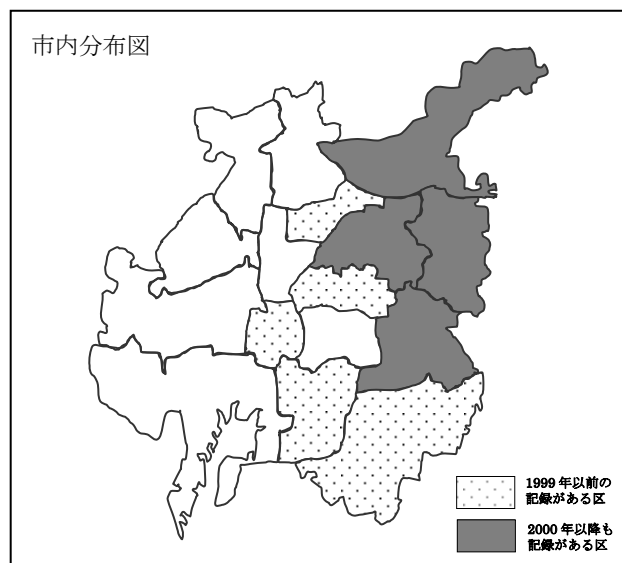
【保全上の留意点】

市内に残存する生息可能な水域が存在する緑地の保全が重要である。

【関連文献】

- 安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
 鶴殿清文・鶴殿 茂・清水典元, 1974. 黄昏活動性ヤンマ3種. 佳香蝶, 26(100):95-98.
 山内博美・北原誠治, 1992. 名古屋市内でネアカヨシヤンマを採集. 月刊むし, (256):36.
 高崎保郎, 2004. 名古屋市内におけるネアカヨシヤンマの2003年の記録. 佳香蝶, 56(218):31.
 松沢孝晋, 2011. 名古屋市天白区平針の里山のトンボ相と里山の消失. 佳香蝶, 63(248):93-98.

(執筆者 高崎保郎)



昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

アオヤンマ *Aeschnophlebia longistigma* Selys**【選定理由】**

生息適地の喪失や水辺の環境悪化を主因とする減少が著しい。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長72mm内外、太めの体躯で鮮やかな緑色に黒条がある。雌は翅が黄色がかかることが多い。

幼虫は頭部が角張った逆三角形で、目が突出した印象を受けるのが特徴。

【分布の概要】**【市内の分布】**

北区、中村区、中区、昭和区、中川区、港区、南区、守山区、緑区、名東区で記録されている。

【県内の分布】

平野から丘陵にかけて分布する。

【国内の分布】

北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布する。



アオヤンマ 雌
中区錦一丁目、1969年6月22日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は主として平地のヨシ、ガマなどの高茎抽水植物が繁茂する池沼に生息する。成虫はヨシ帯の間を縫うように、或いはその上空を比較的緩慢に飛ぶ。かつては県南西部の水郷地帯に多産した。

かなり移動分散力があるようで、市街地を1.5km移動した例もある。比較的近年の名東区の記録も飛来である。成虫の出現期は5～8月。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代には名古屋城堀にも定着していた程であったが、都市化の影響を受けやすい平地の池沼や、人工化が進む水田地帯の側溝などを主たる生息場所としていたため減少が著しく、現在市内で確実な生息は確認できないが飛来は考えられる。国リストでも2012年改訂で収録されるに至った。

高茎抽水植物が豊富な良好な池沼、水田耕作地帯の減少や、生息環境の悪化が減少の主要因である。

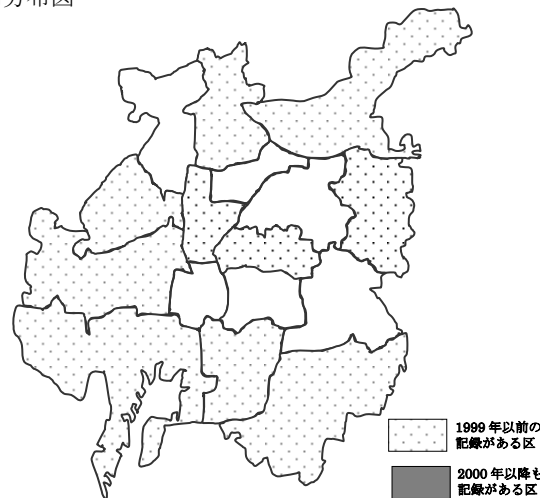
【保全上の留意点】

市内では残存の可能性は低い、一般的には抽水植物に富む池沼や水郷地帯の保全が必要である。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1969. アオヤンマを市街地で採る. 佳香蝶, 21(80):203.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

タバサナエ *Trigomphus citimus tabei* Asahina

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

自然環境の悪化の影響を平地程受けない低山地に近い所にも生息する傾向があることから、絶滅の危険性が同属他種より少ないと見られて来たが、市内の残存生息が2013年以降確認されなくなったことにより選定した。

【形態】

成虫の体長45mm内外。黒色地に未熟時は黄色、成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は1本。前肩の細い黄色（灰緑色）条を欠くことで、これがあるオグマサナエと区別できる。副性器は大きく丸味があることも特徴。

幼虫の腹端第10節が長く筒状であることが本属の特徴であるが、本種だけは短く筒状を呈しない。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、北区、西区、中村区、昭和区、守山区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張、三河の平地では絶滅状態で、丘陵から低山帯にかけては、局地的に多産する所もある。東三河山地でも稀な記録がある。

【国内の分布】

福井県、静岡県以西の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

原名亜種タイリクタバサナエが朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地、低山地の池沼、緩流に生息する。近似種オグマサナエ、フタスジサナエよりも多少標高が高い所に生息する傾向があるが、前記2種と混棲すること多い。羽化は水面の浮遊物上や汀の地面で行われる。成虫の出現期は4～6月上旬。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内ではかつて平野から丘陵、低山帯まで広く産したが、現在では平地では絶滅状態である。都市から離れた丘陵では局地的に多産する所もある。名古屋市内では、1940、1950年代には7区で記録され、守山区竜泉寺（現在の小幡緑地本園辺りを指す）には多産したが、2010年代初頭では同区下志段味での若干の記録があるのみである。市東部に接する丘陵地帯の長久手市、日進市、東郷町方面では以前から記録がない。

開発、改修が著しい平野部での生息池沼の水質悪化、水田側溝の人工化、周辺を含む自然環境の悪化、産地自体の消滅が減少の主要因である。

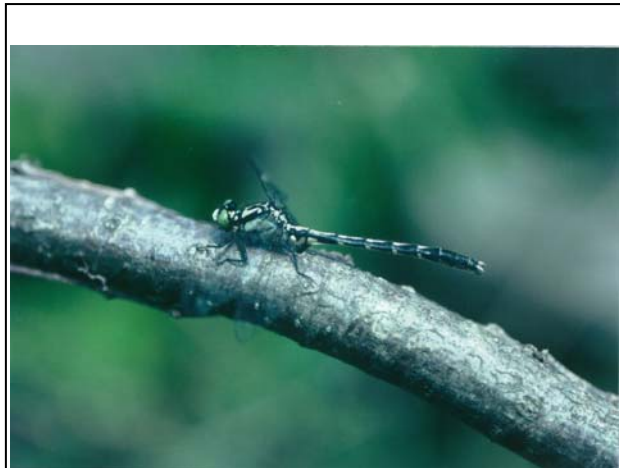
【保全上の留意点】

本市では近年絶滅状態であるが、一般的には、岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保全と環境保全、水田地帯の小緩流の自然状態の保持などが必要である。

【関連文献】

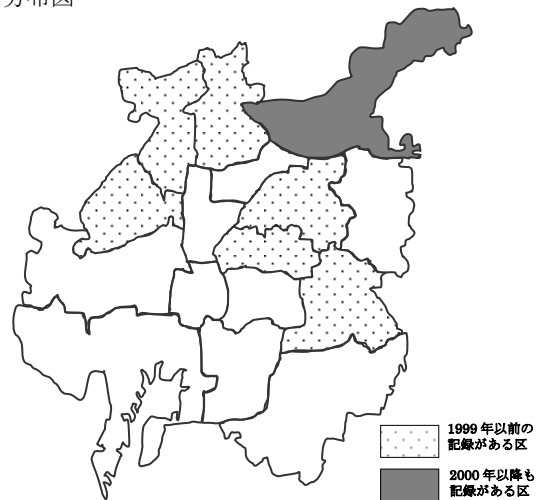
安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫（上）, pp.9-78. 愛知県.

(執筆者 高崎保郎)



タバサナエ 雄
守山区下志段味吉田、2005年5月8日、安藤 尚 撮影

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 セミ科>

チッチゼミ *Kosemia radiator* (Uhler)**【選定理由】**

主として平地から丘陵地のマツ林や低灌木帯に生息するため、宅地造成など開発の影響を受けやすい。以前と比べかなり個体数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は18～24mm と小型のセミで、体色は黒みが強く、銀灰色の鱗毛が密生する。
中胸背には、一対の黄褐色三角紋を有する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主として東部丘陵帯であるが、正式な記録は非常に少ない。

【県内の分布】

豊根村、新城市、豊橋市、豊田市、岡崎市、瀬戸市、春日井市、小牧市、日進市など。

【国内の分布】

北海道（渡島半島）、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



チッチゼミ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけて、主としてマツ類の多い樹林帯に生息する。

雌はマツ林の林床に生育するツツジ類の生枝中に産卵する。秋季に個体数が多くなる。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部の丘陵帯が主な生息地であったが、以前と比べかなり減少している。

宅地造成など樹林地の伐採による生息地の消失が大きな減少要因である。

【保全上の留意点】

丘陵地帯のマツ林の環境維持に努めるとともに、間伐等で下草を手入れする場合は、産卵木となるツツジ類を残すよう留意する必要がある。

【特記事項】

従来 *Cicadetta* 属に所属させられていたが、東アジア地域におけるチッチゼミ類の分類学的研究により、*Kosemia* 属に所属変更された。

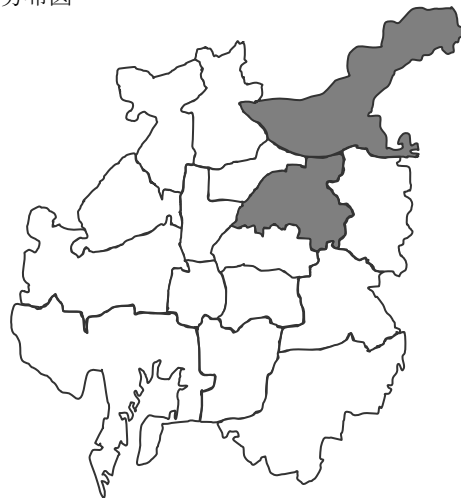
【関連文献】

林 正美, 1992. 日本産セミの分布調査報告 (4). 日本セミの会会報, 11(1-2):1-32.

林 正美・税所康正, 2011. 日本産セミ科図鑑. 221pp. 誠文堂新光社, 東京.

新修名古屋市史資料編集委員会(編), 2008. 第8節昆虫類 5 カメムシ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.161-165. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 タイコウチ科>

ヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* Esaki**【選定理由】**

東海地方の湿地を代表する種として知られ、県内では比較的産地・個体数とも多いが、全国的には生息地が限定され、特に都市近郊では、開発による埋め立てなどで生息地が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は18～22mm。体型は長卵形を呈する。体色は暗褐色で、前脚は鎌状の捕獲脚となっている。

呼吸管は非常に短い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

市内東部に広く分布するが、守山区からの記録が多い。

【県内の分布】

平地から低山地にかけて、県内ほぼ全域（東三河北東部を除く）。

【国内の分布】

本州（東海地方、奈良、和歌山、兵庫）、四国（香川）。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州）、中国、朝鮮半島。



ヒメタイコウチ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

湧水湿地、流入のあるため池の縁、休耕田、水田地帯の素堀の水路など、常に湿り気のある湿地帯に生息する。

成虫で越冬後、5月頃産卵し、新成虫が8月～9月頃出現する。後翅が退化し、飛翔できない。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では様々な湿地環境に生息し、河川敷でも見られる場合がある。市内では守山区に比較的多くの産地が残されているが、それ以外は局地的である。

都市近郊における湿地は、宅地造成などで多くが埋め立てられ、ほとんどの場合、生息地そのものが消滅した。

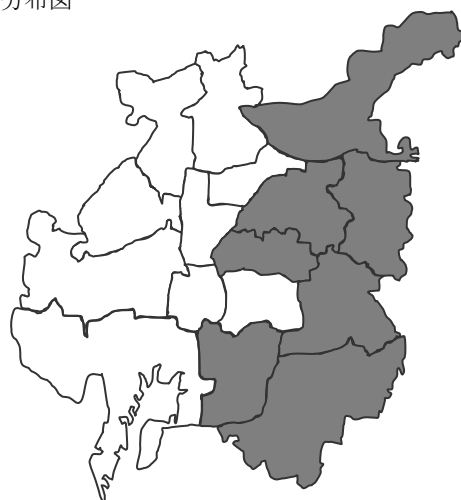
【保全上の留意点】

湿地環境の保全および水源地である周辺の後背林を維持し、乾燥化を防ぐ必要がある。

【引用文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫(上), pp.123-162. 愛知県.
長谷川道明・佐藤正孝・浅香智也, 2005. ヒメタイコウチの分布, 付関連文献目録. 豊橋市自然史博研報, (15):15-27.
堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
矢崎充彦, 2010. 名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類. 佳香蝶, 62(243):51-55.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ハンミョウ科>

ハンミョウ *Cicindela chinensis japonica* Thunberg**【選定理由】**

平地から山地に普通の種であるが、市内では生息環境の消失とともに減少しているものと思われ、発見が困難になっている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

赤～緑色の金属色をもつ美しい種で、色彩には変異があるが、本州に間違えるような似た種はいない。上唇は、前方へ突出し中央が縦に強く隆起、前縁に5つの歯をそなえる。

体長は18～20mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区東山（高橋, 1975）、庄内川（穂積ほか, 1975）、天白区。

【県内の分布】

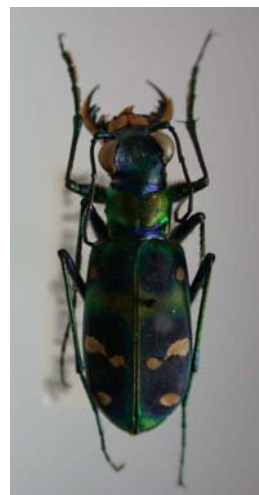
山間部から平野部にかけて広く分布している。

【国内の分布】

本州、四国、九州、種子島、屋久島。沖縄には別亜種が分布する。

【世界の分布】

基準亜種は、中国、朝鮮半島。



ハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

林間の裸地や、林道、石の多い河川敷などに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

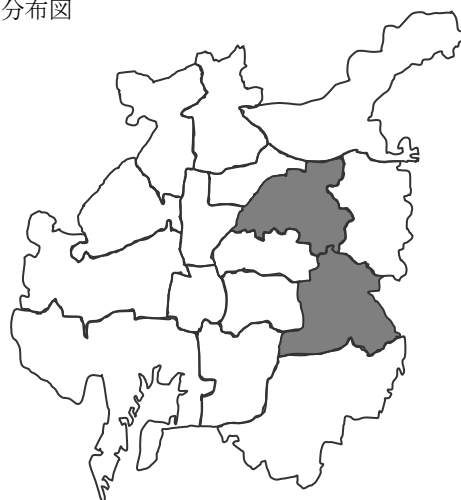
市内での生息状況については、引き続き調査が必要であるが、守山区、名東区、天白区、緑区などの郊外には生息している可能性が高い。

減少の要因としては、生息環境の減少、農薬や除草剤等の使用が考えられる。

【保全上の留意点】

緑地や林道など、本種の生息地となりうる地域での舗装は最小限にとどめるとともに、こうした地域での農薬、除草剤の散布に注意する必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

高橋 敬, 1975. 甲虫雑記 (1), 名古屋市東山の甲虫. 佳香蝶, 27(101):9-10.
穂積俊文ほか, 1975. 庄内川の昆虫, 40pp, 12pls. 建設省庄内川工事事務所.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 コガシラミズムシ科>

クロホシコガシラミズムシ *Haliphus basinotatus latiusculus* Nakane**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3.5mm 前後。ヒメコガシラミズムシに似るが、上翅基部の黒斑は明瞭であることで区別できる（中根，1985）。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区東山（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

豊田市、瀬戸市、田原市。

【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

日本固有種。



クロホシコガシラミズムシ

豊田市上高町、2012年6月30日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

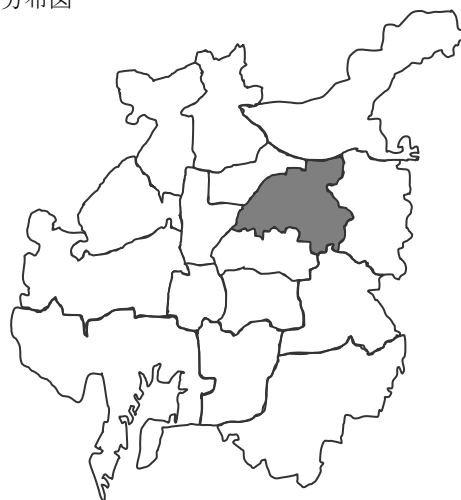
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種類魚の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

多くの池では、ルイスツブゲンゴロウと共に見つかる。

市内分布図

**【引用文献】**

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.
中根猛彦，1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆蟲，32(2):61-67.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.33, pp.180-181. 保育社，大阪.
佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上），pp. 204-231. 愛知県.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

ルイスツブゲンゴロウ *Laccophilus lewisius* Sharp**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3.9～4.7mm。体型は逆卵形で幅広く、背面は淡黄褐色から黄褐色。微細網状印刻が密に有り、やや強い光沢が有る。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区、中区、北区、名東区（すべて吉鶴ほか、2008）。

【県内の分布】

豊田市、美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



ルイスツブゲンゴロウ

豊田市上高町、2012年6月30日 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

全国的にも減少傾向であり、局地的に分布することから発見されにくく、近年の記録は見当たらず、急激に減少していると考えられる。

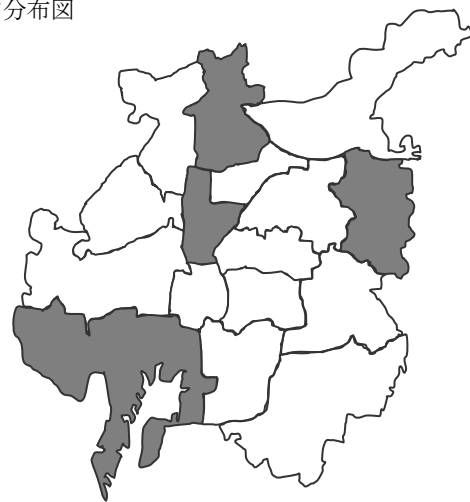
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

多くの池ではクロホシコガシラミズムシと共に見つかる。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.34,p.190．保育社，大阪．
森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

シマゲンゴロウ *Hydaticus bowringii* Clark

カテゴリー

【選定理由】

平野部では普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 13～14mm。体は卵形でよく膨張し、光沢がある。頭・前胸背は淡黄褐色で、それらの後縁中央は黒色。上翅は黒色で、中央と側縁部近くに淡黄縦状があり後方で合一し、基部に円紋がある。体下面は黄～赤褐色。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区吉根（蟹江・長谷川，2001）、港区土古町（蟹江・長谷川，2001）、千種区東山公園。

【県内の分布】

豊田市ほか、平野部の池を主体に広く分布していたが、現在では丘陵部に残された池や水田に生息しているにすぎない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、トカラ列島。

【世界の分布】

中国、台湾、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

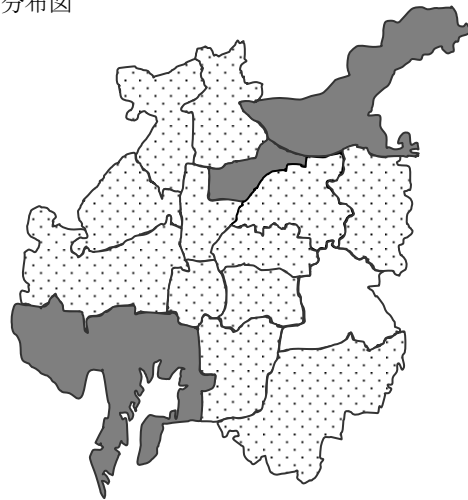
平野部からは姿を消し、丘陵地でも水田の放棄、池の消失、汚水の流入などによって減少していると思われる。

【保全上の留意点】

残っている自然度の高い池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。



市内分布図



【引用文献】

蟹江 昇・長谷川道明，2001．甲虫類-東海地方を例に-．ため池の自然-生き物たちと風景，pp.15-164．信山社サイテック．

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生動物 -レッドデータブックあいち 2009- 動物編，p.298．同県環境部自然保護課．

森 正人・北山 昭，1993．日本のゲンゴロウ，p.143．文一総合出版，東京．

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ），愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

コオナガミズスマシ *Orectochilus punctipennis* Sharp

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

河川の中流域に生息するミズスマシで、かつて市内にも生息していたが、河川の汚濁などで県内では絶滅状態にあった。最近になって庄内川などで再発見されたが、県内での生息地は限られている。

【形態】

長楕円形で、やや金属光沢を帯びた黒色。脚は赤褐色。上翅の点刻は密で、会合部は、雄ではほぼ直角で先が丸まり、雌ではやや斜めで会合端が少し後方に張り出す。

体長は5.5～6mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区庄内川に生息する。また市内からは昭和区山崎川石川橋での古い記録がある。

【県内の分布】

庄内川、豊川の中流域から知られている。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。



コオナガミズスマシ

【生息地の環境／生態的特性】

大きな河川の中流域で、岸辺が水で覆われているような環境に生息する。夜間活動性。

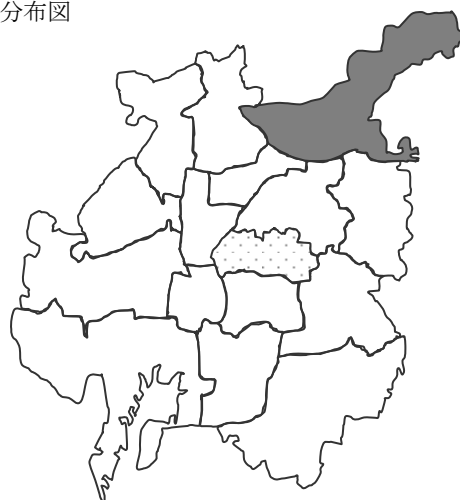
【現在の生息状況／減少の要因】

市内では守山区の庄内川にまだ生息しているが、危険な状況にある。減少の要因としては、河川改修による生息環境の消失、汚水の流入による河川の汚濁があげられる。

【保全上の留意点】

現在残る生息地周辺での自然河岸の保全と、水質の保全が必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(32):1-7.
吉富博之, 1994. 愛知県産甲虫類分布資料 (1). 佳香蝶, 46(178):21-22.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

ミズスマシ *Gyriuns japonicus* Sharp

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて北海道から九州にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

【形態】

体長 6.0～7.0mm。体型は長卵形で黒色。背面はにぶい光沢がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白区、庄内川、東山公園（すべて吉鶴ほか、2008）。

【県内の分布】

豊田市、設楽町、瀬戸市、犬山市（佐藤、1990）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、千島。

**【生息地の環境／生態的特性】**

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある水域に生息する。

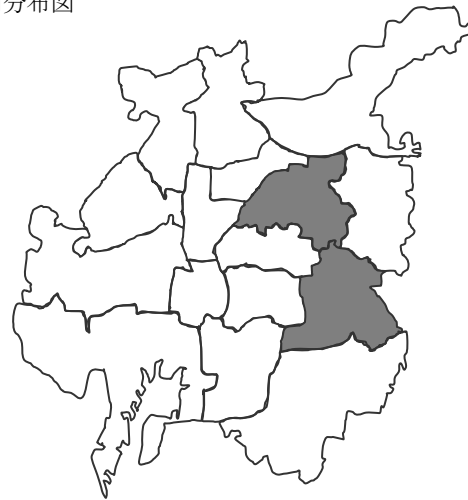
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上), pp.204-231. 愛知県.
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一, 2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.102-156. 名古屋市.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ, pl.37, pp.202-203. 保育社, 大阪.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 コガネムシ科>

ミツノエンマコガネ *Onthophagus tricornis* (Wiedemann)**【選定理由】**

名古屋市では河川敷に生息している。東海豪雨による洪水で極端に減少したが、現在少しずつではあるが回復傾向にある。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長12～18mm。体は黒色で光沢はにぶい。頭部前縁中央は歯状に突出、中央部と両端に角状の隆起がある。前胸背中央前縁にたい角状突起がある。上翅間室は平坦で微細な鮫肌状となる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中村区、西区、北区の河川敷で見られる。

【県内の分布】

豊田市、田原市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、台湾、インドシナ半島、ミャンマー、インド、マレー半島、ジャワ。



ミツノエンマコガネ

【生息地の環境／生態的特性】

海浜から河川中流域にかけての、自然植生が残された河川敷が主たる生息地である。糞虫といわれる仲間であるが、この種は腐敗した魚類や野菜くずに集まる習性がある。

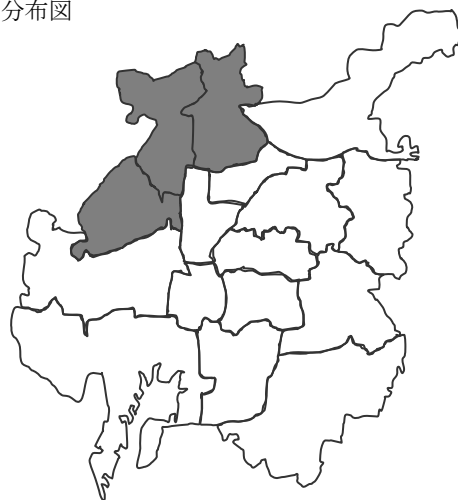
【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川の河川敷沿いに少ないが、生息を確認できる。

【保全上の留意点】

河川敷と治水を考慮すれば、現在の環境を維持することが最低の選択となろう。

市内分布図

**【関連文献】**

伊藤芳教, 1992. ミツノエンマコガネの外部形態による雌雄の区別法について. 月刊むし, 262:23-24.

名城大学附属高校自然科学クラブ, 1992. 名古屋市中村区内のミツノエンマコガネの個体数について. 佳香蝶, 44(172):63.

清水清市, 1990. 愛知県尾張平野部のミツノエンマコガネ. 月刊むし, 230:40.

(執筆 佐藤正孝執、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 カミキリムシ科>

ベーツヒラタカミキリ *Euplynes batesi* Harold**【選定理由】**

シイの大木に依存する種で、自然度の高い常緑林の指標ともなる種である。本種が生息できるような樹林は市内には限られ、またその環境は年々悪化している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

赤褐色で扁平なカミキリムシ。雄では大あごが発達する。
体長は36～34mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区の熱田神宮（井野川，1973）。

【県内の分布】

豊橋市、豊川市、刈谷市など温暖な地域に分布する。

【国内の分布】

本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国南西部、ベトナム、ラオス。



ベーツヒラタカミキリ

【生息地の環境／生態的特性】

シイなどの大木が存在する森林に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

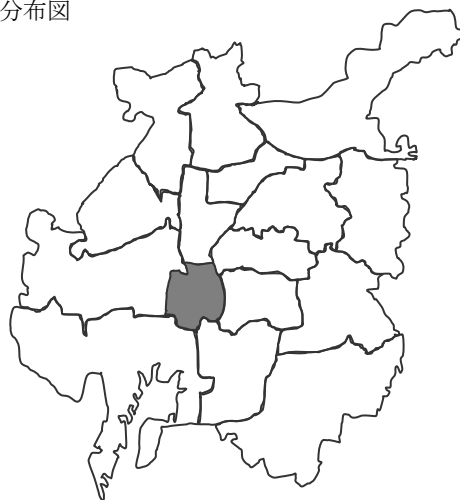
熱田神宮の環境は保護されているので、現在も生息している可能性が高い。しかし、熱田神宮は都市部に孤立した自然で、他の生息地とは遠く離れていること、樹林内の乾燥化など生物にとっての環境は必ずしも将来にわたって安心できるものではない。

減少の原因としては、本種の生息できる大木を含む森林の消失と、乾燥化による環境の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

熱田神宮をはじめ、寺社林など大木の残る林の保全が必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

井野川重則，1973．熱田神宮にてベーツヒラタカミキリを採集．佳香蝶，25(96):55．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 ツトガ科>

ゴマフツトガ *Chilo pulveratus* (Wileman et South)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

河川敷や沼沢地、そして山間の小湿地が生息場所と考えられる。湿地性の蛾で、全国的に産地は限定され、個体数も少ない。都市周辺では自然な湿性環境は狭められ、生息条件が悪化している。

【形態】

開張17～19mm。前翅は淡灰褐色に暗灰色鱗を散布し、弱い中横線がある。横脈上に2つの小点、細い垂外縁線があり、外縁には黒点列がある。前翅翅頂は鋭くとがる。

【分布の概要】

【市内の分布】

1991年の千種区星が丘元町が唯一の記録。

【県内の分布】

上記の他岡崎市青柳町、旧弥富町鍋田、南知多町岩屋、音羽町宮路山に単発的な記録がある。近年日進市で複数個体が採集されている。

【国内の分布】

群馬県を最北とし、神奈川県、静岡県（伊豆半島）、愛知・岐阜・三重の東海三県、高知県、長崎県、沖縄島に記録があるが少ない。

【世界の分布】

台湾に分布、台湾が原産地である。

【生息地の環境／生態的特性】

全国的な分布状況から「低湿地」の蛾といわれているが、必ずしも低平な広い面積の湿地だけでなく、山間の小湿地等にも生息する「好湿地性」の蛾と考えられる。

7月上・中旬に比較的短期間発生する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の採集地の近傍には、大規模な緑地である東山公園と平和公園があり、おそらくその中の小湿地で発生したものであろう。

都市近郊の湿性環境は、宅地造成や埋め立て、河川改修等により減少し、本種の生息条件は悪化している。

【保全上の留意点】

現存する湿性環境の生態系をよく調査し、開発・改修の際に十全な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
間野隆裕，1989. 木曽川河口の湿地の蛾. 蛾類通信，(143):283-287.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

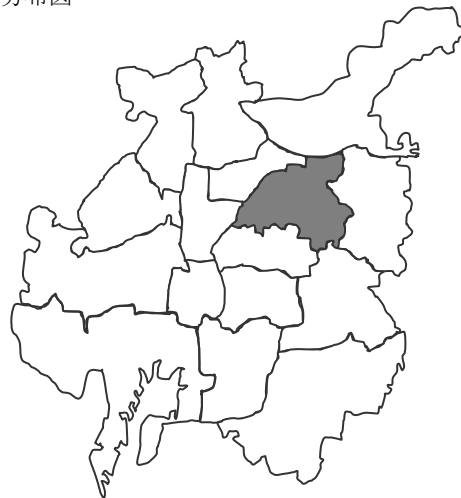
井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.



ゴマフツトガ

千種区星が丘元町、1991年7月9日 田中多喜彦 採集

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シャクガ科>

アヤコバネナミシャク *Acasis bellaria* (Leech)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

最新の日本産蛾類標準図鑑では、「全国的に分布するが、局地的で非常にまれ」とある。愛知県では平地～丘陵の植生の比較的安定した自然林に産し、極相林周辺で採集されることが多い。都市周辺ではそのような良好な自然環境が減少している。

【形態】

開張 18mm 内外。前翅の中・外横帯は灰褐色、両帯の間は灰色で、黒色の横脈点が目立ち、後縁部に大きな白紋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山の照葉樹林に生息する。近年名東区明徳公園でも採集された。

【県内の分布】

蒲郡市相楽山、豊田市猿投山に古い記録がある。近年日進市御嶽山でも複数個体が採集されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布するが非常にまれ。

【世界の分布】

ロシア南東部。



アヤコバネナミシャク

守山区東谷山、2013年4月29日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

極相林周辺で採集されることが多く、本種が生息することは、植生が長期にわたり安定している指標ともなりうる。

若い二次林ではほとんど採集されない。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区東谷山北斜面の生息地は、愛知県の自然環境保全地域として環境が保全され、動植物保護地区として採集が禁じられている。

しかし他の市内の自然林の多くは、開発により減少し分断されているので、孤立化し本種の生存は危ぶまれる。

【保全上の留意点】

名古屋市に残された自然林や鎮守の森の生態的価値を再認識して、一定範囲をできる限り将来にわたって温存することが望ましい。また公園緑地の整備のための伐採や農薬散布には十分な配慮が望まれる。

【関連文献】

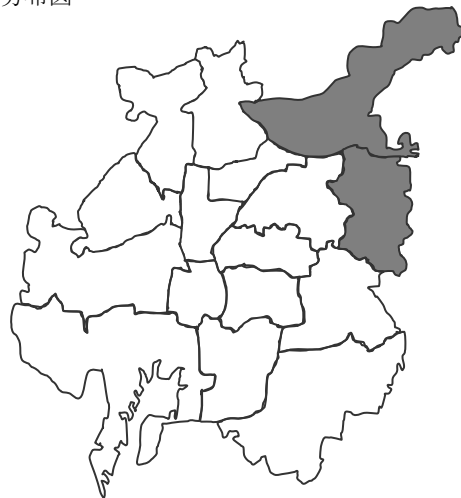
井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.

岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社, 東京.

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ヌマベウスキョトウ *Chilodes pacificus* Sugi

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市内では港区の庄内川河口のヨシ原で発見されたが、市内では、丘陵地のため池や河川などの小規模なヨシ群落には見出されていない。生息範囲が狭く、改修などで容易に絶滅する恐れがある。

【形態】

開張17～19mm。小型のヤガで触角は微毛状、前翅、頭部及び胸背は淡い灰褐色を呈する。前翅は幅狭く翅頂は突出するが、全体として長楕円形の特異な翅型を示す。翅脈は外縁部で暗色を呈し、中室内に1黒点がある。後翅は淡い灰色で前翅より淡色。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口の港区南陽町七島新田流作場～珍寿野のヨシ原から2009年に記録された。

【県内の分布】

旧弥富町鍋田、蟹江町鍋蓋新田に記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州（青森、秋田、群馬、茨城、埼玉、石川、愛知、三重の各県）に記録がある。

【世界の分布】

現状では日本の固有種である。

【生息地の環境／生態的特性】

1982年に新種記載に用いられたホロタイプの産地は茨城県菅生沼、パラタイプは群馬県板倉町や秋田県金浦町など典型的な低湿地のヨシ原であり、本種は低湿地を代表する蛾の一つである。

生態や食草は未知であるが、庄内川河口の広大なヨシの単一群落で夜間採集をすると多数飛来するので、おそらくヨシにつくものと思われる。5月から9月にかけて発生する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の市内の生息地である、庄内川河口のヨシ原の環境は、比較的安定している。

過去には、市内の他の河川の河口のヨシ原にも生息していた可能性があるが、すべてコンクリート護岸による単なる水路と化し、本種の生息環境は消滅した。

【保全上の留意点】

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。ヨシの純群落は汽水域を含め特異な生態系であり、希少な生物が多く生息している。護岸改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.

間野隆裕，1989. 木曽川河口の湿地の蛾. 蛾類通信，143:283-287.

田中多喜彦，2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶，63(247):63-67.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.

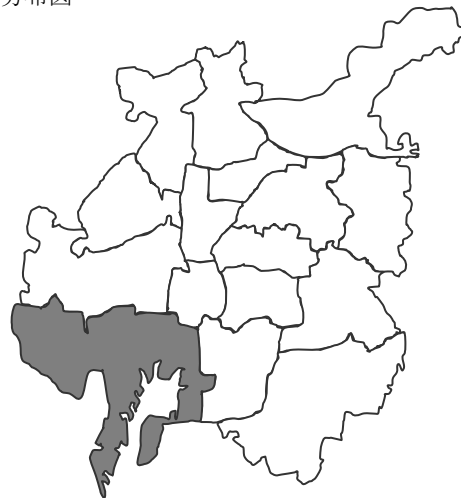
杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.

岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.



ヌマベウスキョトウ、
港区南陽町七島新田、2009年8月18日、田中多喜彦 採集

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

ガマヨトウ *Capsula aerata* (Butler)

カテゴリー

【選定理由】

ガマを主な食草とする本種は、ガマの群生するような沼地や河川敷の湿地に限って発生する。このような湿地は低地では埋め立てや河川改修等により狭められ、生息条件は年々悪化している。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

開張 17～19mm。前翅は黄褐色ないし橙褐色を呈し、個体差はあるが同属他種（キスジウスキョトウなど）より色彩は濃色である。中室下縁に沿い羽底から外縁に至る暗色条は明瞭である。中室付近は橙色をおび、環・腎状紋は通常判然としないか弱い黒点となる。雌の産卵管は強壯。後翅も同属他種に比べ全体に濃色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区平和公園で2008年に記録された。

【県内の分布】

西尾市若松町、美和町篠田、豊田市古瀬間町に記録がある。

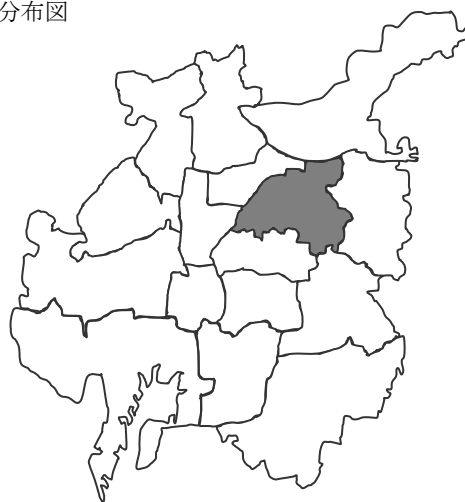
【国内の分布】

北海道の十勝・釧路地方、東北各県、関東の群馬・栃木・千葉・神奈川の諸県、中部の新潟・富山・石川・静岡・愛知・岐阜の諸県、三重県、滋賀県、京都府に記録がある。

【世界の分布】

ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種は現状では日本の特産種であるが、分布はやや北に偏り、ほぼ東海地方以北に産し、京都府と滋賀県にわずかに記録がある低湿地の蛾である。

幼虫はガマのような大型の湿性単子葉植物を食害するシンクイムシ (borer) である。年1化で7～8月に出現する。

本種の生息するヨシ・マコモ・ガマの生育する低湿地は環境改変の影響を受けやすく、全国的に多くの都道府県がガマヨトウや、同様な生態的特性をもつオオチャバネヨトウをレッドデータブックに掲載している。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録された平和公園南部の湿地は、丘陵の狭間の休耕田に、生育したヨシ原にガマをまじえる比較的小面積の湿地である。現在は緑地公園として保全されている。

かつては市内の各所に、本種の生息に適した低湿地があったと思われるが、今日では開発や埋め立てによりほとんど残されていない。そのため産地が孤立化し、遺伝子交流が困難となっていて生存条件が悪化している。

【保全上の留意点】

都市近郊の低湿地が生息地であるため、都市開発や河川改修などの影響を受けやすい。開発する場合は、生態系について十分な事前調査をした上で、完全な人工的環境にせず多機能型の自然とするなど、できるだけ自然を温存する配慮が望まれる。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.

杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.

岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

キスジウスキョトウ *Capsula sparganii* (Esper)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

ガマを主な食草とする本種は、ガマ属やミクリ属の群生するような沼沢地の湿地に限って発生する。このような湿地は、都市周辺では埋め立てや河川改修等により狭められ、生息条件は年々悪化している。ガマヨトウとともに湿地環境の指標種としてレッドリストに抽出している県が多い。

【形態】

開張 29～44mm。雌は一般に大型。ガマヨトウに似るが、前翅地色は淡灰褐色でやや黄色味を帯び、ガマヨトウのように強く橙褐色を帯びることはない。腎状紋の下端は上に関く黒色の半環となる。雌の産卵管は強壯、第8節腹面に尾方へ向かう一対の突起がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区大森の八竜緑地で記録されている。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、日進市、豊田市、旧田原町蔵王山などから記録されている。

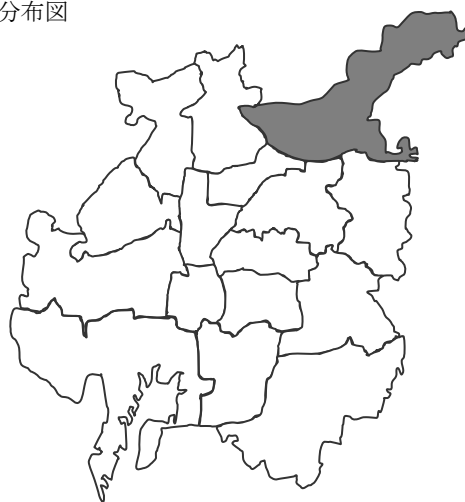
【国内の分布】

日本全国に産する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国（黒龍江省）、モンゴル、シベリアからヨーロッパにわたり分布。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

食草であるガマ属などの生育する沼沢地や湿地に限って生息する。海岸近くの低層湿地から内陸盆地まで、垂直分布は比較的幅広く、年1化で成虫は7～9月に出現する。幼虫はガマやミクリの茎中に棲み、その中で越冬するという。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録された守山区大森の八竜緑地は、湿地部分が名古屋市のビオトープ公園としてフェンスで囲われ、日時を限って公開されている。また周辺の自然林は緑地として保全されている。しかし周辺は宅地開発され、発生地は孤立化し遺伝子交流も少なく、長期にわたる生存がおびやかされている。

かつては市内の各所に本種の生息に適した低湿地があったと思われるが、今日では開発や埋め立てによりわずかしが残されていない。

【保全上の留意点】

都市近郊の低湿地が生息地であるため、都市開発や河川改修などの影響を受けやすい。開発する場合は、生態系について十分な事前調査した上で、完全な人工的環境にせず多機能型の自然とするなど、できるだけ自然を温存する配慮が望まれる。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
 小木広行，1982. オオチャバネヨトウとキスジウスキョトウの幼虫. 誘蛾灯，87:11-13.
 田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
 杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京
 岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

トビイロアカガネヨトウ *Euplexia albilineola* (Wileman et South)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

湿地環境で得られることが多い。全国的に既知産地が少なく、個体数も少ないいわゆる希少種である。本種の記録された守山区の里山的環境は土地開発により減少し、生息環境が悪化している。

【形態】

開張30mm内外。前翅は暗い紫褐色、横線は紫白色で明瞭。環・腎状紋態の輪郭は白色で鮮明である。後翅は外半は淡褐色で内半は淡黄褐色、外横線と横脈点があられる。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区中志段味（1992）の記録がある。

【県内の分布】

上記の他に旧稲武町井山、旧設楽町裏谷、豊田市自然観察の森の記録があるが、まれな種である。近年日進市の湿地で記録されている。

【国内の分布】

模式産地の奈良県吉野の他、福井県鳩ヶ湯、兵庫県氷ノ山、広島県豊平町、香川県高松市、福岡県北九州市から記録されるが産地は局限される。近年大阪府や福島県でも記録されている。

【生息地の環境／生態的特性】

平地にも山地にも記録がある。産出量は少なく、香川県高松市のように追加記録が出ず、県のレッドリストにあげられた産地もある。

成虫は秋季 10～11 月に、湿性環境で採集されることが多く、湿地との結びつきが強い。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録された守山区中志段味一帯は、以前は里山的景観の二次林が残り、ネスジシャチホコやオオヤママイマイが記録された。小湿地も散在していたが、その後、土地造成が急速に進み、生息環境は悪化している。

【保全上の留意点】

市東部に残る里山的環境は、コナラやアベマキの雑木林と小湿地、ハンノキ林や細流を含み、尾張丘陵の動植物相のモデルであり、そのまま生きた博物館として一定区画を残せば理想的である。特に都市近郊に現存する小湿地は、遷移がすすみ消滅しやすいので、侵入するササ刈りや上木切りなど、人の手を加えてでもできる限り保全することが望ましい。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

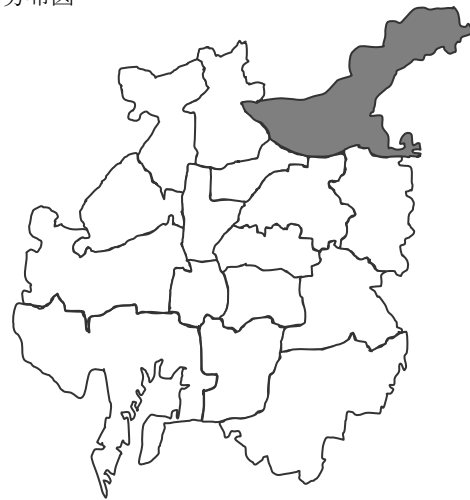
(執筆者 田中多喜彦)



トビイロアカガネヨトウ

守山区中志段味、1992年10月3日、水野利彦 採集

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 セセリチョウ科>

ミヤマセセリ *Erynnis montana montana* (Bremer)

カテゴリー

【選定理由】

かつては市東部丘陵の各所に早春、本種の姿が認められたが、生息場所である丘陵地のコナラやアベマキの雑木林が、土地開発等により減少し産地が孤立化し、生息条件が急速に悪化した結果、今日では市東部の数地点に認められるに過ぎない。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 36～40mm。翅の地色は茶褐色で、後翅亜外縁から外縁にかけ黄色の小点列がある。前翅の翅表には紫灰褐色鱗粉を散布するが、雌では密度が高く、中央部で灰白帯のようになる。

【分布の概要】

【市内の分布】

主に市東部丘陵（瑞穂区、千種区、名東区、天白区、緑区、守山区）で1970年代まで記録があるが、1980年代以降に急に減少した。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河地方の丘陵・山地にかけて広く分布するが、尾張地方の平野部では、ほとんど確認されていない。

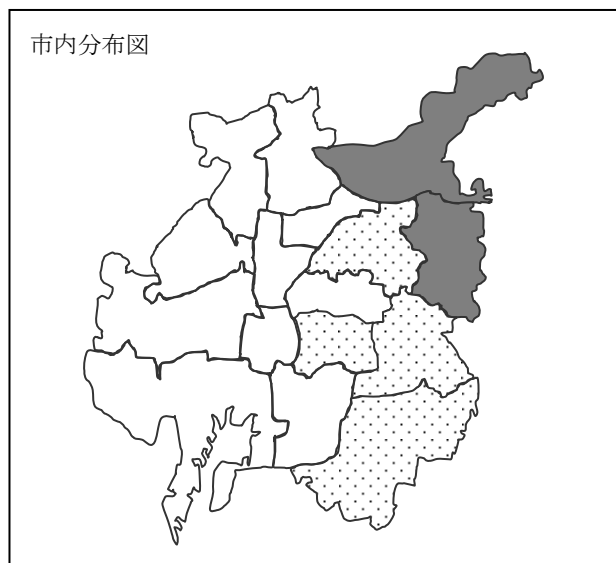
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

年1化で3月下旬から現れ、4月上・中旬に最も多くなる。雑木林やその周辺にみられ、地表や枯れ葉の上に翅を開いて止まる。タンポポ類など各種の花で吸蜜する。母蝶はコナラやアベマキ等の新芽に産卵し、幼虫はこれらの食樹の葉を食べ、秋に終齢幼虫に達して落葉とともに地表へ落下、地上の落葉層で幼虫で越冬後早春に蛹化、次いで羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

1960年代には、平和公園・東山公園より東部の丘陵地では、春の風物詩として各所に多産したが、2000年以後は、名東区猪高緑地と守山区東谷山周辺のみに発生している。

主な生息場所であるコナラやアベマキのある二次林が工場・宅地造成、道路建設等により減少し、産卵に適した林縁の勢いの良い萌芽が減少したこと、林床の落葉層が薄くなって好適な越冬場所がなくなったこと、ドクガ駆除やマツ枯れ対策等で薬剤を空散したことなどが、本種の減少の要因と考えられる。産地が孤立化し遺伝子交流もなく、個体群の弱体化が起きている可能性もある。

関東地方でも、大都市周辺で本種の減少が著しく、東京都では絶滅としている。

【保全上の留意点】

現存するコナラやアベマキを主要樹種とする二次林を極力保全する。このような雑木林は多くの場合公園緑地となっているので、過剰な管理たとえば外来園芸樹種との植え替え、下枝切り、落葉除去などをしない。害虫防除のための農薬散布は必要最小限とするなど、配慮事項は多い。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.67, p.305. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (IV). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シジミチョウ科>

ウラクロシジミ *Iratsume orsedice orsedice* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

愛知県では尾張丘陵から三河山地にかけて分布する、マンサクを食樹とする比較的珍しい山地性のシジミチョウである。名古屋市内のマンサクの野生は限られ、さらに成木で近年葉枯れ病のため枯死する木が多く、生息条件が悪化している。

【形態】

開張32～35mm。裏面の色彩斑紋は独特で雄雌ほとんど差はないが、翅表は全く異なる。雄は銀白色で外縁部が細く黒褐色のほか斑紋を欠き、雌は外縁部は広く黒褐色で、翅長の三分の二程度まで灰白鱗をもつので、一見して区別される。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区吉根と東谷山頂上の記録がある。

【県内の分布】

犬山市、春日井市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地にかけ分布は広い。

【国内の分布】

北海道渡島半島南端部以南、本州、四国、九州。四国、九州では高地帯に生息。

【世界の分布】

台湾、中国西部。



ウラクロシジミ

田中多喜彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

全国的に山地性の種であるが、名古屋市近郊では犬山市奥入鹿、春日井市廻間町、瀬戸市定光寺、名古屋市守山区などの海拔100～300m程度の低山地でも生息している。5月下旬に羽化し6月上旬が最盛期となり、夕刻樹上をキラキラと銀白色の翅を輝かせて飛ぶ。

【現在の生息状況／減少の要因】

1990年代に入って、名古屋市近郊のマンサクは葉枯れ病のため茶褐色に変色するものが目立ち、数年のうちに樹勢が衰え成木の多くが枯死してしまった。現在は残った木や若木によって、ウラクロシジミはようやく命脈をつないでいる状態である。

守山区吉根にわずかに自生していたマンサクも、大規模な造成によって雑木林自体が縮小し、本種の生息環境が悪化している。

【保全上の留意点】

市内に残されたマンサクの自生しているような身近な里山の二次林の生態的価値を認識して、現存する二次林をできる限り緑地として温存すること。また公園整備のための雑木の間伐や下枝切り、農薬散布などには十全な配慮が望まれる。

【引用文献】

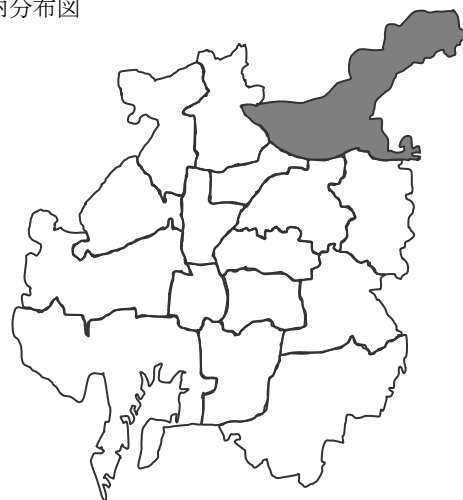
- 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目(チョウ類). 新修名古屋史資料編 自然. 名古屋市.
山田芳郎, 2008. 名古屋でウラクロシジミを採集. 佳香蝶, 58(227):54.
大曾根剛, 2008. 名古屋市守山区吉根のウラゴマダランジミの衰亡. 佳香蝶, 60(234):73-76.
(この中に同地で大曾根によるマンサクよりウラクロシジミ2卵採集1987年1月1日の記録がある)

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.22, p.78. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

イチモンジチョウ *Limenitis camilla japonica* Ménétrières

カテゴリー

【選定理由】

食草を同じくするアサマイチモンジは、市内で安定した発生を続けているが、本種は名古屋市内で過去に確実な記録があるものの、現在注意してもほとんどその姿をみることができない。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 52～62mm。雌はやや大型。和名のイチモンジとは黒地の前後翅を貫く一文字様の白帯にもとづく。雌は一般に大型で翅形は丸味を帯びる。雌は前翅中室内に不明瞭な白斑をあらわすが、アサマイチモンジほど常に明瞭ではない。アサマイチモンジでは前翅第3室の白斑（白帯の一部をなす）は大きく明瞭であるが、本種では白斑はその前後の白斑に比べて著しく小さく、時には消失する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区東山公園の古い記録と、平和公園（1973年）の目撃記録があるのみである。

【県内の分布】

アサマイチモンジに比べ、やや山地に多い。美浜町野間の記録があるが例外的。

【国内の分布】

日本全国に産するが、西南部の暖地では一般に山地に多く、平地にはまれ。

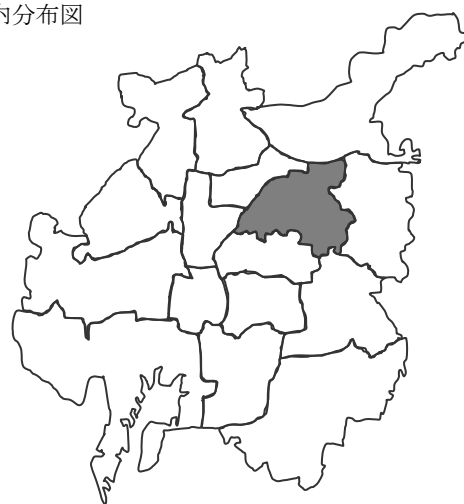
【世界の分布】

朝鮮半島、中国からヨーロッパに至るユーラシア北部の広域分布種。

【生息地の環境／生態的特性】

近縁種のアサマイチモンジがより陽性で明るく開けた環境を好むのに対して、本種は森林周辺や溪谷に多い。木曽川堤防では、アサマイチモンジのみが見られる。食樹は両種とも主にスイカズラで、ハコネウツギも食べる。

市内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

旧版のレッドデータブックなごや 2004 では、アサマイチモンジが準絶滅危惧に選定されていたが、新修名古屋市長資料編自然（2009年刊）のための8年間の継続調査で、市内ではアサマイチモンジは多くないが確実に発生し、絶滅の危機が迫っているのはイチモンジチョウであることが明らかになった。名古屋市の東に隣接する日進市でも、2010年以降の詳しい調査で、アサマイチモンジは各所にかかなり多く産するが、イチモンジチョウは見られないことが判明した。

長野県軽井沢では、アサマイチモンジはより開けた河原や明るい林縁に見られ、イチモンジチョウは溪谷沿いの路傍でよく見られ住み分けているという。環境への耐性に差異があるかもしれない。九州でも減少が指摘されているが、近年温暖地でイチモンジチョウに衰微傾向があるとしても、その要因について明確に調べられたことはない。

【保全上の留意点】

市内では、イチモンジチョウもアサマイチモンジも、比較的大規模な緑地公園に多く自生する、ツル性のスイカズラを主な食樹としていると思われる。公園整備等で林縁と草地の間を覆っているマント群落を除去してしまうと、スイカズラも除去されてしまう。過剰な整備や伐採をしないこと、また害虫駆除のための農薬散布には十分な配慮が望ましい。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市長資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.48, p.226. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅱ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

セスジイトトンボ *Paracercion hieroglyphicum* (Brauer)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

かつては平地池沼に最も普通の種であったが、市内では極く一部の緩流、池しか安定的産地は無くなった。最普通種の激減は市内全域の自然環境の悪化を意味し、その象徴として取り上げた。

【形態】

成虫は32mm内外。雄は青色の地に、雌は黄緑色の地に黒斑を有する。肩の黒条に淡色の筋が明らかに走り、これが名前の由来になっている。

幼虫の尾鰭の形状、斑紋は同属他種に似て区別は困難である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、北区、中村区、中区、昭和区、瑞穂区、中川区、港区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平地、丘陵に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、極東ロシア。



セスジイトトンボ 雄

天白区天白町平針、2013年5月16日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地、丘陵地の浮葉・沈水植物が豊富な池や溪流に生息する。条件が良ければ多産するが、若干の飛来とも考えられる個体しか見られない池もある。出現期は5月末から10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、安定的産地は守山区志段味の庄内川水系の緩流部、天白区大堤池など極く一部に限られる。天白区の荒池、名東区の塚ノ杵池で比較的近年の記録は有るが、極く少数個体で飛来の可能性もある。塚ノ杵池ではその後発見されていない。全国的にも減少傾向にある。隣接する長久手市では絶滅した。

生息地の開発による消滅、水質と池沼自然度の悪化、生息地の減少に伴う生息地間の距離の増大による交流の断絶等諸々の減少要因が考えられる。

【保全上の留意点】

本種が残存する生息場所では水生植物の保全が重要である。長久手市の杵ヶ池では住民苦情により水草を一掃し、本種を絶滅に至らしめた。

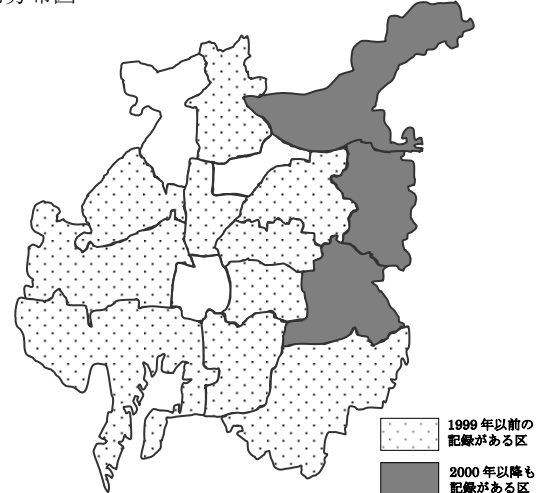
【特記事項】

本種を始め池沼性普通種イトトンボは全面的な減少が著しく、多くの池沼で残存するのは、比較的悪環境に対する適応性が強いと見られるクロイトトンボだけとなった。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2013. 塚ノ杵池水抜き後のトンボ. ため池の自然, (54):19-20.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

ムスジイトトンボ *Paracercion melanotum* (Selys)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

平地池沼に普遍的な数種のイトトンボの中では、生息する池沼に限られる傾向があること、定着に不安定な面があることなど、やや異質なところがあり、かつ、近年かなり減少している。

【形態】

成虫の体長35mm内外。雄は鮮やかな青色地に黒斑、雌は黄緑色で前胸後縁がえぐられることが特徴。

幼虫の尾鰭はやや幅広で先端は丸味がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、中村区、中区、中川区、港区、南区、天白区で記録がある。

【県内の分布】

局在的であるが平野に広く分布する。

【国内の分布】

宮城県以西の本州、四国、九州、南西諸島に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、ベトナム。



ムスジイトトンボ 雄

千種区星ヶ丘山手、2008年8月1日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地の池沼を主とするが、寺院の小池、コンクリート貯水槽のような植生が貧弱な水域からも発生する。沿海部に多いことも特徴的。突然消え、突然現れる不安定な面がある。このため移動分散性は比較的強いと考えられる。混棲する同属のセスジイトトンボを生息地から駆逐する力がある。成虫の出現期は5～10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内でも時に新産地の発見もあるが、既産地の多くから姿を消している。隣接する長久手市の平地、丘陵でも減少している。1950年代には名古屋城堀にも多産し、中区東別院にも産した程であった。比較的近年の記録があるのは千種区星ヶ丘山手、天白区天白町平針所在の池位であるが、その生息状況は必ずしも安定的なものではない。

生息する池の水質汚濁と環境の変化、外部からの供給交流の衰退などが減少の要因と見られる。

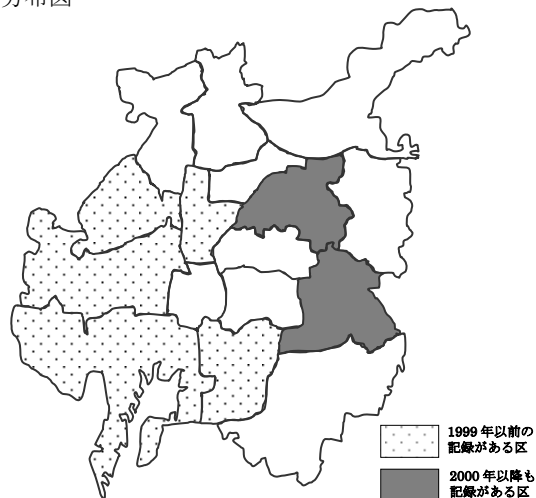
【保全上の留意点】

多数の産地で多産していた頃なら、自然度の低い水域でも生息し得たと思われるが、産地が減った現在では、基本的には植生豊かな自然度の高い池沼の確保が必要であろう。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1968. 愛知県のムスジイトトンボ. 佳香蝶, 20(60):101-104.
高崎保郎, 2009. 名古屋城及び周囲の動植物誌. ため池の自然, (47):8-18.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris)

カテゴリー

【選定理由】

湿地の開発による喪失、湿性植物の伸長等による湿地の状態の変化により、特に平野や平野に接する丘陵部で著しく減少した。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長27mm内外の華奢なイトトンボ。雄は黄緑色で腹端のオレンジ色が目立つ。雌は未熟時はオレンジ色であるが成熟すると緑色に変わり腹部背面に黒条が現れる。

幼虫の尾鰭は柳葉状で先端は尖り無斑である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、守山区、緑区、名東区、天白区と港区の1ヶ所で記録がある。

【県内の分布】

平野や丘陵から山地にかけて、局所的ではあるが広く分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。北海道は絶滅と見られる。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、極東ロシア。

【生息地の環境／生態的特性】

平地、丘陵、低山地の湿地や池畔の湿地状部、時として廃田や山峡の水田でも見られる。生息できる湿地は水深が浅く、湿生植物の丈が低い状態の時に限られ、湿地の状態に変化はなくても草丈が高くなっただけで消滅する。

イトトンボの中では小型脆弱で発生場所に固執すると見られているが、市街地の公園や学校ビオトープに飛来した例も観察されており、かなり移動分散力を有するのではないかとと思われる。成虫は6～7月に出現する。

【現在の生息状況／減少の要因】

比較的近年市東部の丘陵地帯と南西部の低地1ヶ所で記録があった。隣接する尾張東部丘陵でも減少しており、長久手市では1ヶ所の産地しか現存しない。

主として平野や隣接丘陵の湿地の喪失や、湿地が存在しても植生の状態の変化により生息可能でなくなることにより減少した。

【保全上の留意点】

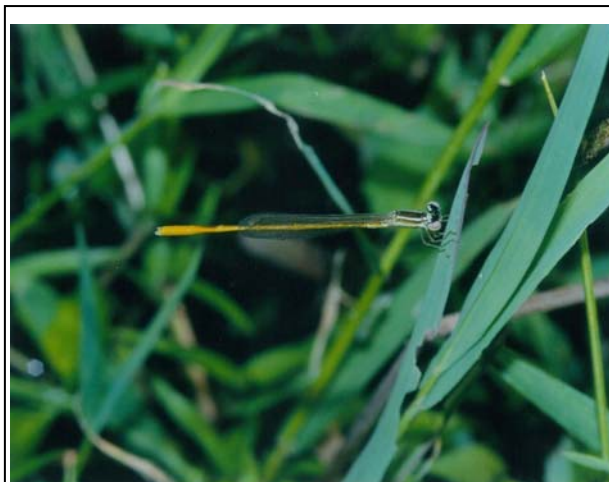
湿生植物が適度に生育する浅い湿地の保持が必要である。

【特記事項】

和名、学名のモートンはイギリスのトンボ研究者 K. Morton に由来する。

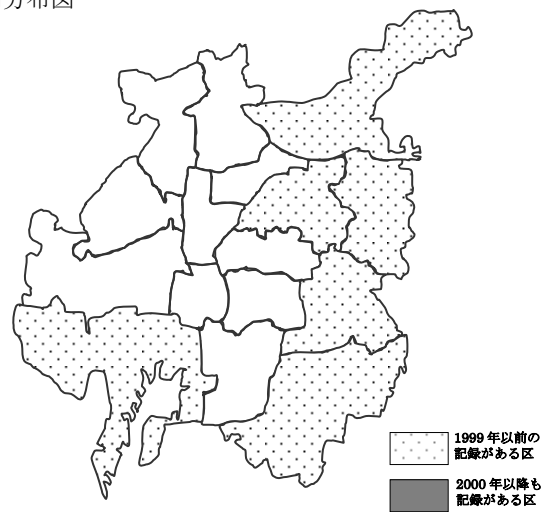
【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2010. 名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然, (49):12-18.



モートンイトトンボ 雄
愛知県長久手市東山、1995年6月24日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

サラサヤンマ *Sarasaeschna pryeri* (Martin)**【選定理由】**

樹林中の小湿地や水溜りの存在の指標となる種である。市域では母体となる東部の丘陵の樹林の減少が著しく、存続が危ぶまれる。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫の体長62mm内外。黒色の地に黄緑色斑を点在する。ヤンマとしては細身で小型。

幼虫はヤンマとしては小型で、頭部は角張り、腹部の側棘や凹凸が顕著で全体としてゴツゴツした印象が特徴。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

丘陵地から低山地に広く分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

済州島。



サラサヤンマ 雄
名東区猪高町上社猪高緑地、1987年5月30日、
高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵から低山地にかけて広く分布する。幼虫は落葉樹林の林内、林縁の小湿地や水溜り、時に明るい湿地に生息する。雄は林内の空間や池沼・湿地の縁で縄張を形成し、低くホバリングや往復飛行を繰り返す。条件の良い縄張場所には次々と雄が飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内でも東部の丘陵地帯の樹林内に小規模な湿地や水溜りが存在する場所では、現在も安定的に生息している。例えばまとまった二次林が現在も残存する名東区猪高緑地、千種区平和公園、天白区島田緑地、守山区の東端丘陵地などである。

平地に接する丘陵地の開発破壊が続き、小水域を涵養する二次林の衰失が減少要因である。

【保全上の留意点】

発生源である小水域を内在する或る程度まとまった丘陵地の二次林や、独立又は池畔の湿地の保全が必要である。

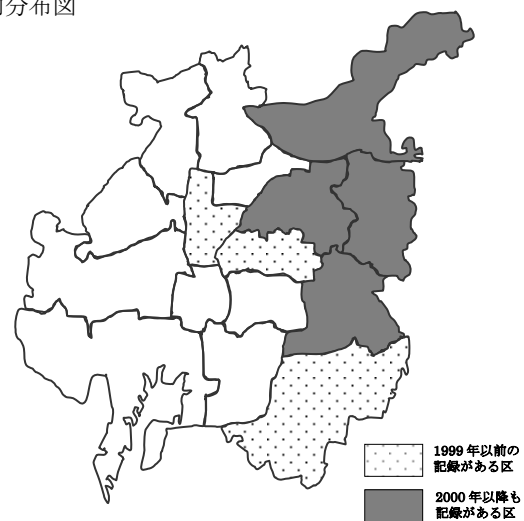
【特記事項】

中区栄の地上や地下街での目撃、採集記録があり、かなりの移動分散力を発揮することもあることが伺われる。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1994. 名古屋市中心部地下街でサラサヤンマを採集. 月刊むし, (286):12.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

コシボソヤンマ *Boyeria maclachlani* (Selys)**【選定理由】**

もともと本市では稀で、近隣の平野部では絶滅状態。東部丘陵地帯からの供給も期待し難い。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長85mm内外。黒褐色の地に黄斑を有する。腹部第3節が強くくびれる（細まる）ことが特徴で名の由来である。

幼虫は頭部後角に顕著な突起があり、腹部第4～9節の側棘が発達し、全体にトゲトゲしい印象と、触れると腹部を大きくそらし擬死行動をとるのが特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

かつては平地でも産したが、現在は丘陵から低山地に局所的に産する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島。



コシボソヤンマ 雄
千種区東山、1954年8月14日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平地の中小河川、丘陵、低山地の林間の小流に局所的に産する。幼虫は流下し終令幼虫は下流に多い。成虫は樹陰を好むが開けた川の岸に沿って飛翔すること多い。樹陰の流れの朽木等に産卵する。産卵は夜間も行われる。成虫の出現期は6～9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

多くの所では1950年代初期までは、平地の水路や中小河川でも見られたが、現在では丘陵から低山地の清流に局在する。三河地方には比較的広く分布する。瀬戸市南西部の丘陵地では多産する所もあり、守山区には生息の可能性もある。

特に平地中小河川の水質と改修による環境の悪化、川自体の消滅により、平地、平地に接する丘陵では著しく減少又は絶滅した。

【保全上の留意点】

平地、平地に接する丘陵地の中小河川の水質汚濁の防止と産卵適所となる水辺環境の保全が必要である。

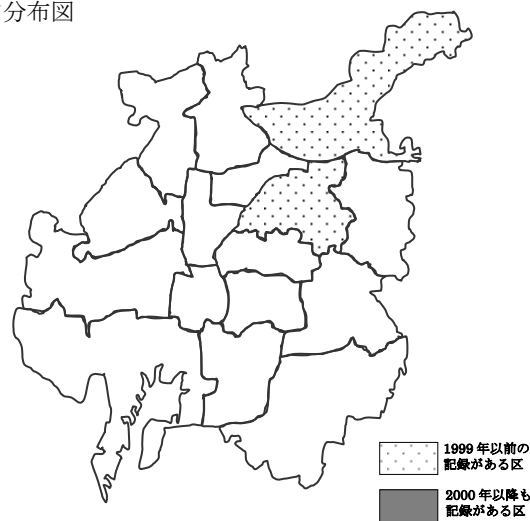
【特記事項】

やや生息の有無が把握しにくい種である。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫（上）、pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

マルタンヤンマ *Anaciaeschna martini* (Selys)**【選定理由】**

かつては市街地でもよく見られたが、生息できる止水域の減少により明らかに衰退した。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長75mm内外。雄は濃褐色地にすこぶる美しいコバルトブルーの複眼と胸斑を有する。雌は濃褐色地に黄緑斑を有し、成熟すると翅は濃い褐色になり高飛していても判別し易い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、中区、昭和区、熱田区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平地から丘陵地に広く分布する。

【国内の分布】

宮城県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア、インド。



マルタンヤンマ 雄
南区呼続四丁目呼続公園、1971年8月1日、
清水典之 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地から丘陵地にかけての水生植物が豊富な池沼や、林内、林縁の水溜りのような小池に生息する。

成虫は昼間は林内に潜み、夜明けや夕方薄暮時に池沼、水田や空き地を高飛、或いは低空を敏速に飛翔する。成虫出現期は6～10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

成虫は昼間は殆ど行動しないので見付け難いこと、高飛又は敏速に飛翔するので採集し難いこと、発生源の小水域が発見しにくいことなどから、広く分布する割には確実な生息の把握は困難である。近年では守山区、名東区、天白区など市東部寄りの丘陵地形に所在する緑地で成虫又は幼虫が知られている。

生息水域を含む緑地や良好な池の宅地開発等や環境整備による消滅が減少の主要因である。

【保全上の留意点】

市内に残存する生息可能水域のある緑地の保全が重要である。

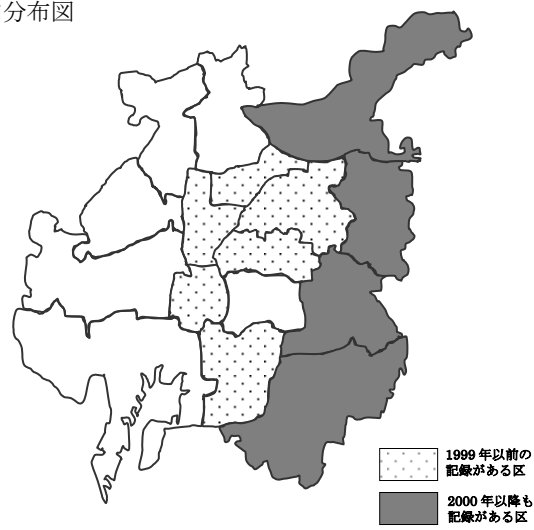
【特記事項】

本種は成虫よりも幼虫又は羽化殻による方が生息確認し易い。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
鵜殿清文・鵜殿 茂・清水典之, 1974. 黄昏活動性のヤンマ3種. 佳香蝶, 26(100):95-98.
なごや生物多様性保全活動協議会, 2013. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書. P.260. 名古屋.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

ナゴヤサナエ *Stylurus nagoyanus* (Asahina)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

市内で発見される個体の発生源は必ずしも明らかでないが、大・中河川の水質、水辺環境の悪化により減少した。名古屋を基産地とする。

【形態】

成虫は体長62mm内外。黒地に黄斑を有し、腹部第7～9節が著しく広がった中型のサナエトンボ。近似種メガネサナエに酷似するが、やや小型であること、腹部第4～7節の黄斑が環状に腹部側面に続くことで区別できる。

幼虫は細長い。メガネサナエに酷似するが腹部第9節がやや太短いことで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、東区、北区、西区、中村区、中区、昭和区、瑞穂区、熱田区、南区、守山区、緑区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張平野を中心に尾張に接する西三河の一部で記録されている。

【国内の分布】

宮城県、山形県以西の本州、四国、九州に局地的に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平野の大・中河川の下流域に生息する。往時はその支流にも生息していたと考えられる。少数ではあるが愛知用水を流下し、下流の調整池で羽化することもある。幼虫期は複数年で砂泥底の深みに棲み、盛夏の候に泳いで深みから岸に達し羽化する。

成虫は極めて強い移動分散性を有し、市街地でしばしば発見される。名古屋市でも発見される区が多いのはそのためである。成虫は8～9月を中心に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県で確実に産卵、羽化が認められているのは木曽川であり、そこから導水している愛知用水水路とその調整池では僅かながら羽化が確認されている。緑区の記録はその一例である。瑞穂区天白川では、かつては定着していたと思われる。本種は強い移動分散性を有することにより、市内でも中区、東区始め広範囲に間々飛来採集例がある。近年では西区の庄内川畔で定着を思わせる観察例がある。

大・中河川の水質悪化、河川改修等による水辺環境の劣化、河川周辺の緑被率の低下が減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内での定着ははっきりしないが、一般的には大・中河川の水質汚濁防止、自然状態が良好な水辺と水辺林の保持が必要である。

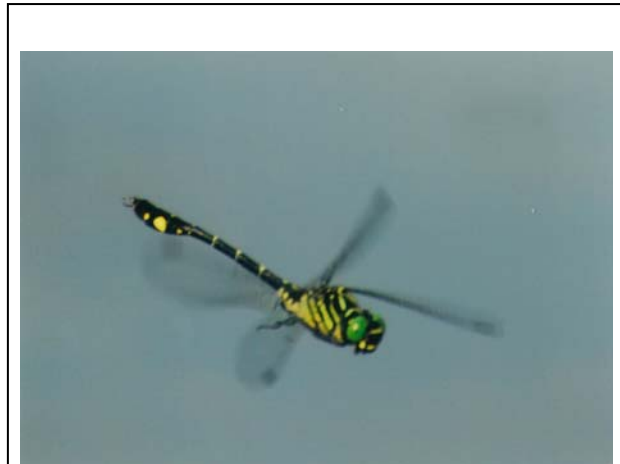
【関連文献】

相田正人, 1989-1990. 濃尾平野のナゴヤサナエ (1)～(7). 月刊むし, (221)-(226).

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.

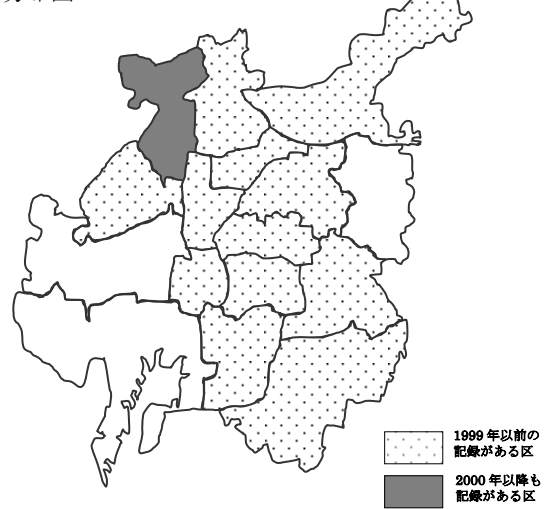
鵜殿清文, 1994. 愛知県のメガネサナエおよびナゴヤサナエの産地追加. 佳香蝶, 46(179):38.



ナゴヤサナエ 雄

西区堀越町、2013年8月18日、清水典之 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

メガネサナエ *Stylurus oculatus* (Asahina)

カテゴリー

【選定理由】

市内で発見される個体の発生源は必ずしも明らかでないが、中河川の水質、水辺環境の悪化により減少した。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

成虫は体長65mm内外。黒字に黄斑を有し、腹部第7～9節が著しく広がった中型のサナエトンボ。近似種ナゴヤサナエに酷似するが、やや大型であること、腹部第4～7節の黄斑が塊状で腹部上面に止まり腹部下方に筋状に続かないことで区別できる。

幼虫はナゴヤサナエに酷似するが、腹部第9～10節がより細長く全体的に細長い印象が強いことで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

中村区、瑞穂区、南区、守山区、緑区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張平野を中心に、西三河の矢作川水系で記録されている。

【国内の分布】

本州の青森県から近畿まで局地的に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平野或いは丘陵を主として中河川の中・下流域、時に大河川の砂泥底に生息する。ナゴヤサナエが主として大河川に拠るのとは異なる。大河川から取水する用水（例：愛知用水）の下流や調整池に流下し、そこでかなりの量が羽化することもある。波のある大湖（例：琵琶湖・諏訪湖）からも発生する。

成虫は7～8月を中心に比較的長期にわたり羽化し、成熟成虫は8～9月に多い。未熟成虫はかなり移動分散することがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では愛知用水とその調整池で羽化と成虫が、矢作川水系で産卵と成虫が記録されている。1990年代初頭には緑区内の愛知用水で多数が羽化した。かつては市内や市周辺の丘陵地帯の中河川に定着していたと考えられ、例えば瑞穂区内天白川では比較的多数の成虫が認められた。現在市内に確実な発生源が存在する可能性は低い、飛来の可能性はあろう。

中河川の水質悪化、河川改修等による水辺環境の劣化、河川周辺の緑被率の低下が減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内での定着は不明であるが、一般的には大・中河川の水質汚濁防止、良好な水辺と水辺林の保全である。

【特記事項】

本種は成虫よりも幼虫又は羽化殻による方が生息確認し易い。

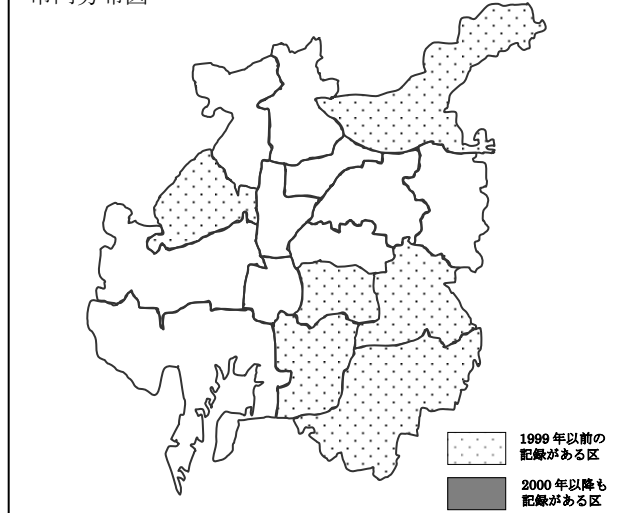
【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
鶴殿清文, 1994. 愛知県のメガネサナエおよびナゴヤサナエの産地追加. 佳香蝶, 46(179):38.



メガネサナエ 雄
瑞穂区弥富町天白川、1970年9月6日、高崎保郎 採集

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 エゾトンボ科>

トラフトンボ *Epithea marginata* (Selys)**【選定理由】**

平野の植生豊かな池沼に生息するが、そのような場所の消滅、環境悪化により減少した。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は53mm内外。狭義のエゾトンボ科に属するが、体は金属緑色でなく黒地に橙褐色斑を有する。雌の前後翅前縁に黒褐色帯を有する。

幼虫はややゴツゴツした感じで肢が長い。背棘は2～9節にある。側棘は顕著でない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、中区、昭和区、南区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平野、丘陵に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



トラフトンボ 雌
名東区猪高町高針牧野ヶ池緑地、2013年5月9日、
高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地、丘陵の浮葉、沈水植物が豊富な池沼に生息する。未熟成虫は林間空地の上空をゆっくり旋回飛行する。成熟雄は岸に沿って巡回飛行する。雌は卵塊を腹端につくり、接水放卵すると卵塊はゼラチン様紐状になり沈水植物にからみつく。出現期は4月下旬～5月。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては中区の市街地路上でも飛行するのが見られたが、水生植物に富む良好な池沼の消失や環境悪化により減少した。現在市内市街地でも或る程度自然状態の良い天白区天白公園大根池、同区大堤池、千種区平和公園猫ヶ洞池、名東区牧野ヶ池緑地牧野池では引き続き生息している。市内の樹林を伴う水生植物が豊富な池を精査すれば、産地は増える可能性はある。隣接する長久手市でも安定的に発生している。

植生豊かな池沼と林地の消失が減少要因である。

【保全上の留意点】

枕水・浮葉植物が生育する池の水質と周辺林地の保全。分布する公園の池では外来魚、鯉等の捕食性魚類の排除。

【特記事項】

2010年の補遺版では絶滅危惧Ⅱ類に引き上げられたが、その後の生息状況に鑑み準絶滅危惧に戻した。

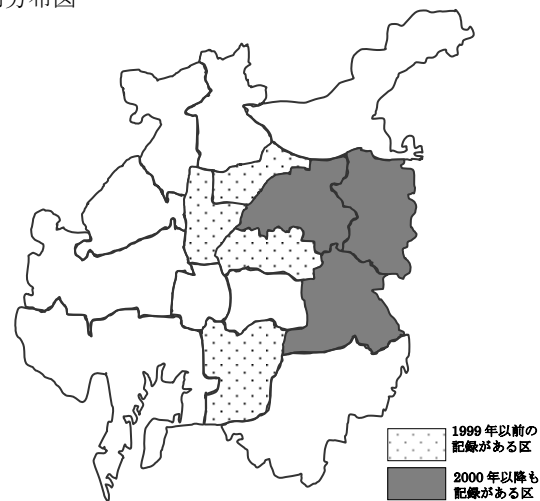
【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

なごや生物多様性保全活動協議会, 2013. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書. P.260. 名古屋.

(執筆者 高崎保郎)

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea* Rambur

カテゴリー

【選定理由】

種としてはむしろ普通種で、明るい湿地依存の指標としての意義が大きい。然し市内に限っていえば、本種の残存している湿地は極く僅かでその存続が危ぶまれる。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は19mm内外。雄は成熟すると真赤になる。雌は黄色、茶色、黒色の斑模様。極く稀に黒化傾向を示す個体が発見される。

幼虫は終令で9mm前後の極く小型で太短い体形。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

県内全域の主に丘陵から低山地にかけて分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア、オセアニアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から低山地にかけ広く分布するが、市周辺では尾張東部丘陵地帯特有の地層により生じた湧水湿地（低湿地）群に多産する。平らな大きい湿地、池頭流入部の湿地、斜面崩壊型湿地やその下部に生じた湿地、初期の廃田などいろいろな形の湿地に生息するが、水深が極く浅く、水域に生ずる湿性植物の丈が低く、日当たりが良いことが条件である。

成虫は常に湿地上や周囲の草むらで見られることから、発生場所から遠く離れないと一般に解説されることが多いが、かなりの移動分散力を有し、最大1.5km程移動したことがマーキングにより確認されている。成虫の出現期は5月下旬～9月上旬。

【現在の生息状況／減少の要因】

市東部に隣接する尾張東部丘陵地帯西端に位置する長久手市や瀬戸市海上の森などには多産するが、市内で自然状態で残存するのは、守山区上志段味東谷の一、二の湿地位になったと見られる。同区大森八竜湿地は近年姿を消していたが、2013年少数が再確認されている。人為管理下では千種区名古屋大学博物館野外観察園、天白区島田緑地などで見られる。これらは自然由来の個体である。名東区明徳公園の湿地は無為に埋め立てられ、同区猪高緑地では水田放棄や植生遷移により本種は消滅した。

造成による湿地の消滅と、高茎草本の繁茂等環境変化などによる、生息可能な湿地自体の衰失が減少の主要因である。

【保全上の留意点】

湿地本体とそれを涵養する周辺林地の保全である。生息可能な状態を維持するためのある程度の人為管理も場合により必要であろう。

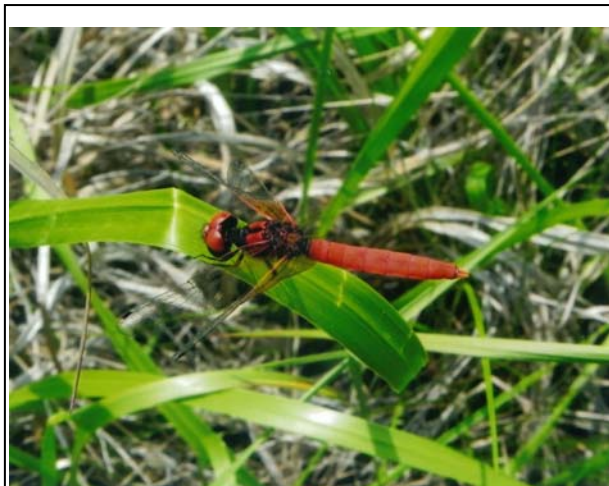
【特記事項】

千種区東山植物園に造成された斜面湿地で見られる本種は、出自不明の移入由来であり、真の東山公園産ではない。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.

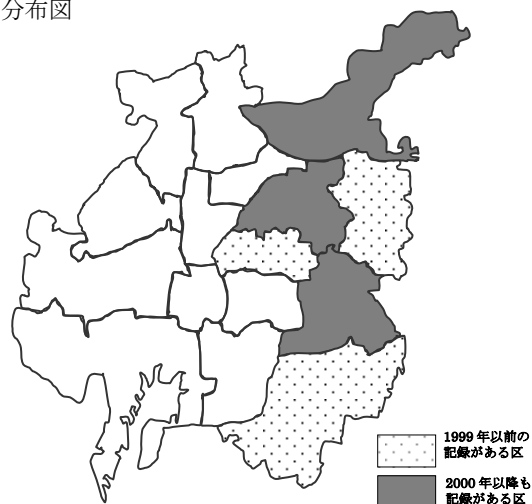
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.



ハッチョウトンボ 雄

守山区上志段味東谷、2013年6月5日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <ゴキブリ目 オオゴキブリ科>

オオゴキブリ *Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

主として、平野部の遷移の進んだ照葉樹林の太い朽ち木中に生息している。朽ち木の木質部を食い、ほぼ一生を朽ち木の中で過ごす。そのため、移動力が弱く分布域の拡大が困難であるため、開発による生息環境の変化や消失が個体数の減少につながる可能性が高い。

【形態】

体長は40～45mmで、体は太く厚く、体色は光沢のある漆黒色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

熱田区熱田神宮と千種区東山公園に記録がある。

【県内の分布】

全体に分布しているが、三河地方を中心に多く、河川に沿って内陸部に広がっている。

【国内の分布】

照葉樹林が分布する本州（関東以西）、四国、九州のほか、佐渡島、隠岐島、対馬、屋久島から沖縄県に分布する。八重山諸島には亜種ヤエヤマオオゴキブリが分布する。

【世界の分布】

台湾、中国。



オオゴキブリ

熱田区熱田神宮、2013年12月8日、水野利彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

市内に残された照葉樹林内の林床にある太い朽ち木に生息している。胎生である。朽ち木中に坑道を作って成虫と幼虫が群生している。

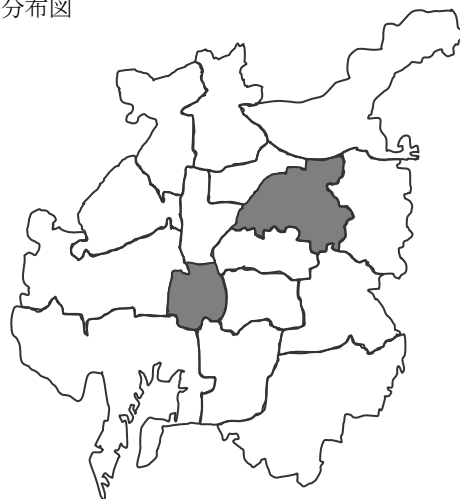
【現在の生息状況／減少の要因】

熱田神宮の神域では生息を確認しているが、かつて記録された千種区の東山公園・平和公園ではもう見られなくなった。施設の建設や林床の乾燥などが原因と考えられる。県内では温暖化の影響か、森林育成の結果かは不明であるが、分布域が拡大している。

【保全上の留意点】

現在残されている照葉樹林を保存し、太く湿潤な朽ち木の残る林床の環境を維持することが必要である。森林育成も有効な手段の一つと考えられる。

市内分布図



【関連文献】

- 朝比奈正二郎, 1988. 日本産ゴキブリ分類ノート, X VII. オオゴキブリ族の種類. 衛生動物, 39(1):53-62.
 佐藤正孝, 1978. 熱田神宮林の昆虫類. 熱田神宮林苑保護委員会調査報告書, pp.93-110.
 日浦勇ほか, 1977. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.52.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10.

(執筆者 佐藤正孝、加筆 水野利彦)

昆虫類 <カマキリ目 ヒメカマキリ科>

ヒメカマキリ *Acromantis japonica* Westwood

カテゴリー

名古屋市長2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

樹上性。開発などによる雑木林の減少と共に生息環境は悪化しつつある。

本種は環境変化に対して適応性が低いためか、住宅地や公園など人間の生活環境に近い生息地の記録は少ない。今後、ますます雑木林が減少していくと生息数の減少が懸念される。

【形態】

小型種。有翅。他のカマキリ類からは、前脚脛節の外縁刺が横向きに伏して相互に密着していること、後脚腿節には葉片状の付属物があることなどから区別できる。

体長（翅端まで）雄、雌とも25～32mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区。

【県内の分布】

知多半島を含む平地～山地に広く分布する。豊根村、旧額田町、豊田市（木瀬町、足助町、旭町など）、瀬戸市、春日井市、犬山市、南知多町、美浜町など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島など。

【世界の分布】

台湾。



ヒメカマキリ
守山区東谷山、1989年10月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹上性。広葉樹林やそのマント群落に見られる。成虫の走光性は比較的強く、店頭の灯火や自販機のみかきなどにもよく飛来する。その際上位の捕食者（ヤモリやカエルなど）に二次的に捕食されることがある。本種保護の際の考慮すべき点の一つと思われる。

卵（卵鞘）は樹幹のほか、林床の石や倒木の下側などに産みつけられることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の守山区東谷山はその中腹～山頂にかけ雑木林が残されており、この状況が続く限り本種の存続は可能であろう。

【保全上の留意点】

生息環境である雑木林を残すこと。林床の過度の清掃・整備は産卵場所を奪うことにもなるので適度に控えること。産地周辺の夜間の道路照明は、昆虫が光源の存在を感じにくいLEDを使用することが望ましい。

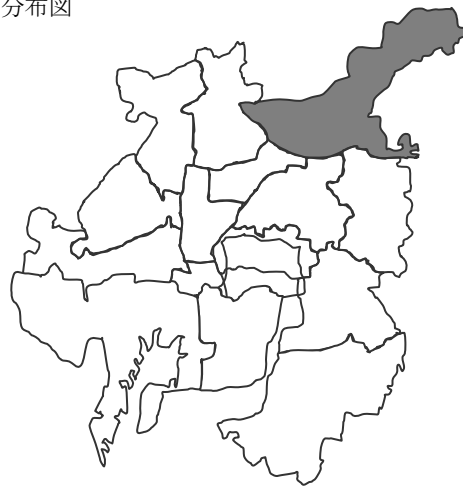
【特記事項】

近似種サツマヒメカマキリとの区別点が明確になり、本種は夏から秋に出現し卵越冬することの他、頭部や後腿節の突起の形状、前翅の翅脈の違いが指摘されている。名古屋市には両種が生息する可能性がある。

【関連文献】

- 岡田正哉, 2000. カマキリのすべて. トンボ出版, 大阪.
 岡田正哉, 1990. 愛知県のカマキリ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.82-83. 愛知県.
 日浦 勇, 1993. ヒメカマキリ科. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.48. 保育社, 大阪.
 吉鶴靖則, 2012. 豊田市のヒナカマキリの2つの記録とサツマヒメカマキリの記録について. 佳香蝶, 64(251)57-60.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10. 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 コロギス科>

ハネナシコロギス *Nippancistroger testaceus* (Matsumura et Shiraki)**【選定理由】**

本種は雑木林に生息する昆虫類の中での上位捕食者。市内での雑木林の減少に伴い本種の生息環境は狭められつつあり、生息地によっては個体数も減少に向かっている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。ずんぐりした体型。全体にツヤのある黒褐色で頭・胸部背面と脚は黄褐色。まれに黒褐色部がほとんど消失した個体もある。雌の腹端には7~8mmのナギナタ状の産卵器がある。

体長(腹部まで)は雄、雌とも13~18mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区、千種区、天白区、守山区。

【県内の分布】

渥美半島、知多半島を含め各地に広く分布する。犬山市、瀬戸市、常滑市、蒲郡市、田原市(渥美町)、知多市、美浜町、南知多町、設楽町、豊田市(稲武町、藤岡町、小原町、足助町、旭町、下山町、御作町など)旧作手村(作手地区、豊根地区)など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島など。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

広葉樹林に生息する捕食性の種類。樹上性。昼間は各種植物の葉を綴った巣に潜み、夜間に活動する。複数の幼虫が個々に巣を形成し、集まって生活することがある。行動は敏捷で鱗翅類の幼虫をはじめとする小型の昆虫類を捕食する。樹液や果実などにも来る。

【現在の生息状況／減少の要因】

昭和区(八事)の生息地は宅地開発が進み樹林が減少しつつあり環境は悪化している。守山区(東谷山)は生息地の山の中腹~山頂にかけては雑木林が十分に残されており、この状態が維持されるかぎり本種の存続は可能であろう。

【保全上の留意点】

雑木林の保存と共に本種の餌となる各種昆虫類も繁殖できるよう、下草の過度の刈り込みや樹木の過度な間引き・枝打ちは控えること。

【関連文献】

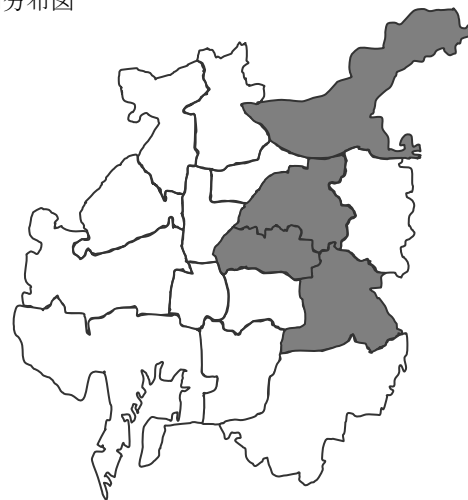
岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫(下), pp.5-20. 愛知県.
日浦 勇, 1993. ハネナシコロギス. 原色日本昆虫図鑑(下), p.58. 保育社, 大阪.
日本直翅学会(編), 2006. バッタ・コロギ・キリギリス大図鑑, p.10, pp.359-360. 北海道大学出版会, 北海道.



ハネナシコロギス

豊田市猿投山鈴ヶ滝、1982年6月、岡田正哉 撮影

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 コロギス科>

コロギス *Prosopogryllacris japonica* (Matsumura et Shiraki)**【選定理由】**

本種は雑木林に生息する大型捕食性昆虫として、市内ではハネナシコロギスを凌ぐ最上位の昆虫である。食物連鎖上位の昆虫であるが、個体数は少なく雑木林の環境変化の影響を受けやすい。

【形態】

有翅。頭は大きく体はズングリとしており一種の威圧感がある。体と脚は淡緑色で、畳んだ翅の背面は褐色。雌の腹端には 20～25mm の刀状の産卵器がある。

体長(翅端まで)は雄、雌とも 27～33mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、守山区。

【県内の分布】

渥美半島、知多半島を含む各地に広く分布する。犬山市、瀬戸市、蒲郡市、豊田市（足助町、稲武町、旭町、藤岡町、小原町）、岡崎市、田原市（渥美町）、設楽町、美浜町など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



コロギス

豊田市猿投山、1985年7月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹上性。広葉樹林に生息。昆虫の内ではカマキリ類と並ぶ上位捕食者の内の1種。近似種のハネナシコロギスよりは大型だが個体数は少ない。大型であるため、環境の変化に敏感であると思われる。夜行性であり、昼間は適当な植物の葉を綴って造った‘巣’に隠れている。主に昆虫類を捕食するが、果実や樹液なども食する。脅すと翅を広げて威嚇してくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区の生息地は松坂町と東谷山である。松坂町は小幡緑地に隣接。同緑地の一部には豊かな雑木林が残されている。東谷山もその中腹～山頂にかけては、県有林として良好な雑木林が見られる。両所とも過度の整備が行われない限り本種の存続は問題ないであろう。

千種区の生息地は平和公園。雑木林は豊かであるが、最近一部に広い芝地が造成され本種にとっては生息地が分断されることになった。しかしこれ以上の伐採・造成がない限り本種の存続は可能であろう。千種区東山公園でも生息が確認されている。

【保全上の留意点】

雑木林の保存と共に本種の餌となる各種昆虫類も繁殖できるよう、下草などは適当に残し、林床や林縁の過度の整備・清掃は控えること。また、本種に限らず、雑木林は道や芝地などで寸断することなく、樹上性の種類が自由に渡り歩けるよう配慮すること。

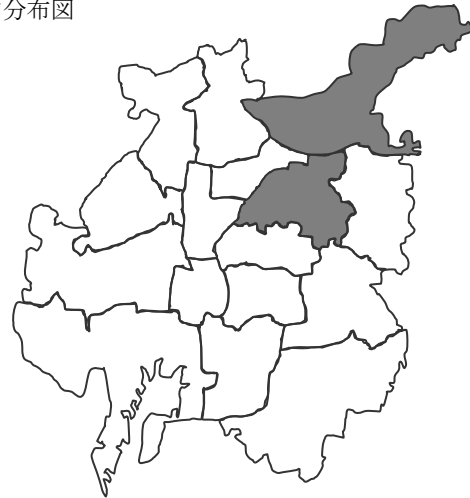
【関連文献】

岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目 (2). 愛知県の昆虫 (下), pp.5-20. 愛知県.

日浦 勇, 1993. コロギス. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.58. 保育社, 大阪.

日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コロギ・キリギリス大図鑑, p.5, p.358. 北海道大学出版会, 北海道.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 バッタ科>

ヤマトフキバッタ *Parapodisma setouchiensis* Inoue**【選定理由】**

翅が短く飛べないため生息地間の交流は多少とも乏しいと思われる。県内に点々と分布するが翅の長さなどに地域差が見られる。市内の分布は限られており、個体数も少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

中型種。短翅。翅頂は雄 7～8mm、雌 11～12mm。全体に草緑色。翅は褐色で、腹部背面で左右が接する。翅の長さなどは生息地により差がある。後脚下内側は赤紅色。

体長（腹端まで）は、雄 24～27mm、雌 32～36mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

知多半島を含む平地～山地に分布する。豊田市（稲武町、足助町、旭町、下山町、小原町）、瀬戸市、南知多町・美浜町など。

【国内の分布】

本州、伊豆諸島など。

【世界の分布】

韓国（済州島）、中国？。



ヤマトフキバッタ

守山区東谷山、1994年8月3日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹林性。広葉樹林周縁やそのマント群落に見られる。地中や倒木に産卵するが、湿った立枯木にも産卵することがある。

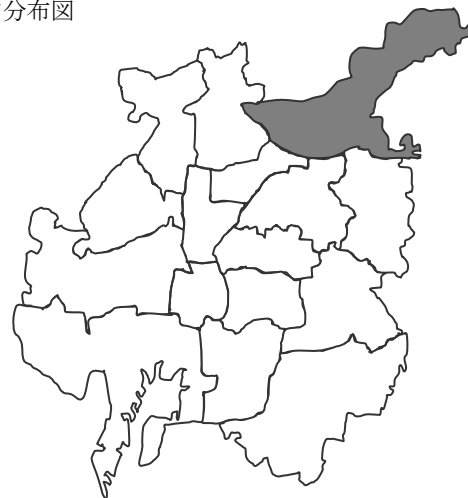
【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は守山区東谷山。山麓の用水路工事や公園化などはあるが、本種の発見された中腹～山頂部の生息環境は残されている。一応本種の存続は可能であろう。ただし現在の生息密度は低い。

【保全上の留意点】

現在ある広葉樹林を残すこと。クズのような大型の葉の上で休んでいることが多いのでこうした植物も適度に残すこと。

市内分布図

**【関連文献】**

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.

Tominaga, O., S. Y. Storozhenko and Y. Kano, 1996. Two new species and a new subspecies of the genus *Parapodisma* (Orthoptera, Acrididae) from Japan. *Tettigonia*, 1(1):1-23.

日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, pp.248-249, p.522. 北海道大学出版会, 北海道.

(執筆者 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 バッタ科>

セグロイナゴ *Shirakiacris shirakii* (Bolivar)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

草地性。湿地や河川周辺の湿った草地に生息する。こうした環境は排水工事などにより造成地とされやすく、湿地そのものの存続と共に本種の生息が懸念される。分布域は広いが、全国的にも個体数が少ない希少種である。

【形態】

有翅。前胸背面は濃いチョコレート色で淡色条に縁どられる。後脚脛節の中央付近から跗節にかけては赤紅色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

おもに三河平野部～尾張地方に見られる。岡崎市、犬山市、日進市、長久手市、春日井市、瀬戸市、武豊町、南知多町（日間賀島）など。

【国内の分布】

本州、四国、九州（対馬を含む）などに分布する。

【世界の分布】

ロシア沿海州南部、中国東部～東北部、台湾、カシミール、パキスタン。



セグロイナゴ

守山区東谷山、1986年8月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

湿地周辺や河川沿いの湿った草地に生息。排水工事等による人為的な乾燥化と共に、最近各地の湿地で自然的な乾燥も進んでいるようで全体的には環境悪化の傾向にある。

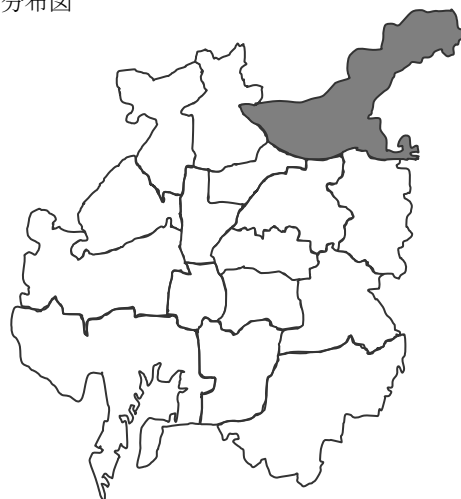
【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は守山区東谷山山麓の湿地。ここは近くの用水路の整備工事や宅地開発のため乾燥化が進み環境は悪化した。本種の生息が懸念される。

【保全上の留意点】

湿地そのものの保護と同時に、その湿地への水源・水脈を断たないように注意すること。

市内分布図

**【関連文献】**

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.
日浦 勇, 1993. セグロイナゴ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.80. 保育社, 大阪.
日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.270, p.531. 北海道大学出版会, 北海道.

(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 バッタ科>

ハネナガイナゴ *Oxya japonica* (Thunberg)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

稲作の害虫として知られる。1950年代の農薬の大量使用で本種は近似種のコバネイナゴと共に壊滅的打撃を受けたという。その後の農薬の規制でコバネイナゴの勢力は回復したが、本種は回復が遅れているという。その原因や今後の動向に興味もたれる。

【形態】

有翅。全体に緑色だが背面が淡色あるいは褐色～赤褐色のものもいる。複眼から後方にかけて暗褐色条が明瞭。翅は後脚腿節より長い。なお近似種コバネイナゴにも同程度に長い翅を持つ個体があり、同定には両種の翅の長さだけではなく、外部生殖器の構造の比較も必要である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

三河～尾張地方に点々と分布する。また伊勢湾内の島にも生息している。豊田市、犬山市、豊橋市、南知多町（篠島）、一色町（佐久島）など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島など。

【世界の分布】

韓国、台湾、中国、東南アジア？。

【生息地の環境／生態的特性】

湿地や水田、また河川沿いのよく湿った草地に見られる。生息地での個体密度は比較的高い。驚くとよく飛ぶ。灯火にも集まる。多くの場合コバネイナゴと混棲する。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は守山区東谷山山麓の湿地。この湿地は宅地造成のため広い範囲が消失した。残った草地も乾燥化が進み生息環境は悪化した。

【保全上の留意点】

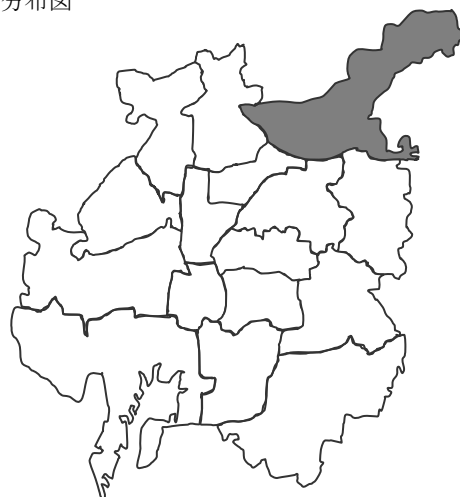
既知産地周辺の湿地・草地はこれ以上の開発・整備を控えること。水脈を確保し乾燥化を防ぐこと。



ハネナガイナゴ

守山区東谷山、1986年8月、岡田正哉 撮影

市内分布図

**【関連文献】**

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.
 日浦 勇, 1993. ハネナガイナゴ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.81. 保育社, 大阪.
 福原檜男, 1982. 水田に見られる直翅目害虫の見分け方 (1). 植物防疫, 36(11):34-38.
 日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.265, p.529. 北海道大学出版会, 北海道.

(執筆者 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <ナナフシ目 ナナフシモドキ科>

ナナフシモドキ *Ramulus mikado* (Rehn)**【選定理由】**

樹上性。市内の雑木林が急速に失われつつあり、本種の生息地も減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。単為生殖。触角は短く前脚腿節の半分ほど。体は細い枝状。全体に黒褐色～灰褐色あるいは緑色。複眼間には黒色条がありその両端には角状の突起がある。

体長雌 74～100mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、熱田区、守山区。

【県内の分布】

平地から山地に広く分布する。豊根村、稲武町、豊田市（旭町、足助町、藤岡町）、岡崎市（額田町）、作手村、犬山市、瀬戸市、長久手市、豊橋市、小牧市。

【国内の分布】

本州、四国、九州（対馬を含む）など。

【世界の分布】

韓国、中国。



ナナフシモドキ

瀬戸市大松、1991年8月1日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹上性。広葉樹林とその周縁で見られる。局所的に生息密度の高い所がある。食性は広いが、主にサクラ類のほか、カシ・コナラ類を好む。社寺林など比較的小規模な樹林でも生息できる。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の千種区月ヶ丘（住宅地にある）、熱田区熱田神宮は孤立した生息地となっている。本種は無翅で移動能力は乏しく、他所から自発的な移入は望めない。このような分断された生息地での存続は困難と思われる。千種区東山公園での生息も確認された。今回の調査で、守山区東谷山麓（2013.6.3）における本種の生息が確認された。

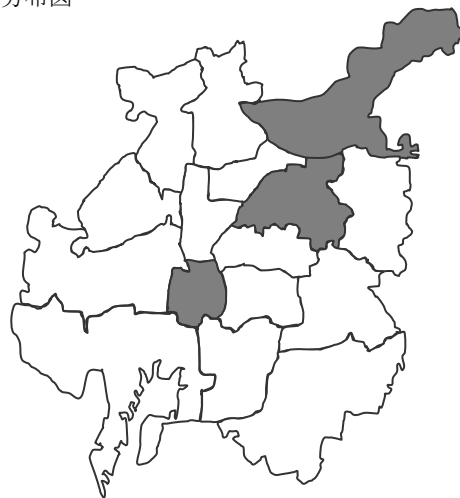
【保全上の留意点】

樹林の伐採を最小限に止めて、マント群落や低木を残すこと。また、更なる土地造成を控えること。

【関連文献】

- 岡田正哉, 1993. ナナフシモドキ名古屋で採集される. 佳香蝶, 45(176):58.
 岡田正哉, 1990. 愛知県のナナフシ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.95-96. 愛知県.
 岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版, 大阪.
 日浦 勇, 1993. ナナフシモドキ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.54. 保育社, 大阪.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10. 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆者 岡田正哉, 加筆 水野利彦)

昆虫類 <ナナフシ目 トビナナフシ科>

トゲナナフシ *Neohirasea japonica* (de Haan)**【選定理由】**

広葉樹林林床やその周辺の下草の多い湿った環境を好む。市内でのこうした環境は開発や過度の整備のため乾燥化が進み、本種の生存が困難になりつつある。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。単為生殖。触角は前脚より長い。体は太い棒状で全体に淡黄褐色～黒褐色で稀に白化の強い個体もある。全身に鋭い刺状突起がある。

体長は雌 57～75mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区。

【県内の分布】

瀬戸市、豊田市、長久手市、東栄町。

【国内の分布】

本州、四国、九州、伊豆諸島、奄美大島、沖縄本島など。

【世界の分布】

台湾北部、中国。



トゲナナフシ

守山区大森、1989年11月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

地上徘徊性。広葉樹林林床やその周縁の下草の多い日陰気味の湿潤な環境を好む。若令の幼虫ほど1ヶ所あたりの生息密度が高い傾向にある。秋期にはひなたに出ている個体がよく見られるようになる。

食性は広く 59 種類以上の広葉樹や草が食植物として知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の守山区大森周辺は、開発が進み生息環境は狭められつつある。ただし一部には湿潤な雑木林が残されており、また近くには神社や寺の林も残されているので、少なくとも当分の間は本種の存続は可能であろう。

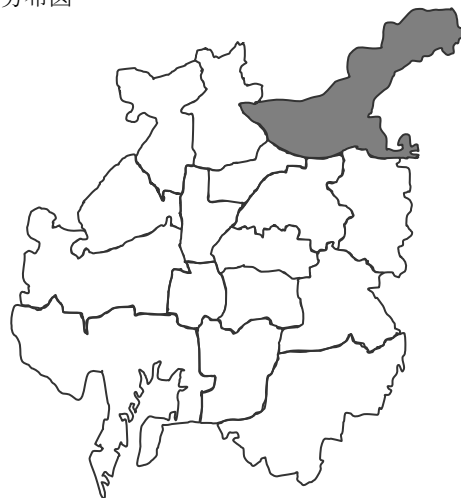
【保全上の留意点】

広葉樹林とその周縁の湿潤なマント群落や草地を保持すること。過度の草刈りや整備は林床やマント群落の乾燥化を進ませるので注意が必要。

【関連文献】

- 岡田正哉, 1990. トゲナナフシ名古屋市に産す. 佳香蝶, 41(161):59.
 岡田正哉, 1990. 愛知県のナナフシ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.95-96. 愛知県.
 岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版, 大阪市.
 日浦 勇, 1993. トゲナナフシ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.55. 保育社, 大阪.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10, 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆 岡田正哉, 加筆 水野利彦)

昆虫類 <カメムシ目 セミ科>

ハルゼミ *Terpnosia vacua* (Olivier)**【選定理由】**

主として平地から丘陵地のマツ林に発生することから、宅地造成により生息地が減少し、それとともに個体数も少なくなっている。また、マツ枯れによる影響も見られる。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は雄で26～31mm、雌で22～26mmと雄の方がやや大型である。

体色は黒みが強く、灰白色の鱗毛が密生する。雄の腹部は袋状に細長い、雌では短く、産卵管が突出する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主として東部丘陵帯であるが、正式な記録は非常に少ない。

【県内の分布】

県内ほぼ全域。

【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



ハルゼミ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主として平地から丘陵地にかけて、マツ林に限って生息する。

県内のセミ類ではもっとも早く、4月下旬頃から出現し、6月上旬頃まで見られる。1頭が鳴き始めると、他の個体も同調して合唱する習性がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

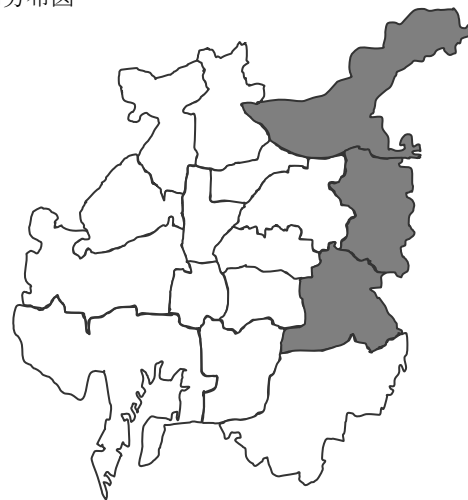
市内東部の丘陵帯が主な生息地であったが、以前と比べかなり減少している。

宅地造成など樹林地の伐採による生息地の消失が大きな減少要因である。

【保全上の留意点】

現存するマツ林の環境維持と、マツ枯れで荒廃した樹林で、マツ類の植樹を進め植生回復に努めることが必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

林 正美, 1990. 日本産セミの分布調査報告 (2). 日本セミの会会報, 9(1-3):1-45.

新修名古屋市史資料編集委員会編, 2008. 第8節昆虫類 5カメムシ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.161-165. 名古屋市.

(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 タイコウチ科>

タイコウチ *Laccotrephes japonensis* Scott**【選定理由】**

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。
市内における正式な記録も非常に少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は30～38mm、体色は濃褐色で、前脚が鎌状を呈し、腿節基部付近に棘を有する。
呼吸管が長く、体長と同じくらいの長さがある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区に記録がある。

【県内の分布】

全域に分布するが、西三河・尾張地方における記録が多い。

【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬、奄美大島、徳之島、沖縄島。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島、台湾、マレーシア。



タイコウチ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水草の豊富なため池、休耕田などの浅い水たまりなどに生息するが、河川の淀みにも見られる。

鎌状を呈した前脚でヤゴやオタマジャクシなどを捕らえ、体液を吸う。

【現在の生息状況／減少の要因】

正式な記録は非常に少なく、近年の確実な生息情報は得られていない。県内でも最近見られる機会が減っている。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

【保全上の留意点】

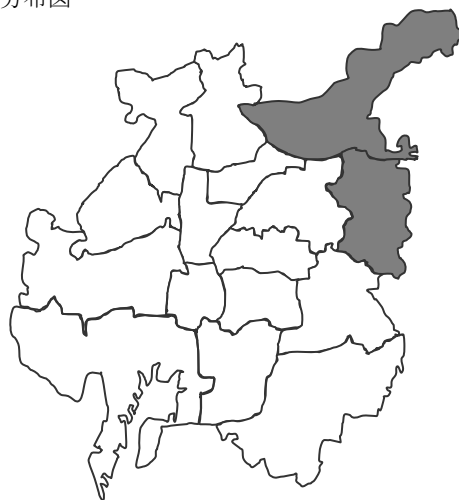
ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

【引用文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 タイコウチ科>

ミズカマキリ *Ranatra chinensis* Mayr**【選定理由】**

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。
市内における正式な記録も非常に少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は40～45mm、体は細長く前脚が鎌状を呈し、腿節中央付近に棘を有する。
呼吸管が長く、体長と同じくらいの長さがある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区に記録がある。

【県内の分布】

新城市、豊橋市、豊川市、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬、沖縄島。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州）、中国、朝鮮半島。



ミズカマキリ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水草の豊富なため池、休耕田などの浅い水たまりなどでよく見られるが、増水後の河川敷に形成された一時的な水たまりでも見られる。

鎌状を呈した前脚でヤゴやオタマジャクシなどを捕らえ、体液を吸う。

【現在の生息状況／減少の要因】

タイコウチと同様、平野部では近年確認されることが少なくなっている。市内でも最近の確実な記録が見られない。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

【保全上の留意点】

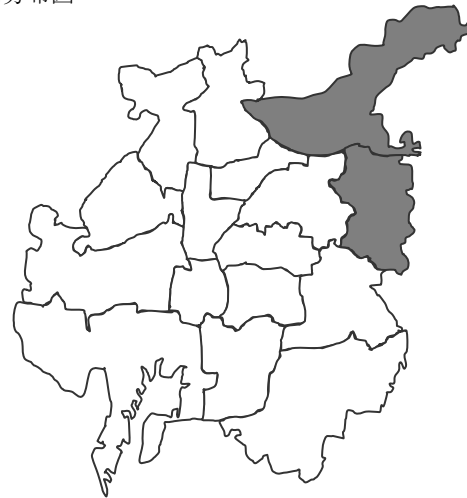
ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

【引用文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 ツチカメムシ科>

シロヘリツチカメムシ *Canthophorus niveimarginatus* Scott

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

全国的にも産地が限定され、草原環境の減少により、個体数が少なくなっていると考えられる。

市内では名古屋城で確認された古い記録しか存在しなかったが、近年守山区、北区で確認された。ただし分布は局所的である。

【形態】

体長は6～8mmの中型のツチカメムシである。体背面は密に点刻されるが、前胸背中央より前方に平滑部がある。

体色は光沢のある藍色で、側縁が狭く白色を呈する。

【分布の概要】

【市内の分布】

中区名古屋城が唯一の記録であったが、近年の調査で、守山区、北区で確認されている。

【県内の分布】

豊田市、日進市、豊明市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

ロシア、カザフスタン、モンゴル、中国、朝鮮半島、インド、ベトナム。



シロヘリツチカメムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

定期的な草刈りで適度に維持管理された河川敷の堤防、農業用ため池の堰堤付近などに生息する。

チガヤやススキなどイネ科植物に半寄生するカナビキソウが寄主植物として知られ、雌成虫が卵塊を保護する習性がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川・矢田川の河川敷に生息することが確認されたが、分布は局地的。

河川改修、宅地造成などによる草原環境の消失で、本種の生息に適した草地環境が減少している。

【保全上の留意点】

寄主植物であるカナビキソウは、一般に日当たりの良い草地に生育する植物であるため、定期的に草刈りを実施し、明るい草原環境を維持する必要がある。

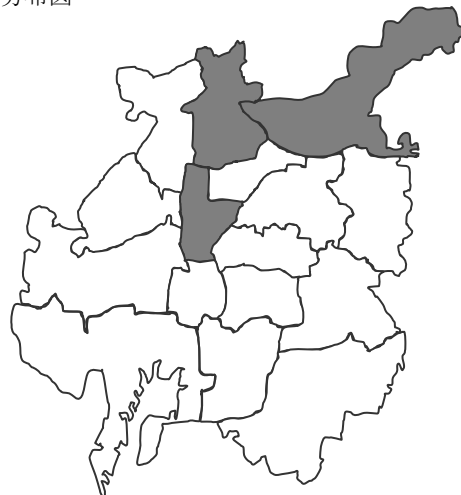
【特記事項】

ツチカメムシ科の種は、死後に脂が出やすく、このため近縁種であるミツボシツチカメムシ *Adomerus triguttulus* (Motschulsky) と誤認されることが非常に多い（ミツボシツチカメムシの小楯板や前翅の白紋が無いように見えるため）。豊田市から多数の記録があるが、矢作川の記録以外はすべて誤同定である。

【引用文献】

荻野欣三・友松和義, 1954. 名古屋附近のカメムシ目録. 36pp. 東海生物研究会.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

イグチケブカゴミムシ *Peronomerus auripilis* Bates

カテゴリー

【選定理由】

河川敷や池沼では護岸が進み、湿地状の草地が極端に減っている。このような環境に生息する本種は、近年急速に個体数を減らしている。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 9.0～9.5mm。背面は金色の細毛に覆われ、前胸背板は強く点刻され後角は小刺状。上翅の金属光沢は強く、条溝は深く強い点刻状で、間室は横しわ状に点刻される。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

愛西市、犬山市、岡崎市、豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



【生息地の環境／生態的特性】

平地の河川敷や湿地、湿度の高い草地や休耕田に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

2010年に行われた守山区の湿地調査では発見できなかった。

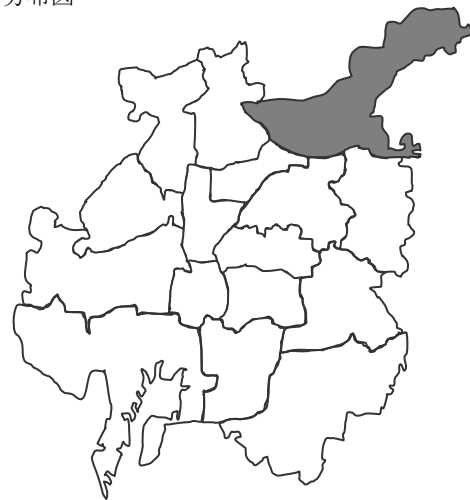
【保全上の留意点】

本種の生息する湿地は流出入水量の変化や植物の遷移により消失しやすい環境である。氾濫原を残すなど、湿地自体を壊さないことが必要である。

【特記事項】

似た環境には、他に同属のクロケブカゴミムシも生息する。

市内分布図



【引用文献】

岩崎 博・蟹江 昇，1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫（上），pp.309-338. 愛知県.
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.28,p.155. 保育社，大阪.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

マルチビゲンゴロウ *Leiodytes frontalis* (Sharp)

カテゴリー

【選定理由】

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

1.5～2.0mm。体型は短卵形で強く膨隆し、特に腹側で顕著。背面は黄赤褐色で強い光沢がある。触覚は基部 3～4 節が黄褐色で先端に向かい暗色になる。上翅は不規則で不明瞭な暗色紋を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

日進市、瀬戸市（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



マルチビゲンゴロウ

守山区、2012年6月9日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

池、沼、放棄水田などの浅瀬に生息する。生息池での個体数は多い。

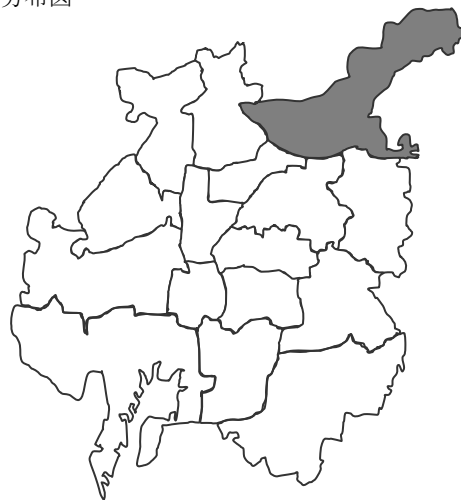
【現在の生息状況／減少の要因】

守山区では、ため池の浅瀬に生息しており安定しているが、池干しや池の改修などが行われれば危険である。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．
森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.33,p.186．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

コウベツブゲンゴロウ *Laccophilus kobensis* Sharp

カテゴリー

【選定理由】

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

3.4～3.8mm。体型は卵形で背面は密な網状刻印がある。頭部、前胸背板は黄土色。上翅は淡褐色から茶褐色で緑がかかるものもある。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区、守山区（すべて吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

弥富市、美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

中国。



コウベツブゲンゴロウ

弥富市上野町、2009年6月19日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、放棄水田などに生息する。産地はやや局所的であるが、庄内川河川敷からは纏まって得られたことがある（森・北山，2002）という。

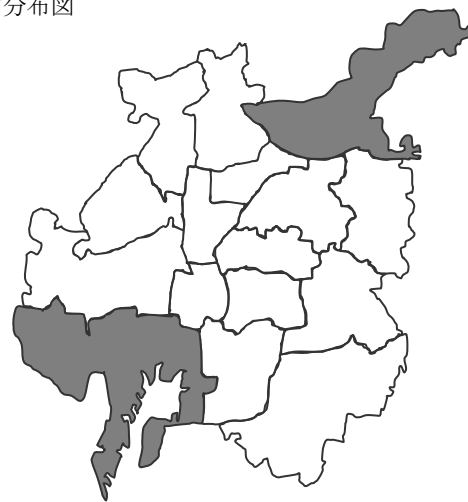
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.34.p.190，保育社，大阪．

森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* Sharp

カテゴリー

【選定理由】

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

8.0～10.0mm。体型は長楕円形で、全体に弱い金属光沢を帯びた黒褐色。前胸背板の両側は幅広く黄褐色。上翅も肩部から後方へ徐々に広がる黄褐色の帯紋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

中区、港区（すべて吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

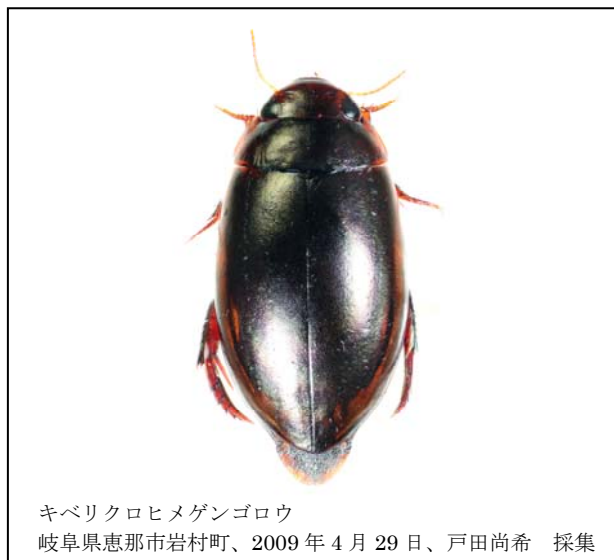
美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

朝鮮、中国など。



【生息地の環境／生態的特性】

ヨシなどが生えている比較的大きな池沼や河川敷にできた池などに生息している。やや局地的。

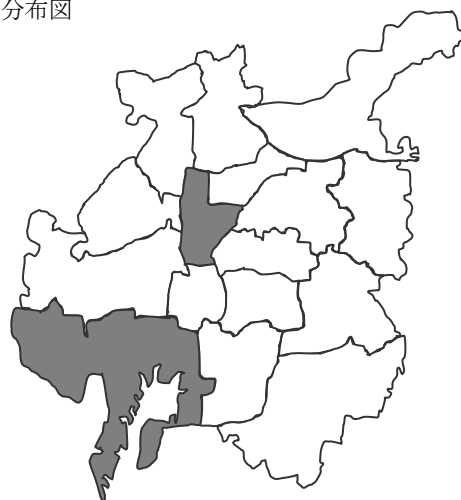
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でも激減している。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.35,p.194．保育社，大阪．
森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

マルヒラタガムシ *Enochrus subsignatus* (Harold)**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

4.8～5.0mm。体型は長楕円形で、黄褐色。上翅は密に点刻され、不鮮明な縦の紋がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、西区、港区、東区（すべて吉鶴ほか、2008）。

【県内の分布】

小牧市（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

台湾、中国。



マルヒラタガムシ
港区、2011年9月28日、池竹弘旭 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

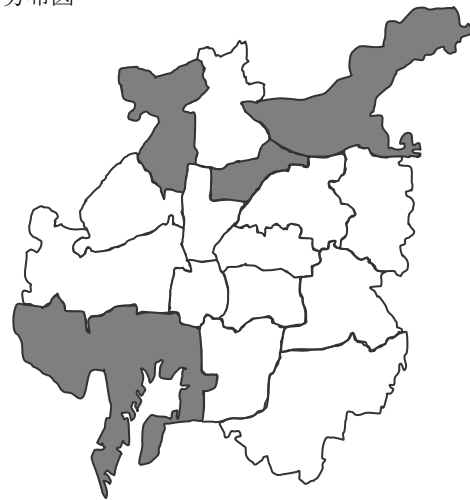
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.39,p.214．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

オオミズスマシ *Dineutus orientalis* (Modeer)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

かつて北海道から琉球にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

【形態】

7.0～12.0mm。体型は長卵形で黒色。背面はにぶい光沢がある。上翅側縁後方に顕著な突起がある。前胸背板と上翅の側縁は黄褐色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白区、守山区、北区、中村区、庄内川（すべて吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

豊田市、犬山市、田原市、佐久島。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

サハリン、シベリア、朝鮮半島、中国大陸、ベトナム。



オオミズスマシ

長久手市前熊、1993年9月1日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある止水域に生息する。

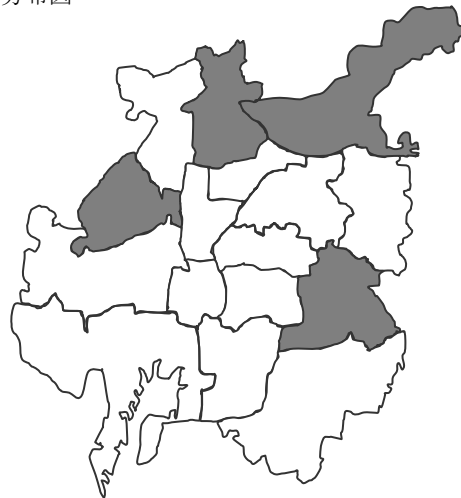
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。ここ数年、市内での記録は見当たらない。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.37,p.201．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 エンマムシ科>

ヤマトエンマムシ *Hister japonicus* Marseul**【選定理由】**

大型のエンマムシ類のうち特に平野部に生息する種は、牧場の閉鎖や衛生環境の整備に伴い生息が困難になってきている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 8.9～11.5mm。上翅の第1～2背条は完全で、第3背条は二分され、第4～5背条は翅端にあり、第6背条は欠如する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山（森・吉鶴・田中，2008）。

【県内の分布】

豊田市。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬、伊豆諸島、隠岐。

【世界の分布】

アムール、中国、韓国、ベトナム。



ヤマトエンマムシ

愛知県長久手市、2006年9月25日、戸田尚希 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

牛糞に集まる。

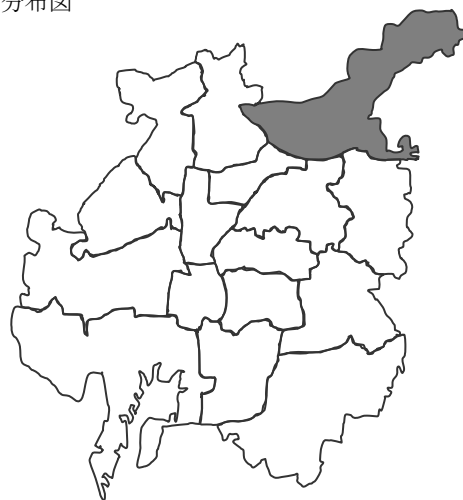
【現在の生息状況／減少の要因】

本種を含め大型のエンマムシ類は、近年いづれも発見が困難になってきている。生息環境の減少に影響されているものと思われる。

【保全上の留意点】

ウジ類を捕食するエンマムシ類の減少の背景には、野生動物の減少や衛生環境の整備による影響が少なからずあるため、本種の保全は単純ではない。

市内分布図

**【引用事項】**

森雄一・吉鶴清則・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然，pp.373-410．同目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

大原昌宏，1996．日本産エンマムシ上科概説Ⅳ．甲虫ニュース：7-10．

佐藤正孝ほか，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ），愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

上野俊一ほか，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.227．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 クワガタムシ科>

ヒラタクワガタ *Serrognathus platymelus pilifer* (Snellen van Vollenhoven)**【選定理由】**

平野部から低山地に生息する大型のクワガタムシである、各地で減少傾向にある。近年の飼育ブームにより本種の外国産を含む多くの飼育個体が野外に放たれており、放虫や逃走個体による遺伝子汚染の恐れも高まっている。

【形態】

体長 20～50mm。大あご 4～23mm。黒色でわずかに紫褐色をおびる。大あごは強力で、先端で急に内側に湾曲する。内歯は第1歯のみが顕著。先端に内方へ向く不明瞭な小歯がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

西区、中村区、熱田区、南区、千種区、天白区、守山区（以上、佐藤，1990）。

【県内の分布】

岡崎市、豊橋市、蒲郡市、安城市、新城市、豊川市、豊田市、西尾市、みよし市（以上、佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州（東北南部以南）、四国、九州。

【世界の分布】

インドネシア、マレーシア、台湾、中国、ベトナムなど東南アジアに広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

都市部でも、昔からの大径木が残っている林には生息していることがある。一般にウロを好み、数年に渡る寿命をもつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

里山的環境の消失により、急激に減少しているものと思われる。

【保全上の留意点】

大径木が寺社林や河畔林に多い為、現存する発生木並びに周辺環境の保全が急務であろう。

【特記事項】

地方変異が著しく、日本産は現在12亜種に分けられている。飼育放虫や逃走などにより、遺伝子攪乱が心配な種である。

カテゴリー

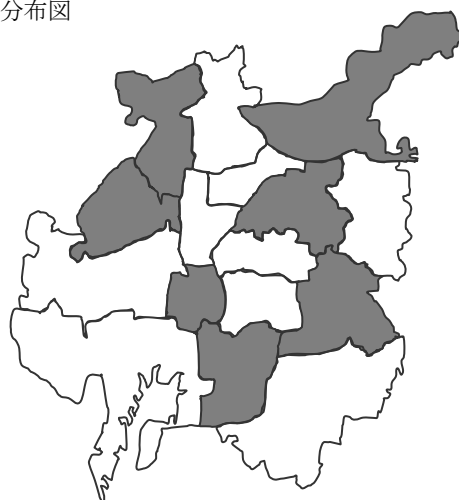
名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



ヒラタクワガタ

守山区、1999年8月29日、戸田尚希 撮影

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

【関連文献】

上野俊一ほか，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.343．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コガネムシ科>

コカブトムシ *Eophileurus chinensis chinensis* (Faldermann)**【選定理由】**

良好な林を背景とした肥沃な腐葉土に生息する。それらが減少すると共に本種は著しく少なくなっている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 18～24mm。黒色でやや光沢がある。雄では頭部に短い角があり、前胸背中央に円形のくぼみがある。雌の角は短く、前胸のくぼみは狭く縦に長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区（佐藤，1978）、天白区。

【県内の分布】

三河地方の平野部を中心として少なからず見られる。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島。琉球列島産は別亜種である。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾に分布しているが、亜種は異なる。



コカブトムシ

生息地の環境／生態的特性】

照葉樹林を中心として、大きな木を有する林で、樹洞の中に溜まった腐植質の中で幼虫が生育する。

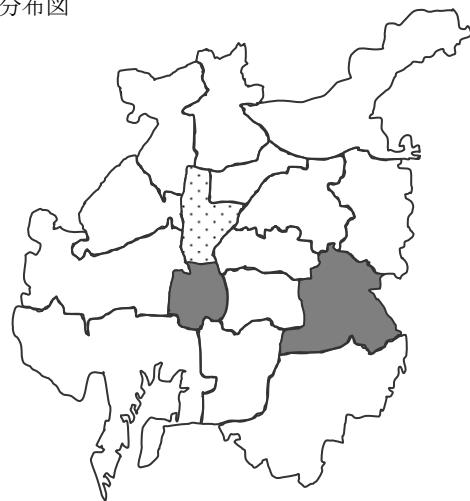
【現在の生息状況／減少の要因】

市街化による照葉樹林の衰退と共に生息できる環境が少なくなった。しかし、辛うじて残された公園、社寺林などに細々と生息している。

【保全上の留意点】

大きな木の保全と、それらの背景となっている照葉樹林の育成を見守ることが必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1978．熱田神宮林の昆虫類．熱田神宮林苑保護委員会調査報告書，pp.93-110．

【関連文献】

高崎保郎，2001．「名古屋北部の蝶類（中野栄三）」と穂積先生．穂積俊文博士記念論文集，pp.358-362．

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．

（執筆者 佐藤正孝、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ホタル科>

ヒメボタル *Luciola parvula* Kiesenwetter**【選定理由】**

自然度の高い林～草地に発生する陸生のホタルで、市内には広く分布し、名古屋城の外堀の発生地は有名である。しかし生息環境の悪化などによって、生息地も個体数も少なくなっている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体は黒色、胸部は淡赤色で前方に大きな黒紋を有する。体長は9mm位。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区、千種区、天白区など。

【県内の分布】

平野部から丘陵地にかけて分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州の海岸近くから山地にかけて分布する。

【世界の分布】

日本固有種。



ヒメボタル

天白区相生山緑地、2001年6月3日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

雑木林とそれに連なる湿度のある林床と草地があることが好条件ではあるが、その変形でも問題はない。名古屋城では石垣と草地の組み合わせで、餌となるオカチョウジガイの生息できる場所が確保されている。

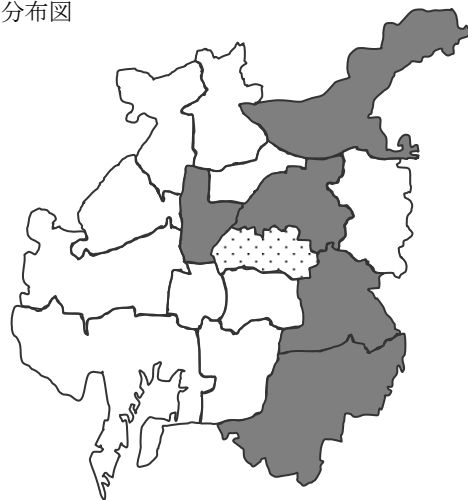
【現在の生息状況／減少の要因】

ほとんどの生息地が失われた中、名古屋城は公園域として生息地は保全されている。天白区は、公園の整備により減少傾向にある。

【保全上の留意点】

雑木林の保全と農薬散布に留意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

- 安藤 尚, 1977. 名古屋市のヒメボタル. 佳香蝶, 29(111):29-31.
 安藤 尚, 1982. 尾張平野のヒメボタル. 佳香蝶, 34(130):34.
 竹内重信, 1985. 名古屋城外堀, ヒメボタル. 86pp. エフエー出版, 名古屋.
 名古屋市環境保全局, 1994. なごやのほたる. 24pp. 名古屋市.

(執筆者 佐藤正孝、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 カッコウムシ科>

ヤマトヒメメダカカッコウムシ *Neohydnius hozumii* Nakane**【選定理由】**

河川敷や沼地、河口部の芦原より得られている。この様な所は河川やため池の改修により整備が進みやすく、本種の生息地も減少していくと思われる。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 5.5mm 内外。頭部は横皺と点刻を密に具える。触角第 9 節はやや幅広く、第 10 節と球悍をつくる。前胸背板は滑らかな正中部を除き、不規則に皺状に点刻され、側瘤の上に斜めの窪みがある。上翅の斑紋には変化があり、前胸の黒いものもある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中川区庄内川 (Nakane, 1981)、守山区。

【県内の分布】

知多市 (穂積, 1990)。

【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

現状では国外からは未知。



ヤマトヒメメダカカッコウムシ
守山区、2009 年 7 月 25 日、戸田尚希 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷や河口部、沼地などの芦原に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川敷や沼地などの芦原は、整備が進み本種の生息には向かなくなりつつある。

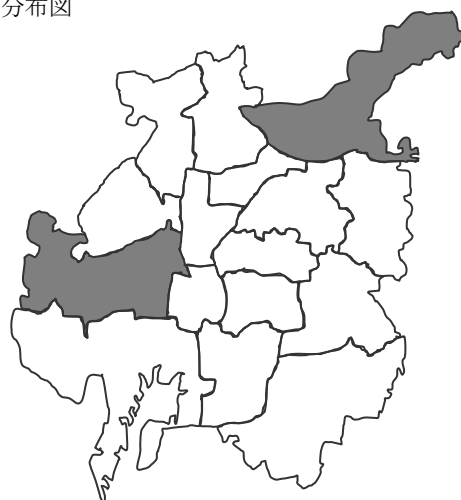
【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

【特記事項】

庄内川等の市内で採れた個体が、新種の記載に使われた。

市内分布図

**【引用文献】**

Nakane, T., 1981. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXXIII. *Fragmenta Coleopterologica*, (29/32):125-130.

穂積俊文, 1990. 愛知県の甲虫類 (II). 愛知県の昆虫 (上), pp.232-308. 愛知県農地林務部自然保護課.

【関連文献】

黒沢良彦ほか, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III), p.154. 保育社, 大阪.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ゴミムシダマシ科>

ヤマトオサムシダマシ *Blaps japonensis* Marseul

カテゴリー

【選定理由】

農家の近代化が進み、家畜も集約され飼育されることから、納屋などで糞束を保管することがなくなり、生息地が減った事により見るができなくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

22.0mm 前後。全体に黒色で細かい点刻に覆われる。触角先端4節は数珠玉状で、赤褐色の短軟毛に覆われる。上翅端部は急に細くなりやや上反する。

【分布の概要】

【市内の分布】

緑区（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

豊橋市、新城市、蒲郡市、岡崎市、春日井市。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国大陸北部。



ヤマトオサムシダマシ

豊橋市北島町、1994年10月31日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

昔ながらの農家の軒下や納屋の、乾燥した糞くずなどの下にいる。

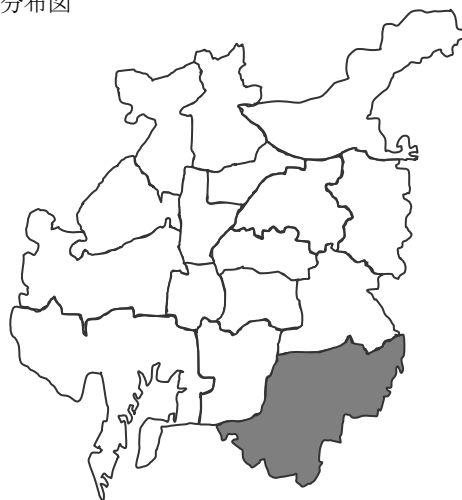
【現在の生息状況／減少の要因】

市内の農家は、そのほとんどが移転や廃業で姿を消し、生息環境自体を見ることは難しくなっている。

【特記事項】

古くからの貿易港の周囲に多いことから、その昔、食料と共に大陸から侵入したとされる。

市内分布図



【引用文献】

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.

【関連文献】

黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之（編），1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅲ. 保育社，大阪.
穂積俊文，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅱ）. 愛知県の昆虫（上），pp.232-308. 愛知県.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 ボクトウガ科>

ハイイロボクトウ *Phragmataecia castaneae* (Hübner)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

幼虫の食草であるヨシの生えている湿地に生息するが、近年全国的にこのような湿地が土地開発等により減少し、生息地が狭められている。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に抽出している。

【形態】

開張 30mm～40mm。前後翅ともやや褐色を帯びた灰色で、脈間に暗灰色鱗を散布する。雌の腹部は長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区塚ノ杵池、天白区荒池、港区南陽町庄内川河口などから記録がある。

【県内の分布】

尾張部・三河部の平地から丘陵にかけての低湿地に、広く産地が点在する。

【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

国外では朝鮮半島からヨーロッパまでのユーラシア、アフリカに広域に分布する。



ハイイロボクトウ

港区当知町草野、2009年7月11日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシ群落のある河口や河川敷、ため池などに限って見られる。年1化で、成虫は名古屋市では5月下旬から7月に出現し、夜間灯火によく飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名東区塚ノ杵池の産地は猪高緑地として整備され、港区南陽町の庄内川河口のヨシ原は現在のところ安定している。しかし市内のヨシ原は、土地開発や埋め立てにより激減して産地が孤立化し、遺伝子交流が困難となっていて、生息環境が悪化している。

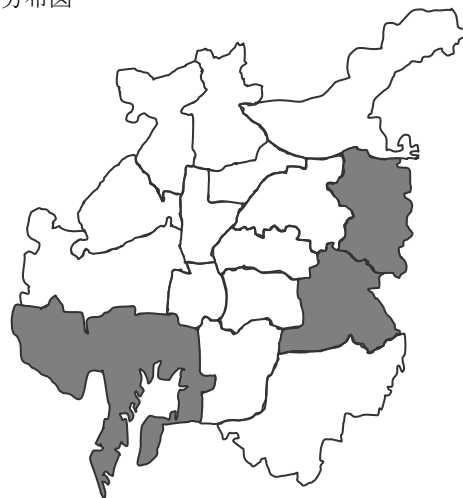
【保全上の留意点】

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。名古屋市内に残るヨシ原は特異な生態系をもち、希少な生物が多く生息している。安易なヨシの刈り取りをしないこと、改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京。
 杉 繁郎 (編)、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京。
 岸田泰則ほか (編)、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社、東京。
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県。
 田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市。
 田中多喜彦、2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶, 63(247):63-67.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シヤクガ科>

クワトゲエダシャク *Apochima excavata* (Dyar)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

クワを主食樹とする本種は、かつては著名なクワの害虫であったが、養蚕業の衰退によるクワ園の激減により全国的に減少している。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に抽出している。

【形態】

開張雄 40～45mm、雌 50～55mm。近縁のオカモトトゲエダシャクに似るが、全体に赤みが弱く、前翅の内横線は中央部で強く外曲し、外横線は中央付近から下縁までの間ゆるやかに内曲する。後翅の外横線はより細い。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区八事、守山区、名東区八前、名東区明德公園などで採集されている。

【県内の分布】

犬山市、豊田市、岡崎市、西尾市、田原市などの記録があるが、近年の記録は少ない。

【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布。1990年以降は福島、群馬、埼玉・、長野・岐阜・愛知の各県から少数の個体が報告されているに過ぎない。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

早春の蛾で、年1回2月下旬～3月に出現する。成虫は静止する時、前翅を頭の方へ後翅を腹部に沿って折りたたみ、独特の姿勢をとる。

【現在の生息状況／減少の要因】

名東区八前では2014年春に灯火に2頭同時に飛来したが、近くの香流川の河川敷に自生のクワの若木が多く、おそらくここで発生していると考えられる。明德公園もクワの若木が多く、幼虫が見出されている。

過去にリンゴやサクラから幼虫が発見されたが、本種の全国的な急減はクワ園の減少と同調しているので、バラ科の樹木を仮に二次的に食べたとしても、主食樹とは考え難い。

【保全上の留意点】

現状では市内にクワ畑は存在しない。荒地や河川敷などに比較的多い、逸出または自生の若木のクワに発生することが多いので、これらを安易に伐採しないことが望まれる。

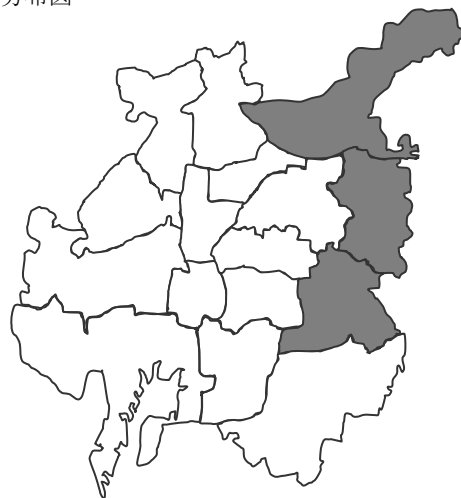
【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 西原かよ子, 2006. クワトゲエダシャクの幼虫と新食草. 誘蛾灯, 184:41-43.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆 田中多喜彦)



市内分布図



昆虫類 <チョウ目 ヤママユガ科>

オナガミズアオ *Actias gnoma gnoma* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

大型で尾錠突起の目立つ美しい蛾であるが、近縁のオオミズアオとよく似ていて、同定に注意が必要である。オオミズアオがいろいろな樹木を食べる広食性であるのに対して、本種はハンノキ属 (*Alunus*) を食べる狭食性であり、平地のハンノキ林が今日減少しているため、やや局地的な分布となっている。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張雄 80mm～90mm、雌 90mm～100mm。近縁のオオミズアオに似るが、やや小型、雄の翅頂はとがり、外横線は直線的で波状に屈曲しない。後翅の横脈紋は大きく円形に近い。年2化で、春型と夏型が出る。夏型はより白っぽく外横線がやや目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区志段味、千種区平和公園、緑区水底下池で採集されている。

【県内の分布】

県下全域に広く分布する。

【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



オナガミズアオ

日進市、2012年5月、田中多喜彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

5月～9月に出現する。平地にも山地にも記録があり、ハンノキ林のある雑木林に生息する。老熟幼虫は樹から降り、落葉の中で繭をつくり蛹で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

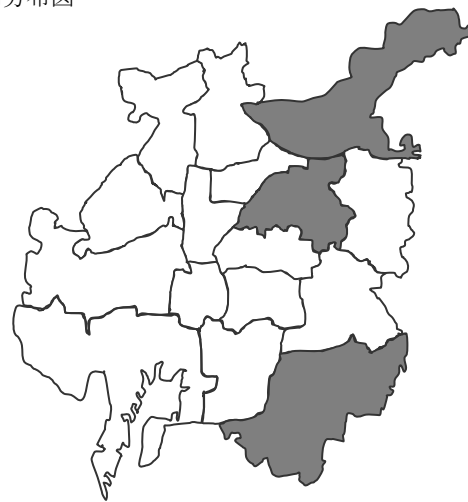
記録された守山区志段味、千種区平和公園南部は里山的景観がわずかに残り、いずれもハンノキ林が近くにある。

本種の減少は、ハンノキ林を含む低湿地が埋め立てや土地開発により減少し、分断されたことによる。

【保全上の留意点】

市東部丘陵にわずかに残るハンノキ林を含む里山的環境は、極力残すこと。過度な伐採や、害虫防除のための薬剤散布を極力避けることが必要である。

市内分布図



【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京.
 杉 繁郎 (編)、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京.
 岸田泰則ほか (編)、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社、東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 イボタガ科>

イボタガ *Brahmaea japonica* Butler**【選定理由】**

大型の日本固有種で、かつては都心部にも生息していたが、近年まったく見られなくなり、郊外でも個体数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 90mm～95mm。前翅頂は丸みを持ち、地色は多少緑色を帯びた黄褐色。前後翅とも黒褐色の波状線を密布する。前翅の内横線と外横線の間は、翅脈に沿い黒褐色の小円紋を連ねる。雌は前翅の丸みがやや強い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区五軒家町(1975)の古い記録のほか、近年守山区東谷山で複数個体が採集された。

【県内の分布】

県下全域に分布は広い。設楽町裏谷など1000m級の奥三河山地でも得られている。

【国内の分布】

北海道から屋久島まで、全国に分布する。

【世界の分布】

現状では日本の固有種である。



イボタガ
守山区東谷山、2014年4月3日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平地にも山地にも記録があるが、近年全国的に都市部では減少傾向にあるという。

成虫は年1回3月下旬から4月に出現する。幼虫の食樹はモクセイ科のイボタ・ネズミモチ・キンモクセイ・ヒイラギ・トネリコなどであり、庭園樹として植栽されるものが多い。

1960年頃に都心部の名古屋城内で、特異な形態の幼虫を見た記憶がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

都市部では雑木林が整備され都市公園化され、イボタやネズミモチが伐採されている。害虫駆除のための薬剤散布等により、本種の継続的な生息が困難な状況になっている。

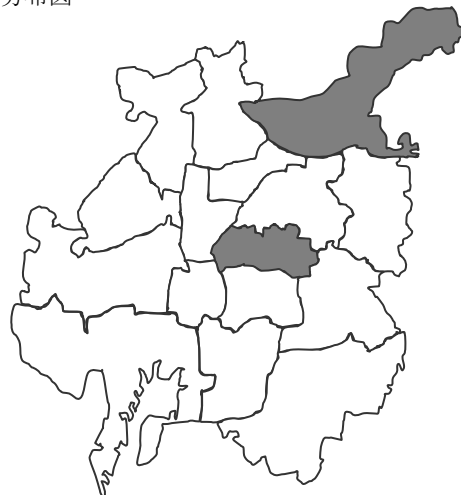
【保全上の留意点】

市内に残存する、イボタが自生するような自然林を極力残すこと、過度な伐採や、害虫防除のための薬剤散布を極力避けることが必要である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市長資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヒトリガ科>

ヤネホソバ *Eilema fuscodorsalis* (Matsumura)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

かつては人家のカヤ葺き屋根などに発生し、幼虫のケムシの毒刺毛で刺されることから人的被害が多かったが、人家の多くが近代建築となり、発生に好適な環境が減少したため各地で激減している。

そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張 22mm～32mm。雌は雄より大型。夏生は小型で翅は橙黄色～淡黄色。春生と秋に出現する個体はやや大きく、前縁部を除く前翅と後翅の前半は灰色を帯びる。前翅の外縁は同属他種より多少丸味をもつ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区の庄内川河口で 2009 年に記録された。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、旧美和町篠田、豊田市青木町、西尾市米津町などで記録がある。

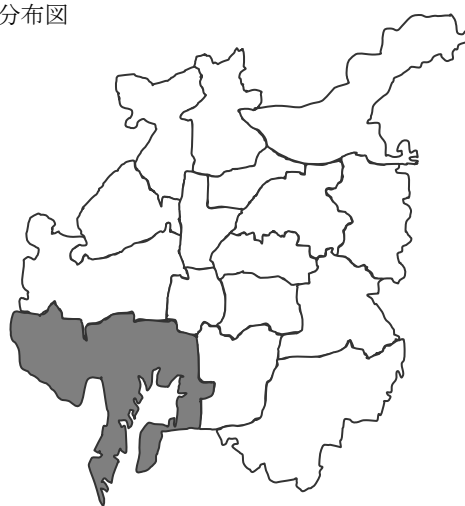
【国内の分布】

東北地方南部以南の本州、四国、九州と奄美大島、西表島。

【世界の分布】

中国。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

幼虫はケムシで体色は地表によく似る。カヤやワラ葺きの屋根、板屋根、屋根瓦、板塀などに生えたコケや地衣類を食べ、大発生すると糸をたらし人家内に垂下してくる。幼虫の刺毛により皮膚炎を起こす。

幼虫は「ヤネムシ」、「イタヤムシ」、「白皓坊（ジコウボウ）」などと呼ぶ地方がある。本来天然材の屋根によく発生したが、近年は壁や樋の隙間、ベランダ等のコケに発生する例がある。

成虫はふつう年3化、4月下旬～5月中旬、7月、8月下旬～9月中旬に出現する。

【現在の生息状況／減少の要因】

元来平地や里山の人家付近に生息していた種であり、生活様式の近代化に伴って、屋根や板塀などのコケや地衣類の生じる場所が減少したため、生息環境を奪われ、減少している。

【保全上の留意点】

本種は環境省選定の準絶滅危惧種であるが、人家に多発すると人に危害を与える衛生害虫でもあるので、害虫駆除と種の保存という背反する課題を持っている。人家以外にも石垣や古木の樹幹のコケ類からも幼虫が発見されるので、このような環境はできるだけ保全するよう努めるしかない。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.
 田中多喜彦, 2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶, 63(247):63-67.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

キシタアツバ *Hypena claripennis* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平地から低山地の里山的な環境に生息する蛾で、幼虫はイラクサ科のヤブマオを食べる。元来それほど発生量が多い蛾ではないが、近年このような人里的環境が減少し、本種も見られなくなった。

そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張 30mm 内外。前翅は基部から外横線まで黄褐色を帯び、前縁部と外半部は紫灰色を帯びる。後翅は淡黄色、外縁の暗色部は細く近似種に比べ発達しない。

【分布の概要】

【市内の分布】

瑞穂区雁道、昭和区檀溪通の古い記録があり、近年守山区東谷山、名東区明德公園でも発見された。

【県内の分布】

県下の平地～低山地に記録されている。

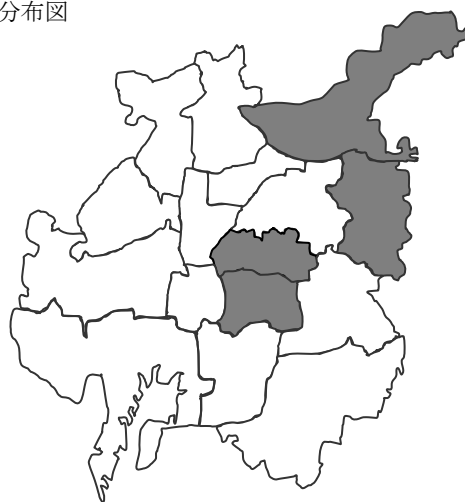
【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種は森林環境には見出されず、むしろ人里的な明るい環境を好むが、全国的に産出は局地的である。成虫は4月～9月に出現する。

幼虫はイラクサ科のヤブマオなど *Boehmeria* 属を食べ、前蛹で越冬することが知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

過去に記録された瑞穂区や昭和区の産地は都市開発が著しく、ヤブマオなどイラクサの仲間は既になく、本種の発生は見られない。東谷山と明德公園の記録は2010年代のものであり、現認可能な発生地と思われる。

都市部のイラクサは、以前は堤防や未整備の空き地に自生していたが、機械による除草が徹底し都市部ではほとんど見られなくなった。ヤブマオの生える明るい雑木林も都市部では激減している。キシタアツバとほぼ同じ食草で発生するアカタテハ(蝶)が、市街地で減少していることと同様に、キシタアツバも都市周辺では生息条件が悪化している。

【保全上の留意点】

残存する里山的環境における雑木林の保全が第一と考えられる。保全する緑地では、林内の衛生・森林害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限に、かつ広い面積の薬剤散布は極力避ける。また下草刈りや剪定を必要以上に行わないようにしたい。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 著・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

フシキキシタバ *Catocala separans* Leech

カテゴリー

【選定理由】

本種はコナラやアベマキを主要な構成樹種とする、低地や丘陵の雑木林に局地的に生息するが、都市近郊では開発により雑木林が失われたり、小規模化、孤立化したりして生息条件が悪化している。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 50～60mm。前翅の色彩斑紋は個体差があり、黒味の強い個体もかなり白化した個体もある。基部は広く黒色を帯び、内横線は著しく太く明瞭、その外方はとくに前半で白味を帯びる。中央部は紫灰色を帯び外縁は黒褐色である。後翅の地色は濃く、他種よりいくぶん橙色を帯びて見える。後翅の中央の黒帯と外縁黒帯はつながらず、翅頂に黄斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区明徳公園、緑区水広下池で記録され、2013年には名東区八前でも記録された。

【県内の分布】

蒲郡市柏原のほか豊田市各所（大内町、松嶺町、芳友町、古瀬間町等）で記録された。近年日進市でもかなり多くの個体が採集されている。

【国内の分布】

本州、四国、対馬。

【世界の分布】

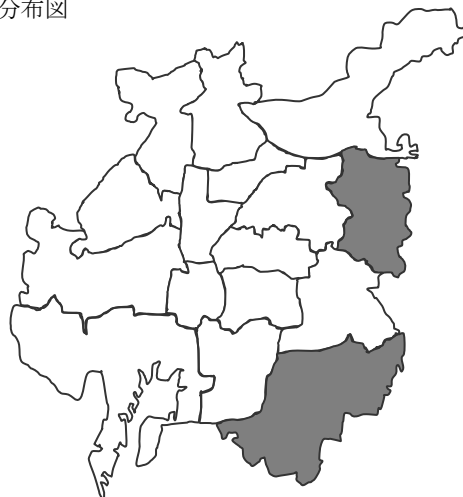
朝鮮、中国、ロシア南東部。

【生息地の環境／生態的特性】

コナラやアベマキの多い雑木林に生息する。名古屋市内では、丘陵緑地の雑木林に、カタカラ類としてコシロシタバ・マメキシタバ・アサマキシタバ・オニベニシタバなどが見られたが、2009年にはじめて本種が市内2箇所で記録された。

食樹はクヌギが知られ、年1化で6月から8月にかけて見られ、コナラやアベマキの樹液に集まる。当地では自然植生としてのクヌギはなく、近縁のアベマキが主食樹であろう。

市内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

近年、市内の平和公園や猪高緑地などの大規模緑地で、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの伝播が早く、樹液を豊富に出すようなコナラやアベマキの大径木が、次々に枯死している。本種などの平地産カタカラ類の生息条件が悪化し、憂慮される事態となっている。

【保全上の留意点】

現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市公園としての緑地の場合、往々にして過剰な整備、例えば自然林を伐採し園芸樹種を植えたり、過度の下枝刈りや除草などによる森林環境の単調化が、生物相に大きな影響を与えている例が多い。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中 蕃・間野隆裕・蟹江 昇ほか, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書 (昆虫編抜粋). 豊田市.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

コシロシタバ *Catocala actaea* Felder et Rogenhofer

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種はクヌギやアベマキを混ざる暖温帯落葉広葉樹林の代表的な蛾であるが、開発により多くの雑木林が消滅し、都市周辺では減少の一途をたどっている。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張50～60mm。前翅は一様に暗色化し、斑紋は明瞭でないが、亜腎状紋は白く明瞭。後翅は黒く大きな白斑があり、縁毛は白い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区平和公園、千種区新池町などの他、近年名東区明徳公園、名東区猪高緑地、名東区塚ノ杵池、天白区相生山緑地、守山区東谷山に記録がある。

【県内の分布】

瀬戸市、豊田市、岡崎市、旧宝飯郡一ノ宮町など低地・丘陵地の二次林に記録が多い。

【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

朝鮮、中国、ロシア南東部。



コシロシタバ

守山区東谷山、2014年8月28日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

クヌギやアベマキを混ざる暖温帯二次林の指標種となる蛾で、7～9月に出現する。発生地では多くの個体が昼間はアベマキなどの樹幹に静止していて、近づくと逃げるが、すぐ近くの樹幹に止まる。幼虫は樹皮に擬態する。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては尾張丘陵の各所に雑木林が多くあり、コシロシタバの生息に好適な条件があったと思われるが、今日都市部では市街地に島のように残された緑地に、ようやく命脈を保っている。

【保全上の留意点】

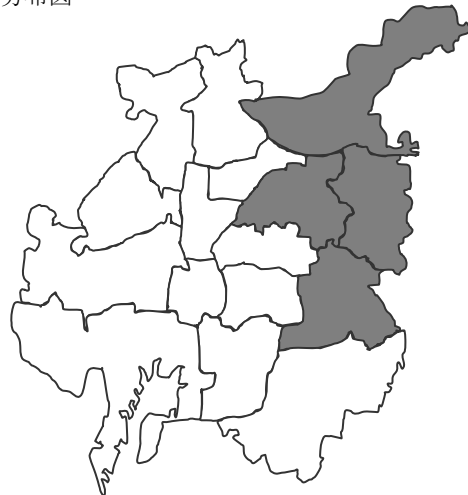
現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市公園としての緑地の場合、往々にして過剰な整備、例えば自然林を伐採し園芸樹種を植えたり、過度の下枝刈りや除草などによる森林環境の単調化が、生物相に大きな影響を与えている例が多い。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京。
 杉 繁郎（編）、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京。
 岸田泰則ほか（編）、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社、東京。
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下）、pp.96-416. 愛知県。
 田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市。

（執筆者 田中多喜彦）

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

マダラウスズミケンモン *Hylonycta subornata* (Leech)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

産出は非常に局地的で個体数も少ない、いわゆる希少種である。いままでに確認された記録から見ると、クヌギやアベマキを食樹とする低地～丘陵地の暖温帯二次林の蛾と思われる。このような環境は全国的に開発により減少し、生息条件が悪化している。

【形態】

開張 41～46mm。前翅地色は暗灰褐色、環状紋は大きく、黒環を有し内部に暗色の核がある。前翅全体に白色鱗片を混ざる。後翅は灰黄色、暗色の横線のほか外縁部に暗色部を有する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

2010 年以降に天白区八事裏山、千種区平和公園、名東区明德公園から記録された。

【県内の分布】

1970 年の小原村永太郎（現豊田市）の記録があるのみである。

【国内の分布】

本州（栃木県から兵庫県まで）と九州（宮崎県）に記録があるが、産地は少なくまれ。

【世界の分布】

朝鮮半島。

**【生息地の環境／生態的特性】**

低地～丘陵地のクヌギやアベマキのある雑木林に生息する。千種区平和公園でアベマキから幼虫が確認されている。年 2 化で成虫は 4～5 月と 8～9 月に出現する。秋 10 月に見られる幼虫は蛹で越冬し、春に羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内で記録された 3 地点は、現状では公園緑地区画内にあり、環境は保全されている。しかし本種は、平地・丘陵地の二次林の蛾であり、かつては連続的に生息していたものが、開発により分断され、遺伝子交流も困難になっていて、生存基盤は脆弱である。

【保全上の留意点】

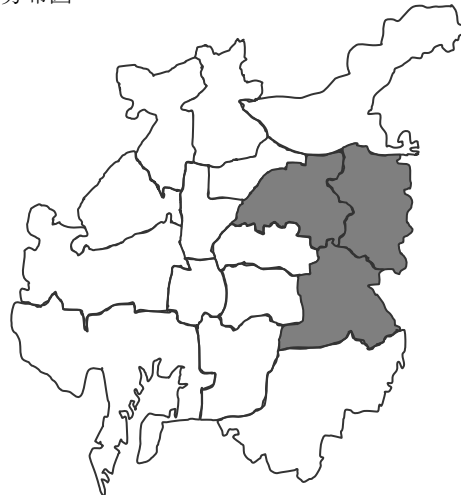
緑地の雑木林の適切な管理・保全が必要である。過剰な整備、例えば園芸樹種に替えたり、過度の下枝刈りや落葉除去等をしない。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2011. 名古屋市東部の丘陵 2 箇所 で 9 月に採集されたマダラウスズミケンモン. 佳香蝶, 64(249):11.

(執筆者 田中多喜彦)

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ウスミモンキリガ *Eupsilia contracta* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

ハンノキ林に固有の種で、比較的産地は局限される。近年里山のハンノキ林が開発等で減少しているため、特に関東地方でレッドリストに抽出する県が多い。環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張40～45mm。前翅はやや細長く、地色は褐色～黄褐色。内横線と外横線は淡色で明瞭、環・腎状紋も淡色で縁取られる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区平和公園のハンノキ林から記録され、同地で2013年にも発生を確認している。

【県内の分布】

犬山市、豊田市から記録され、近年日進市の天白川上流部に豊産することが知られた。

【国内の分布】

全国に分布するが局地的。

【世界の分布】

朝鮮半島とロシア南東部。



ウスミモンキリガ

千種区平和公園、2013年2月14日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

食樹のハンノキは、池畔や湿地などに自生し、狭食性であるため、本種を確認するためにはハンノキ林を探索する必要がある。

近距離なら灯火に飛来するが、一般に灯火採集では得がたく、糖蜜採集で得られる。

年1化で10月に羽化、越冬し4月まで見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ハンノキの群生する湿地は、都市部では多くが土地造成で埋め立てられ激減している。名古屋市内では、緑地として保全された場所に、本種はようやく命脈を保っている状況である。

【保全上の留意点】

現存するため池の池畔や湿地などに自生する、ハンノキ林の保全が必要である。ハンノキ林は他にもオナガミズアオやミドリシジミなどのよく知られた昆虫が発生し、固有の生態系をもっているため、そのまま生態的な生きた博物館として、一定区画を残せば理想的である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京.

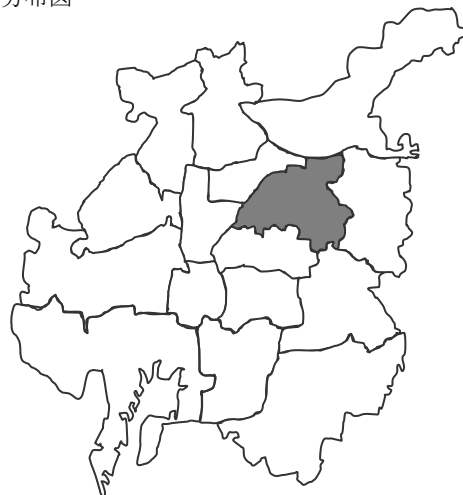
杉 繁郎 (編)、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京.

岸田泰則ほか (編)、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社、東京.

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ミスジキリガ *Jodia sericea* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

コナラやアベマキを主要な構成樹種とし、カシ類を交える低地や丘陵の雑木林に生息するが、都市近郊では開発により雑木林が失われたり、小規模化、孤立化したりして生息条件が悪化している

【形態】

開張 32～35mm。前翅は明るい橙赤色、3本の横線は褐色でやや不明瞭。環・腎状紋は淡色で縁取られるが不明瞭。後翅は白色で僅かに橙赤色を帯びる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区平和公園（南部）で、2001年12月14日に1雄が記録されている（福住和也）。

【県内の分布】

犬山市富士、小原村永太郎（現豊田市）、豊田市猿投山、同六所山から記録されている。

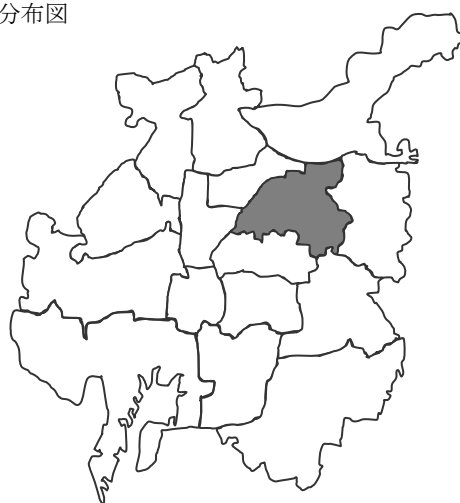
【国内の分布】

全国に分布するが、産出はやや局所的。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平地～低山地の二次林の蛾で、幼虫はクヌギ、アラカシ、カシワから得られている。

成虫は一般に灯火採集では得がたく、糖蜜採集で得られる。年1化で10～11月に羽化、越冬し4月まで見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は元来、産出量が少なく、産地も比較的限定されている種である。都市部の雑木林は、開発により分断・縮小され生存条件は悪化している。近年市内では平和公園や猪高緑地などの大規模緑地で、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの伝播が早く、本種等アベマキやコナラなどのコナラ属 *Quercus* に依存すると思われる種の生息条件が悪化し、憂慮される事態となっている。

環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【保全上の留意点】

現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市部の緑地公園では自然林を伐採し園芸樹種を植えたりしないこと。また、過度の下枝刈りや除草、害虫駆除目的の薬剤散布等には十分な配慮が必要である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.

杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.

岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

アトジロキリガ *Dioszeghyana mirabilis* (Sugi)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

愛知県では都市近郊の丘陵の、カシ類をまじえた二次林から記録されているが、このような環境は公園としての整備や土地開発のための改変を受け易く、生息条件が安定していない。

【形態】

開張 30～33mm。前翅は淡い茶褐色ないし紫灰色、暗色鱗を密布する。腎状紋は常に暗色に染められる。後翅はほとんど白色で、外縁部が少し淡褐色を帯びる。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山に記録がある。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、春日井市等の愛岐丘陵に記録があり、産地は局限される。

【国内の分布】

北海道、東北、関東から東海地方までと九州の鹿児島県に記録があるが局地的でまれ。

【世界の分布】

朝鮮、ロシア南東部。



アトジロキリガ

守山区東谷山、2003年4月13日、福住和也 採集

【生息地の環境／生態的特性】

名古屋市内で唯一の産地東谷山は、シイ、カシ類の古木の茂る照葉樹林を残し、コナラ、アベマキなどの生育する二次林が混交する、市内では特別に樹相の豊かなところである。

岐阜県では岐阜市金華山で発見され、近年高山市野麦峠や飛騨市宮川町などの山間地で記録されている。年1回春4月中・下旬に出現し、幼虫はカシ、サクラで飼育が可能である。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県下では東谷山、定光寺、古虎溪（岐阜県）などの観光地を含む愛知・岐阜県境の愛岐丘陵に限って分布しているが個体数は少ない。分布が局限される要因が定かでなく、分析が困難である。

【保全上の留意点】

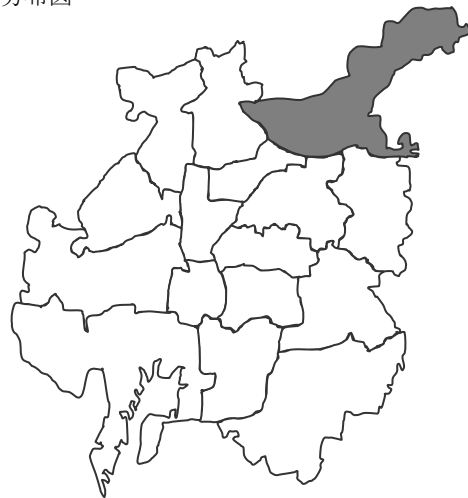
東谷山の27.7haほどが、2010年4月1日に愛知県の自然環境保全地域に指定され開発が制限された。しかしこの周辺の二次林の調査は不十分であり、広い範囲で生態系を温存したい。ナラ枯れ対策等で農薬を使うときには生態系への十分な配慮が必要である。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 岡田正哉, 1966. アトジロキリガの幼虫. 蛾類通信, 41:371-372.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 アゲハチョウ科>

ジャコウアゲハ *Atrophaneura alcinous alcinous* (Klug)

カテゴリー

【選定理由】

黒色のアゲハの中では飛翔が最も緩慢で、食草のウマノスズクサのある路傍や草地をゆるやかに飛ぶ。食草の自生する土手や堤防では、機械による草刈りがあまり頻繁に行われると、ウマノスズクサを絶滅状態にしてしまう懸念がある。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張は春型 80mm 内外、夏型 90～110mm。尾状突起が長く、雄の翅の地色は絹糸状の光沢のある黒色で、後翅の垂外縁に弦月状の赤色斑が特に裏面に顕著に現れる。雌の翅の地色は黄灰色で、後翅垂外縁の黒色部に弦月状の黄色斑が表裏とも明瞭に現れる。体の側面にも赤～黄色毛がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内のほぼ全域で記録されているが、守山区の矢田川堤防と中区名古屋城の堀を除いて、安定した生息地は見られない。

【県内の分布】

県内全域に分布しているが、食草の分布が限られるので、比較的局地的な分布を示す。

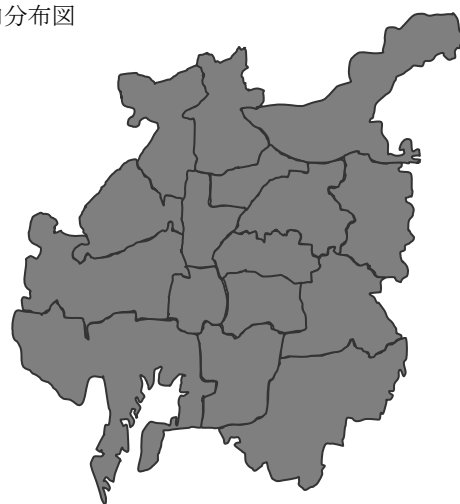
【国内の分布】

秋田県、岩手県以南の本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

4月下旬から年3～4回発生する。食草の近くの草地や林縁、竹林の周囲などを、あまり羽ばたかずゆっくりと飛翔し、ツツジ類、アザミ類などの花で吸蜜する。幼虫は名古屋市内では草地に生えるウマノスズクサ、猿投山などの山間部では樹林下に生えるオオバウマノスズクサを食草とする。成虫はかなり放浪性があり、食草のない市街地に姿をみせることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

土手や堤防、鉄道線路沿いなど、ウマノスズクサの生育地が比較的限られており、それに合わせて本種も集中的に生息している。堤防に繁茂するものは、草刈り機で刈られてしまい時期が悪いと絶滅状態になってしまう。また、多数発生すると多くの幼虫が食草を茎まで食い尽くし、自ら一時的な絶滅状態に陥ることもある。近年守山区の矢田川堤防のウマノスズクサ群落の一部に、放蝶と思われる移入種ホソオチョウが局地的に多発し、食草が同じなので競合している場合がある。

【保全上の留意点】

本種の維持存続のためにウマノスズクサを刈り取らないことが必要である。名古屋城の堀の石垣にはウマノスズクサが多く、刈り取らないので比較的安定した発生を繰り返している。市内でビオトープなどで、フェンスに食草を植栽すれば、侵入した個体によって発生する可能性が高い。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.3,p.12. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シロチョウ科>

ツマグロキチョウ *Eurema laeta betheseba* (Janson)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	絶滅危惧IB類

【選定理由】

河川敷などに生えるカワラケツメイを食草とする極めて狭食性のチョウで、全国的に減少していて、現在 30 近くの県が本種をレッドリストに抽出している。名古屋市とその周辺では、近年カワラケツメイにごく近縁のアレチケツメイが、帰化植物として造成地に侵入し、その群落到本種の発生が多く見られるので、全国レベルほど逼迫していない。しかしアレチケツメイも高茎雑草やクズの被覆には弱く、本種の安定した発生環境には程遠いと考えられる。

【形態】

開張は夏型 34～36mm、秋型 37～40mm。夏型は小型。雄の地色は黄色、雌は全体に黒色鱗粉があらく散布され淡い灰黄色。秋型は雄雌で大差なく、翅頂はとがり、後翅に褐色条がある。前翅端は常に黒色を呈する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、名東区、熱田区、天白区、緑区、守山区などに記録がある。

【県内の分布】

県下全域に分布は広い。

【国内の分布】

本州（福島県以南）、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国から西はインドまで、南はオーストラリアにかけて分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

千種区平和公園では、1970 年頃ススキ原の路傍に生えるカワラケツメイに発生していた。今世紀に入り、守山区や名東区の宅地造成地に帰化植物のアレチケツメイが群生するようになり、これに本種が多発したことがある。

年数回の発生、6 月以降夏季に発生する個体（夏型）は雄雌とも食草群落の近くを離れないが、9 月中旬以降の秋型はかなり移動性があり、市街地でも飛翔を見る。成虫越冬した雌は春に食草の芽生えに産卵する。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区や名東区の宅地開発に伴うアレチケツメイの群落は、過去 10 年の間に他の高茎雑草に被覆され減少した。ツマグロキチョウの発生も減少してきている。本種の存続には食草群落の維持が必須条件であり、群落の移動と共に、常に彷徨する運命にある蝶である。

【保全上の留意点】

アレチケツメイやカワラケツメイは、今後も造成地や河川の堤防、河川敷等に残存して行くであろう。河川敷等の一定区画を、ビオトープとして河原の自然状態を温存することも考えられる。

堤防のコンクリート化、除草機による徹底した除草、広範囲の農薬散布は本種の生存を脅かす。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫（下），pp.21-95. 愛知県.
須賀瑛文ほか、2007. 帰化植物アレチケツメイ (*Chamaecrista nictitans*) の新たな分布地. 岐阜県植物研究会誌, 23:89-91.
山田芳郎、2008. チョウ目（チョウ類）. 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

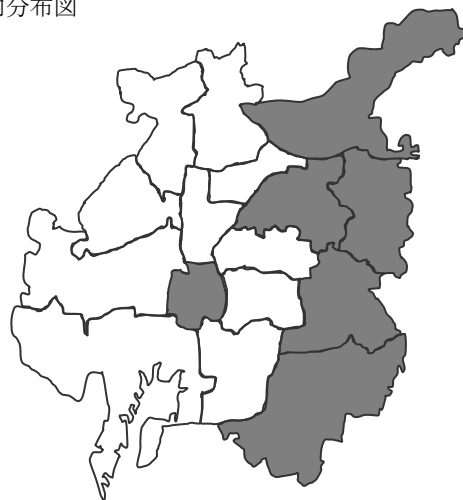
【関連文献】

川副昭人・若林守男、1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.14,p.45. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか、1982. 原色日本蝶類生態図鑑（I）. 保育社, 大阪.
白水 隆、2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.



ツマグロキチョウ（左夏型雄、右秋型雄）
名古屋市、田中多喜彦 採集

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 シジミチョウ科>

ウラゴマダラシジミ *Artopoetes pryeri pryeri* (Murray)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市内では守山区の雑木林に局所的に生息する。発生地は主に落葉広葉樹林内の低木層や林縁部である。これらの環境は森林の放置によって林内の中・低木密度が上がり、日照量が低下し生息環境が悪化している。また、開発により雑木林が減少している。

【形態】

開張 36～46mm。雌はやや大型で丸味をおびる。翅の裏面の斑紋は雄雌ほとんど同じで、白色地に亜外縁部に黒点列がある。翅の表面は、外縁に幅広く黒帯があり、内側は青紫色。雌は青色部外側の白色部が増大する傾向がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内では 1978 年に守山区で記録されたが、守山区の各所で 2000 年以降もかなり採集されている。市東部丘陵地にはまだ生息地が存在する可能性がある。

【県内の分布】

犬山市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地まで広く分布している。

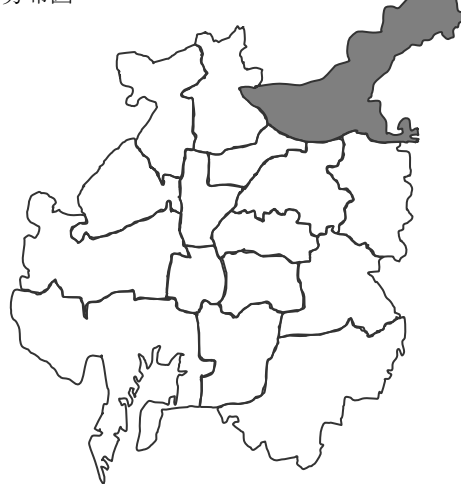
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。九州では山地性となる。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主な生息地は雑木林内の低木層や林縁で、食樹イボタノキの豊富な場所である。溪畔林、湿地内の低木層等に発生することが多い。年 1 回、5 月中・下旬から羽化が始まり 6 月中みられる。ミドリシジミ亜族としては訪花性が強く、イボタノキ、クリなどの花で吸蜜する。雄は午後 1 時ごろから飛び始め、夕方には活発に飛翔し、移動距離は広汎に及ぶ。雌はあまり活発ではないが日中食樹の周辺をゆるやかに飛翔し、イボタノキに産卵する。1 回の産卵数は 4～10 個のことが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区のみで確認されており、局所的であるが、個体数は少なくなかった。隣接する尾張旭市森林公園や瀬戸市の個体群との遺伝子交流もあると思われる。しかし、守山区は現在、宅地造成、道路建設が各所で行われていて雑木林が分断され、公園緑地化のための過剰管理、小規模な雑木林の放任による鬱閉など、生息環境が悪化しているため、生息数が減少している。

【保全上の留意点】

産地の一つ守山区東谷山は、2010 年に愛知県の自然環境保全地域に指定され、環境が保全されているが、守山区の中・西部に点在する雑木林の産地も、可能な限り環境を保全したい。防犯等のための下枝刈りや低木の除去、害虫防除のための広域農薬散布などには配慮が必要である。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.21, p.76. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅲ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ヒオドシチョウ *Nymphalis xanthomelas japonica* (Stichel)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

1970年代には市西部を含め市内各地で記録されているが、今日では東谷山や猪高緑地など、市東部丘陵の数箇所を除いて見ることができない。全国的に大都市周辺での減少傾向が指摘されている。

【形態】

開張66～76mm。雌はやや大型。翅の表面は橙赤色で、外縁に青色の縁取りがある。翅の裏面は基半部が黒褐色で、その外側は茶褐色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、名東区、熱田区、中村区、中川区、東区、昭和区、瑞穂区、天白区、緑区、守山区などに記録がある。

【県内の分布】

平野部から山地まで県下全域に分布は広い。

【国内の分布】

全国。低地から高山帯まで生息域は広い。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾（高地）、中国からヒマラヤを経てヨーロッパ南東部まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

食樹のエノキのある雑木林の林縁に生活する。年1回5月下旬から6月上旬に羽化。しばらく周辺で活動するが、夏季には姿を消す。翌春まで休眠するものとみられる。

休眠前は敏速に飛翔し、アベマキやヤナギ等の樹液を好み、腐果や獣糞にも集まる。時にクリやネズミモチの花で吸蜜する。越冬後はサクラ類、タンポポ類等で吸蜜する。

幼虫は群棲し、エノキの若木を丸裸にすることがある。ヤナギ類にもつく。

【現在の生息状況／減少の要因】

都市部では、エノキの生える雑木林が減少していることが直接の原因であり、成虫の好む樹液や腐果などの食餌の減少等、好適な生息環境が失われたことも要因であろう。

エノキにつく幼虫群集は、毛虫の群れとして嫌われ、薬剤で駆除されることが多く、都市部での減少に拍車をかけていると思われる。

【保全上の留意点】

現存する緑地公園には現在でも発生地があるので、極力生息環境を維持することが望ましい。河畔林内のエノキ、ヤナギ類も利用されるので、河川敷の改修にも配慮が必要である。緑地における衛生・森林害虫駆除のための農薬散布にはとくに配慮が必要である。

【引用文献】

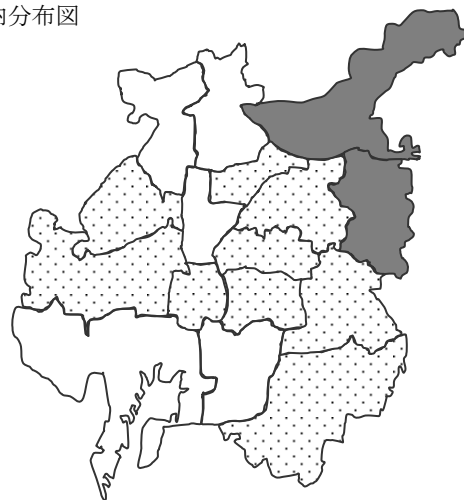
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫（下），pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎、2008. チョウ目（チョウ類）. 新修名古屋史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男、1976. 原色日本蝶類図鑑，pl.52,p.241. 保育社，大阪.
福田晴夫ほか、1983. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）. 保育社，大阪.
白水 隆、2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社，東京.



市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ジャノメチョウ *Minois dryas bipunctata* (Motschulsky)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

ススキ草原を標徴するチョウで、戦前の名古屋市内では、鉄道の線路脇の草地などにも生息し、1970年代までは、市東部丘陵の草原に見られた。今日では開発により草原が激減し、千種区東山公園周辺と守山区東谷山周辺に生息が現認できるに過ぎない。

全国的に、特に都市周辺では減少し、東京都では絶滅としている。

【形態】

開張56～66mm。雌は大型。雄は翅の地色が黒褐色で眼状紋は小型、雌は黄褐色で雄より淡色、眼状紋も大型でよく目立つ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

北区(1937年)、昭和区、千種区、天白区、守山区などに記録がある。

【県内の分布】

尾張平野部、知多半島から三河山間部まで分布は広いが、平野部で減少傾向が著しい。

【国内の分布】

全国。草原に限られ局地的。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地の河川敷や堤防の草原、山間地の田畑周辺の草原に多く生息する。年1回7～8月頃出現し、草上をゆるやかに飛翔し、アザミ類、ヒメジョオン等の花で吸蜜する。母蝶は食草に産卵せず、地上に放卵する。幼虫はススキ、ノガリヤス等のイネ科、ショウジョウスゲ等のカヤツリグサ科を食草としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

東山公園周辺では、ようやく目撃できる程度に減少した。東谷山南麓では愛知用水の土手が発生源となっていて、発生は比較的安定している。減少の要因は、市内での草地環境の減少・分断に伴う、生息条件の悪化である。

【保全上の留意点】

本種のような草原性の昆虫は、近年全国的に減少傾向が指摘されている。種の保全には、ススキ草原のような日本の旧来型の草地を、適地に大切に育成し維持することが必要である。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目(チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

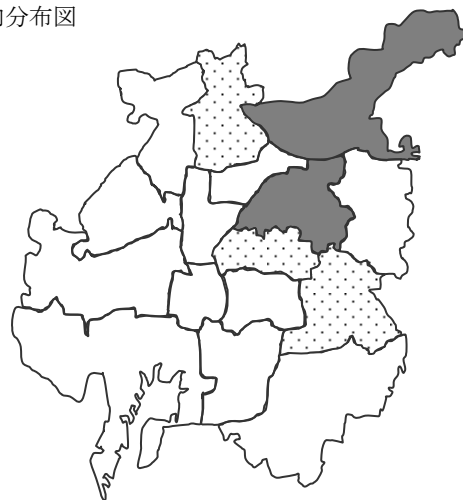
川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.61, p.279. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(IV). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.



ジャノメチョウ

田中多喜彦 撮影

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 エゾトンボ科>

ハネビロエゾトンボ *Somatochlora clavata* Oguma**【選定理由】**

1980年代守山区での1成虫採集例が公にされた記録である。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

成虫の体長61mm内外。金属緑色の中型種。エゾトンボに似るが雄は副性器、尾部付属器、雌は腹部の黄斑を欠くこと、産卵弁の形状等で区別できる。

幼虫は肢が長く環状斑が目立つ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

成虫は1983年守山区上志段味東谷山南麓で1雄が採集されただけである。同所で過去に複数の幼虫採集記録がある。

【県内の分布】

主に尾張東部丘陵の他東三河にも分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に点在的に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は丘陵林内の清冽な細流や湿地脇の流れに生息する。水中に落葉が留まったやや流れが緩い部分を好む。盛夏干上がるような小流でも雨水により流れが回復すると直後に複数の若令幼虫が見られ耐乾燥性に富むように見受けられる。未熟雄は林内の空間や路上を飛翔するが、エゾトンボも同所的に見られるので採集確認の要がある。成熟雄は林内細流上を採雌飛翔する。

幼虫の大きさは同時に4段階程見られ、幼虫期間は3～4年と考えられる。成虫の出現期は7～9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の分布も局所的で個体数も多くない。隣接する丘陵地の長久手市では安定した3ヶ所の生息地がある。市内で唯一1成虫が記録された東谷山南麓では、一時流れで複数の幼虫が認められたこともあり生息していたことは確かであるが、現在では本種の生息ははっきりしない。精査の続行を要する。

【保全上の留意点】

市内では本種の現存は不明であるが、一般的には幼虫の生息に適する緩やかな細流を擁する適度に鬱閉されない二次林の保全である。

【特記事項】

エゾトンボ科（狭義）の幼虫では唯一流れに生息する。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.

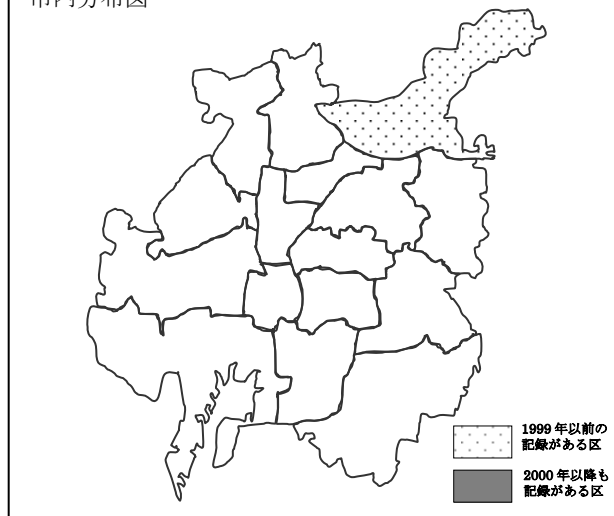
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.



ハネビロエゾトンボ 雄

愛知県長久手市一ノ井、1991年9月23日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <バッタ目 ツユムシ科>

ホソクビツユムシ *Shirakisotima japonica* (Matsumura et Shiraki)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は、山地性の種で、一般に標高 1,000m 以上の山地帯に生息し、7月下旬以降に羽化する。今回の調査で、標高 70m の丘陵地で 6 月上旬に終令幼虫が発見された。本種としては、過去に記録されていない分布域と発生期の特異な個体群と考えられる。

【形態】

翅端までの体長は、雄雌共に 19mm～26mm である。体色は緑色で、前胸背や脚部は茶褐色である。前胸背の茶褐色部が、中央部で細くなっていることが和名の由来であると思われる。また、長い黒褐色の触角の所々に、黄白色部が規則的に見られることも本種の特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

現在の記録は守山区東谷山南側の湿地内だけで、他地域からは未記録である。

【県内の分布】

名古屋市以外では、豊田市稲武町から長野県県境の標高 1,000m 付近に広く分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州、佐渡島、屋久島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の生息地は、東谷山の湿地で、常に湧水があり湿地の半分以上が水に覆われた状態である。本種の幼虫は、湿地内の灌木上に生息している。一般に本種は、山地帯の樹林のマント群落や周辺の草原に生息しており、湿地との関係はないと思われる。東谷山周辺には、本種を含めて県内山間部に分布する種が残存していることがある。この事実は、過去の広い分布域が人間によって分断された事を示していると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市猿投山からも、少数の記録はあるが詳細な生息環境は不詳である。現状では、東谷山が最も標高が低く早い出現期の産地である。また、狭小で孤立した産地であるため、個体数も少ないと思われる。

【保全上の留意点】

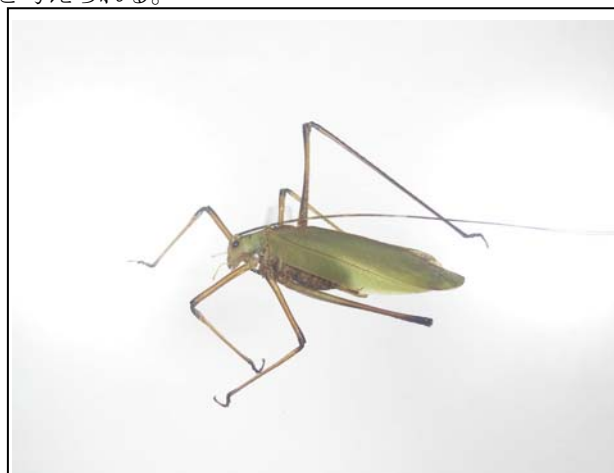
狭小で孤立した産地であるため、現在の環境を変更することなく、かつ、周囲の環境の保全にも努め、個体数の減少がないよう保護するべきである。

【特記事項】

今回の調査では確認できなかったが、山地帯では年一化とされているものの、このような低標高地では年二化の可能性も考えられる。

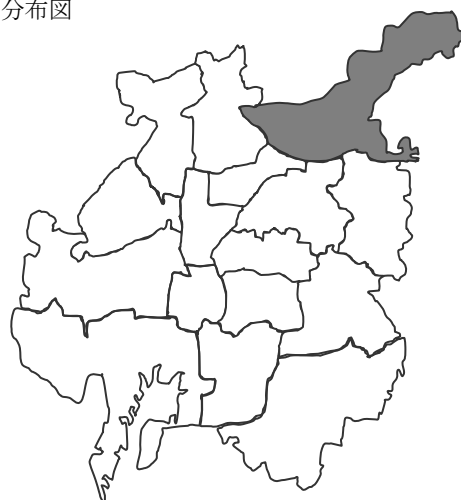
【関連文献】

日本直翅学会（編）、2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.139,p.446-447. 北海道大学出版会, 北海道.



ホソクビツユムシ
守山区東谷山、水野利彦 撮影

市内分布図



(執筆者 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 アリツカコオロギ科>

アリツカコオロギの一種 *Myrmecophilus* sp.**【選定理由】**

アリ類の巣に寄宿する特異な習性の種類。最近市内に生息することが確認されたが、これ以外の記録は無く、さらに調査が必要である。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。体は球形状。褐色。後脚と尾毛は体に比べ目だって大きい。

体長（腹端まで）は2～3mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区（名古屋城）で確認された。

【県内の分布】

記録された生息地は少ない。犬山市、瀬戸市、豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国などに。

【世界の分布】

不明。



アリツカコオロギの一種

豊田市宮前町、1997年2月13日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

ムネアカオオアリやヤマアリ類などの巣の中に棲む。寄宿するアリの群れと一緒に居ることもあるし、アリと離れた凹所などに1頭だけ居ることもある。アリの体を舐めることがあるというが、互いの関係はまだよく解っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城内の調査時に、樹林の林床の朽ち木下のアリの巣内に、1頭ずつ2回目撃できたのみである。

【保全上の留意点】

寄宿先のアリ類の巣を脅かさないこと。アリの種類によっては倒木や朽ち木の中や下側に営巣するため、林床や林縁のこうした環境を奪わないよう過度の清掃や整備は控えること。

【特記事項】

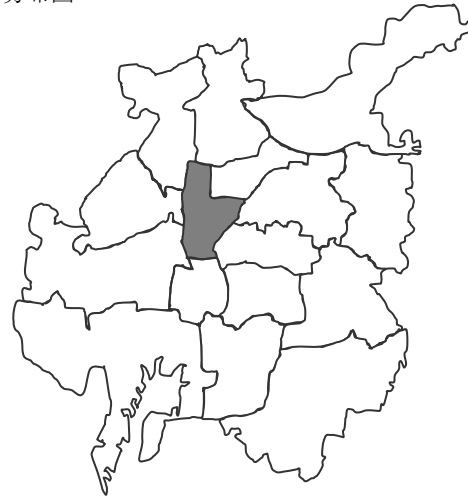
最近の研究により、本種には複数の近似種がいることがわかった。本種の同定には、体表の微毛と共生するアリの確認が必要である。

【関連文献】

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.

日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.213, p.490. 北海道大学出版会, 北海道.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <ナナフシ目 トビナナフシ科>

タイワントビナナフシ *Sipyloidea sipyilus* (Westwood)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

大型のナナフシの一種であるが 1995 年にはじめて名古屋市で発見された。このような顕著な種類がこれまで見つかっていなかったのは不思議である。

はたして以前から生息していたものか、それとも下記のようになんらかの人為的な理由でたまたま定着したものか原因を見極める必要がある。今後の消長を追跡したい。

【形態】

有翅。単為生殖。触角は前脚より長い。体は細長い小枝状。全体に黄褐色～赤褐色で個体により全身に小黑点が明瞭。名古屋市産は淡い黄褐色のものが多い。

体長は雌 71～82mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、中区（名城公園）。

【県内の分布】

豊川市、豊田市。

【国内の分布】

本州、九州、南西諸島などに分布する。

【世界の分布】

台湾、中国、アッサム、ミャンマー、ジャワ、オーストラリアなど。



タイワントビナナフシ

千種区東山公園、1999 年 7 月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

林縁のマント群落やそれに続く丈の高い草地などに見られる。道路沿いのススキの茂みにも見られることがある。

産卵は粘着方式で食植物に産み付けることがある。それが植栽される場合‘人為的’に遠方まで運ばれ、そこで孵化することも考えられる。市内で発見された本種の生息が自然的なものか、あるいは街路樹や公園内の植栽植物などに紛れて侵入した偶発的なものか多少の疑念がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は千種区東山公園と平和公園、中区の名城公園。

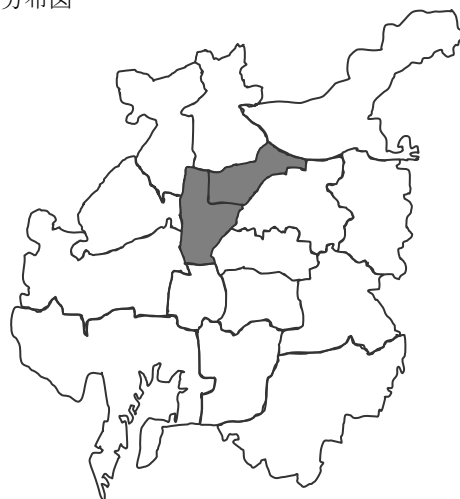
【保全上の留意点】

林縁のマント群落や散策路沿いのススキの茂みなどを過度に刈り込まないこと。食植物であるフジ、ヌルデ、キク、ノイバラ、キイチゴなどを適度に残すこと。

【関連文献】

- 岡田正哉, 1990. 愛知県のナナフシ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.95-96. 愛知県.
 岡田正哉, 1996. 名古屋市で採集されたタイワントビナナフシ. 佳香蝶, 48(185):68.
 岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版, 大阪.
 岡田正哉, 2003. 名古屋市のタイワントビナナフシは健在. 佳香蝶, 55(214):30.
 日浦 勇, 1993. タイワントビナナフシ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.55. 保育社, 大阪.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10. 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <カメムシ目 コオイムシ科>

コオイムシ *Appasus japonicus* Vuillefroy**【選定理由】**

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。
市内における正式な記録も非常に少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長は17～20mmで、体型は偏平な卵形を呈する。体色は黄褐色～褐色で、前脚は鎌状の捕獲脚となっている。

【分布の概要】**【市内の分布】**

比較的広く生息していたとされるが、正式な記録はほとんど残っていない。近年の調査で、守山区、昭和区などで確認されている。

【県内の分布】

新城市、豊橋市、豊川市、豊田市、瀬戸市、春日井市、日進市、東海市、常滑市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。



コオイムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水草の多いため池、水田地帯の素堀の水路、湿地や休耕田の浅い水たまり、河川のワンドなど比較的様々な環境に生息する。

雌が雄の前翅背面上に卵塊を産み付ける習性がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内における生息地は、産地・個体数とも比較的多いが、市内では水草の豊富なため池などに限られる。

平野部では、水質の悪化のほか、特にため池や湿地などの埋め立てによる生息地そのものの消失が減少要因となっている。

【保全上の留意点】

ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

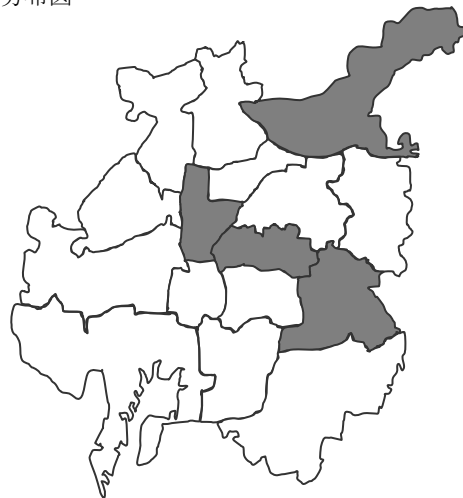
現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

【引用文献】

広正義ほか, 1983. 名古屋城外堀生物調査報告書. 59pp. 名古屋城管理事務所.

矢崎充彦, 2010. 名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類. 佳香蝶, 62(243):51-55.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

トダセスジゲンゴロウ *Copelatus nakamurai* Guéorguiev

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

全国的にも生息域が限定される。名古屋市では1990年に守山区庄内川の河川敷で発見され、その後数年間継続して生息が確認されたが、現在では生息確認ができなくなっている。

【形態】

扁平な長楕円形。頭部～前胸背は褐色から暗褐色、上翅は黒色で、基部と翅端部は黄色、さらに両側と第3間室は黄色で基部と翅端部をつなぐ黄色の縦条を形成する。上翅には7条溝と1亜外縁溝がある。

体長は3.9～4.6mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区の庄内川河川敷で確認されている。

【県内の分布】

上記の記録である庄内川河川敷が知られるのみである。

【国内の分布】

本州に分布するが、これまでに確認された生息地は、栃木県、埼玉県、東京都、千葉県、茨城県、愛知県の1都5県のみ。

【世界の分布】

日本固有種。



トダセスジゲンゴロウ

【生息地の環境／生態的特性】

これまでに確認された生息環境はいずれも河川敷にできた水溜りで、湧き水をとまなっていることが多い。生息する水域は一時的で不安定な場所が多く、渇水時に消滅してしまうと、その後確認できなくなる場合が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区庄内川河川敷の生息地では、数年間継続して生息が確認されたが、生息地である水溜りが消滅してからは確認されていない。本種は、生息環境が不安定な水域であることを考慮すると、生息には常に湧き水による水溜りがどこかに存在し、ある程度広範囲におよぶ氾濫原をもつ河川敷が必要であることが予想される。しかし現在の市内の河川敷は主に公園、緑地として整備されており、そのような場所が失われている。

市内分布図



【保全上の留意点】

河川敷、河川の氾濫原は、都市部では数少ない自然環境を残している。河川の整備にあたっては、こうした場所に多くの生物が生息していることを考慮にいて、極力温存するように配慮する必要がある。また、四輪駆動車、モトクロスバイクなどの河川敷への乗り入れは、河川敷に生息する生物の保護の観点から慎むべきである。

【引用文献】

河路掛吾, 1991. 愛知県におけるトダセスジゲンゴロウの記録. 月刊むし, (246): 36.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 マルドロムシ科>

シワムネマルドロムシ *Georissus kurosawai* Nakane**【選定理由】**

砂粒大の甲虫で、水辺の砂の中に棲むと思われる。近年は河川の整備により、生息環境自体が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 1.6mm。頭部前半の顆粒を欠き、前胸背板の顆粒は明瞭でない。上翅には浅い粗大な点刻列があり、間室には顆粒を欠く。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区名古屋大学内で 1948 年 6 月に採れた個体が新種の記載に使われた。

【県内の分布】

上記のみ。

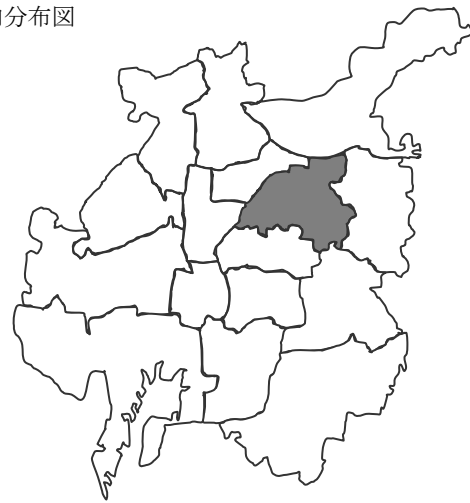
【国内の分布】

北海道、本州。

【世界の分布】

現状では国外からは未知。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

河川などの水辺の砂の中から見つかるが、灯火にも飛来することがある。同じグループの種は、水辺の落葉下から見つかった例もある。

【現在の生息状況／減少の要因】

千種区名古屋大学の鏡池に生息していたと想定されている（佐藤，1982）が、現在この池は環境が悪化し見る事ができない。

【保全上の留意点】

河川敷内の遊水地の設置や、残っている自然の砂地などを保全し、多様性に富んだ水辺環境を作ることが望まれる。

【引用文献】

佐藤正孝，1982. 愛知県から記録された甲虫類. 昆虫と自然, 17(12):8-9.

【関連文献】

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.206. 保育社，大阪.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ホソガムシ科>

ヤマトホソガムシ *Hydrochus japonicus* Sharp**【選定理由】**

富栄養化した池に普通に見られ、用水路にも生息していた。
都市化によりため池などが著しく少なくなったことによる。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長は 2.6～3.1mm。黒褐色で、肢は黄褐色。背面は緑ないし藍色の金属光沢を有する。全体に強い点刻があり、前胸背のくぼみは顕著。上翅の第3、7、9間室が明瞭に隆起する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部丘陵地の残された池に僅かに生息している。

【県内の分布】

平野部の池、沼に見られるが少ない。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、東南アジア。



ヤマトホソガムシ

【生息地の環境／生態的特性】

池、沼などに生息するが、富栄養化した水域に多いとはいうものの、汚濁水の流入する水質では生活できない。

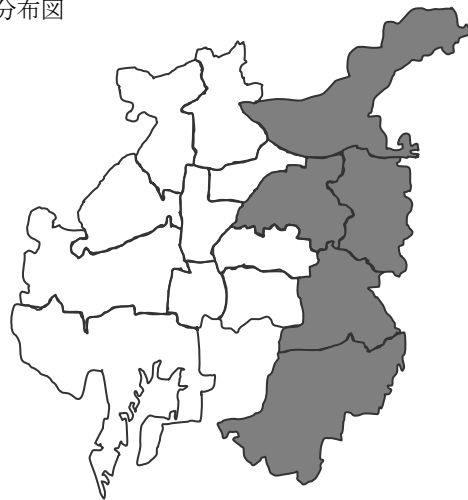
【現在の生息状況／減少の要因】

池の分断化、孤立化している現状であるところへ、汚水の流入によってこの種を始めとする様々な種が生息できなくなっている。

【保全上の留意点】

現在ある池の保全と植物豊かな水辺環境の整備が必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(32):1-7.

(執筆 佐藤正孝)

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

ヒメシジミガムシ *Laccobius fragilis* Nakane**【選定理由】**

河川の流水につながる様な水溜りが主な生息地であるが、この様な環境は昨今の河川整備により減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長2.3～2.9mm。上翅には10点刻列をそなえ、間室の点刻は密で点刻列のそれとほぼ同じ。近似のコモンシジミガムシとは、上翅亜外縁の点刻が無いことで分けられる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区松河橋（Nakane, 1966）。

【県内の分布】

豊田市、弥富市。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

現状では国外から未知。



ヒメシジミガムシ

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷等の流水につながる様な水溜りに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川整備が進み、河川敷の様な更新地の水域を好む種には、大変厳しい状況になってきている。

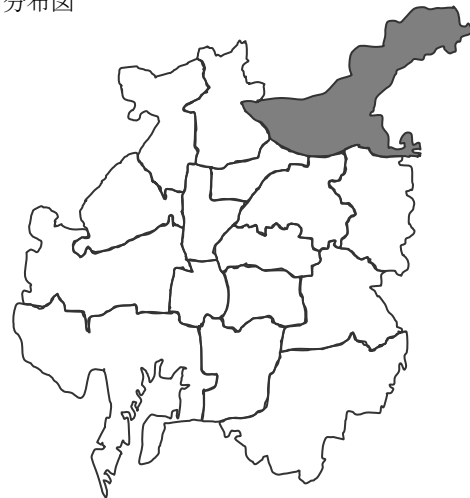
【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

【特記事項】

守山区松河橋付近の庄内川で1957年に採集された個体が、新種の記載に使われた。

市内分布図

**【引用文献】**

Nakane, T., 1966. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXXIII. *Fragmenta Coleopterologica*, (13/15):51-59.

【関連文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上), pp.204-231. 愛知県の農地林務部自然保護課.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編), 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II), p.214. 保育社, 大阪.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

コガムシ *Hydrochara affinis* (Sharp)**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	情報不足

【形態】

16.0～18.0mm。体型は長卵形で、表面には光沢がある。後胸棘突起は先端が尖るがやや鈍り、後基節間で終わる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、北区、港区、庄内川（以上すべて吉鶴ほか、2008）、天白区。

【県内の分布】

愛西市、安城市、稲沢市、犬山市、岡崎市、春日井市、蒲郡市、刈谷市、小牧市、新城市、田原市、津島市、知立市、豊田市、日進市、東浦町、弥富市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、モンゴル。

**【生息地の環境／生態的特性】**

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。流れのよどんだ小河川でも見つかる。また街灯などの光にも寄ってくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

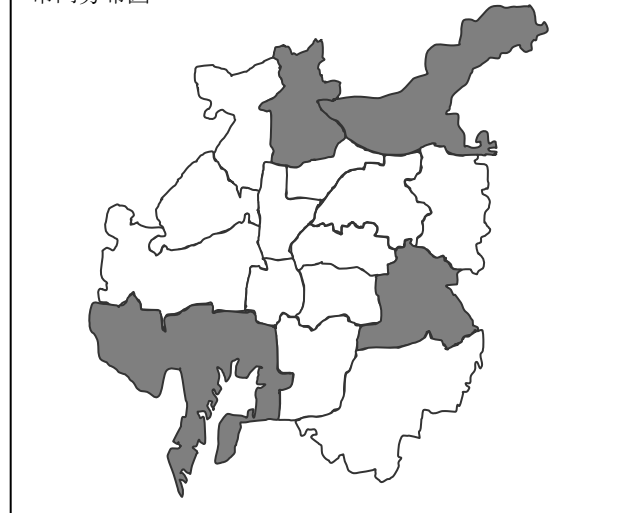
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

東部丘陵には、よく似たエゾコガムシが生息している。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上), pp.204-231. 愛知県.
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一, 2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.102-156. 名古屋市.
戸田尚希, 2010. 愛知県と岐阜県におけるエゾコガムシの記録. 佳香蝶, 62(241):12. 名古屋昆虫同好会.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編), 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ, pl.39,p.216. 保育社, 大阪.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

コガタガムシ *Hydrophilus bilineatus cashimirensis* Redtenbacher**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

23.0～28.0mm。体型は長卵形で、表面には光沢がある。後胸棘突起は長く、腹部第4節に達する。腹部細毛に覆われる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

緑区、西区（すべて吉鶴ほか、2008）。

【県内の分布】

名古屋市、弥富市。

【国内の分布】

本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

台湾、中国大陆、朝鮮半島、東南アジア、カシミール、インド、スリランカ。



コガタガムシ

弥富市富浜町、2009年6月14日、池田都志也 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

気候的なものか、単発的に見つかることがあるが、現在、継続発生は見られない。

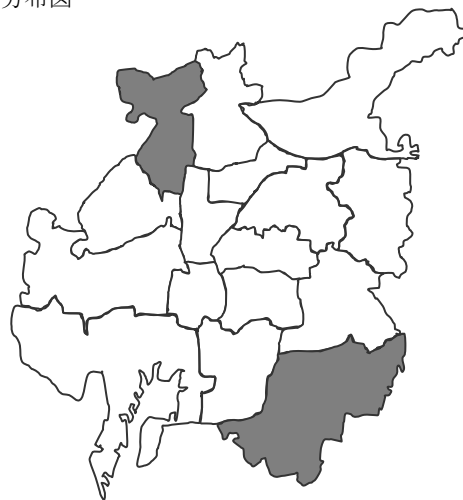
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

南方系の種で、琉球ではふつうに見られる。

市内分布図

**【引用文献】**

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一、2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.102-156. 名古屋市.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ, pl.39, p.215. 保育社, 大阪.

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上), pp.204-231. 愛知県.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 エンマムシ科>

クロエンマムシ *Hister concolor* Lewis**【選定理由】**

近年の記録は途絶えており、大型のエンマムシ類のうち特に平野部に生息する種は、牧場の閉鎖や衛生環境の整備に伴い生息が困難になってきている。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 6.8～9.0mm。黒色で光沢がある。上翅の第1～3背条は完全、第4～6背条は基半部を欠く。前尾節板はやや密に、尾節板はやや密に、尾節板はきわめて密に粗大点刻を装う。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区（佐藤，1990）。

【県内の分布】

旧長久手町、豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州。

【世界の分布】

千島列島、中国。

**【生息地の環境／生態的特性】**

やや新しい牛糞などに集まる。

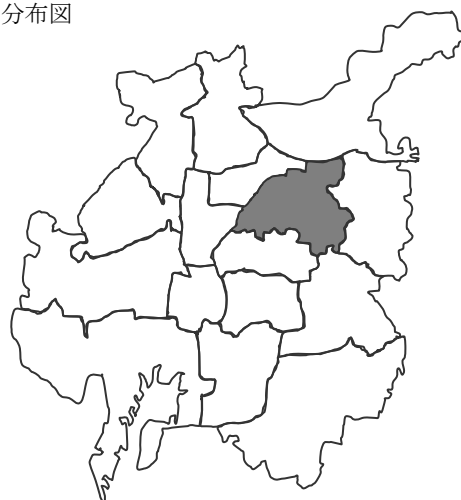
【現在の生息状況／減少の要因】

本種を含め大型のエンマムシ類は、近年いずれも発見が困難になってきている。平野部の衛生環境の整備が、生息環境に影響しているものと思われる。

【保全上の留意点】

ウジ類を捕食するエンマムシ類の減少の背景には、野生動物の減少や衛生環境の整備が、生息環境に影響していると思われる。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（I）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑（II），p.227. 保育社，大阪.

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.396. 同県環境部自然環境課.

大原昌宏，1996. 日本産エンマムシ上科概説IV. 甲虫ニュース，(116):7-10.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 クワガタムシ科>

マダラクワガタ *Aesalus asiaticus asiaticus* Lewis**【選定理由】**

良好に湿潤した自然環境において腐朽材を好み生息する本種は、林の乾燥化がすすみ、生息の場が極度に減少してきている。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 4～6mm。体の点刻は大きく円形。毛は鱗片状または棍棒状。大あごは短く、細い毛があり、雄には上方へ大きく湾曲した突起がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区名城公園（大塚，1992）。

【県内の分布】

豊田市、豊根村、設楽町（以上佐藤，1990）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、対馬。

【世界の分布】

現状では国外からは未知。



マダラクワガタ

豊田市稲武町、2007年4月8日、戸田尚希 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

成虫は秋に羽化し、そのまま越冬し、翌春より初夏にかけて出現する。幼虫は赤色腐朽した枯木を食べ生育する。

【現在の生息状況／減少の要因】

林の乾燥化により、赤色腐朽した材が減少もしくは乾燥してしまい、幼虫の生育が阻害されているのではないと思われる。

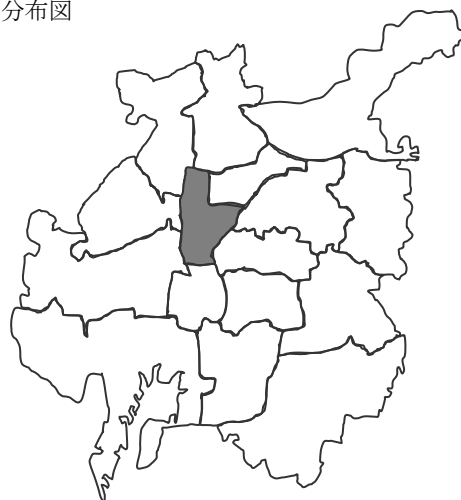
【保全上の留意点】

枯木は処分せず、邪魔にならない場所で腐朽させることが、本種の様な材に依存する甲虫類の保全には欠かせない。

【特記事項】

屋久島には別亜種が生息する。

市内分布図

**【引用文献】**

大塚篤，1992. 名城公園付近の甲虫 18 種. 佳香蝶, 44(169):9-10.

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ），愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.

【関連文献】

上野俊一ほか，1985. 原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.334. 保育社，大阪.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゾウムシ科>

カギアシゾウムシ *Bagous bipunctatus* (Kono)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

カギアシゾウムシ類はいずれも全国的に少ない種で散発的に採集されるにすぎない。その生態については水辺環境に生息する事くらいしか解っていない。水辺環境の悪化は急速に進行しており、生態も分からないいううちに姿を消してしまう事も懸念される。

【形態】

著しい特徴は、後脛節が湾曲しカギ状になっていることである。カギアシゾウムシの他にきわめて近似の数種が隣接する市地域に分布することから、同定には注意が必要である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

名東区猪高緑地（村上，1986）。

【県内の分布】

岡崎市、豊田市、常滑市、弥富市。

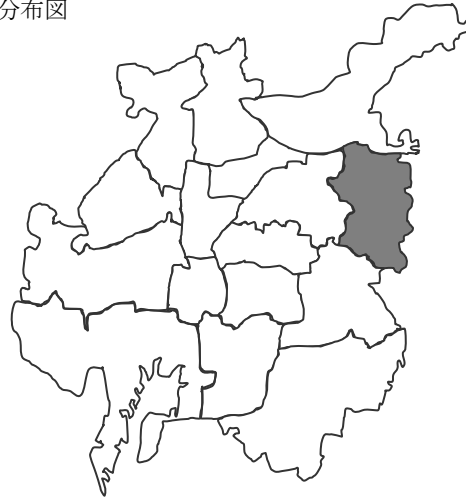
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

カギアシゾウムシは灯火やスィーピングにより、田畑の周囲で散発的に捕らえられているが、ホストはため池の水草類や岸辺の植物などが推定される。

【現在の生息状況／減少の要因】

採集例が少なすぎて減少しているかどうか全く解らないが、水辺の環境が悪化している現状では、絶滅の危険性はかなり高いと思われる。

【保全上の留意点】

現状ではまったく偶然に得られるのみであるため基礎的な情報がないが、水辺環境の悪化を止め水域を保全することが望まれる。

【引用文献】

村上哲生，1986. 猪高緑地内の池の魚類と底棲生物. ため池の自然（名古屋ため池の自然研究会会誌），(4):7-8.

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.396. 同県環境部自然環境課.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 マダラガ科>

ヤホシホソマダラ *Balataea octomaculata* (Bremer)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

昼飛性の蛾で、明るい草原を飛び花に集まる。本州では湿性草原でよく採集される。今日、草地環境が全国的に減少していて、本種の見られなくなった場所も多い。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。名古屋市では古い記録があるのみで分布の実態がつかめていない。

【形態】

開張 16～21mm。触角は雄では両櫛歯状、雌では糸状。東海地方の草地にはよく似たキスジホソマダラが同時に産するので、同定には注意が必要である。前翅は暗褐色で、黄色斑はキスジホソマダラに比べ短く明瞭。後翅は半透明で透明部が広く外縁の黒色部は細い。

【分布の概要】

【市内の分布】

1972年6月に天白区平針で、有田豊氏により同時に11雄が記録されたのが唯一の記録。

【県内の分布】

近縁のキスジホソマダラは各所で得られているが、本種は上記の記録のみである。

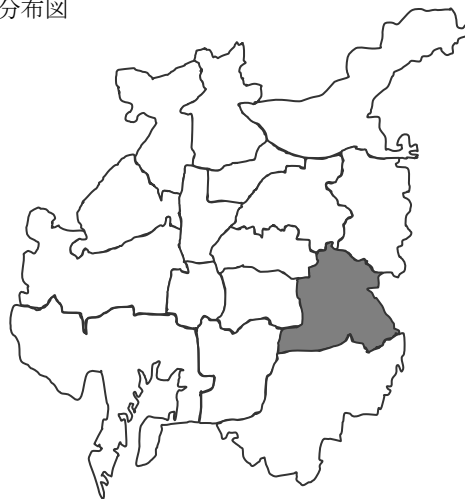
【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島南部、中国北部、ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

年1～2化。成虫は6月と8～9月に出現し、昼間活動しハルジョオン・ヨメナなどの花に吸蜜する。明るい草地を好み、本州では特にハッチョウトンボの産するような湿地を好むという。幼虫はササ類やヌマガヤなどイネ科を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1972年の古い天白区平針の記録以外になく、現在の生息状況は不明である。岐阜県では2009年に、中津川市苗木・瑞浪市日吉町の2箇所からはじめて記録された。減少の要因は明らかでないが、本種が湿地に生息するとすれば、埋め立て等による湿地の減少が理由となる。いずれにせよ名古屋市周辺の湿地の昼間の積極的な調査が必要である。

【保全上の留意点】

現存する湿地環境の生態系をよく調査し、保全の措置をとる。上部の水脈を保持するとともに、周辺の開発・改修には十全な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県. 笠井初志ほか、2013. 岐阜県蛾類採集記録(2013年編纂). 岐阜県昆虫分布研究会.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか(編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 スズメガ科>

オオシモフリスズメ *Langia zenzeroides nawai* Rothschild et Jordan

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

日本最大のスズメガであるが、産地は比較的局地的である。東海地方以西の人里的環境に生息する。名古屋市内では2014年に1頭記録されたのみであり、分布実態を把握するには情報不足である。

【形態】

開張 140～160mm。雌は雄よりやや大きい。口吻は退化してごく短い。前翅頂は鋭くとがり、外縁は鋸歯状。胴は太く胸部から腹部にかけ毛状鱗が密生し、肩板に黒条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山南麓で、2014年春に1雌が採集された。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河山間部にかけて広く分布する。近年減少傾向にある。

【国内の分布】

本州（東海地方以西）、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島南部、台湾、中国南部、インドシナ半島北部からネパール。

【生息地の環境／生態的特性】

年1化で成虫は春3月下旬～4月に出現する。食樹がサクラ類、ウメ、アンズ、スモモ、モモなどのバラ科の栽培種のため、低山地の人里近くに発生する。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区東谷山はサクラの古木があり、近くに果樹園もあり生息環境は整っている。既知産地の瀬戸市定光寺とは山続きであり、同一個体群に属すると思われる。

減少要因としては、生息地が開発されやすい里山であることのほか、水銀灯などの灯火による分布の攪乱もあるであろう。水銀灯に飛来した本種が、フクロウ類の餌になっているのを目撃したことがある。

【保全上の留意点】

市東部にわずかに残る里山的環境は、サクラや梅林、コナラやアベマキの二次林や小湿地と小流など、名古屋市の動植物相をはぐくむモデルとして、そのまま生態的な生きた博物館として一定区画を残せば理想的である。

【引用文献】

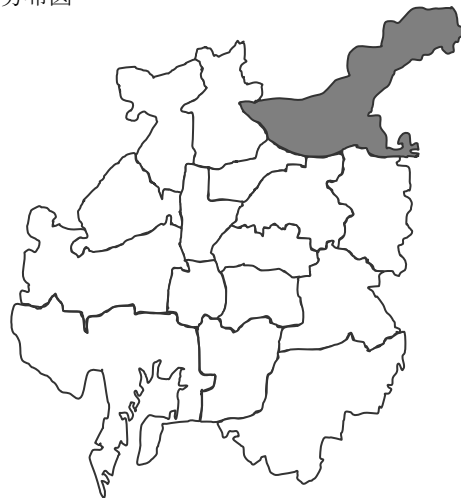
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社，東京.



市内分布図



(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

トウカイツマキリアツバ *Tamba roseopurpurea* Sugi

カテゴリー

【選定理由】

岐阜県でアラカシから幼虫が採集されていて、和名のように東海地方のカシ類の多い照葉樹林を標徴する蛾の一つと考えられるが、市内では安定した照葉樹林が少なくなっている。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張26～33mm。地色は淡黄褐色、前・後翅とも淡い紫紅色を帯びる。各横線は淡色で明瞭、紫褐色に縁取られる。腎状紋は大きく淡色の環をなし、その中に2個の小暗色点がある。前翅の内横線は直線状で斜走する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山で2006年に記録された。

【県内の分布】

設楽町、新城市、旭町、足助町、額田町、音羽町、豊田市などで採集されている。

【国内の分布】

東海地方以西の本州と四国（高知県）、九州（大分・宮崎県）に記録がある。

【世界の分布】

現状では日本固有種である。



トウカイツマキリアツバ

守山区東谷山、2006年11月10日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

東海地方の照葉樹林やカシ類を交えた雑木林に生息する。6月から9月にかけて採集されているが、名古屋市東谷山では11月中旬に比較的新鮮な個体が採集されている。化性或発生の周年経過はよく分かっていない。

愛知県では、豊田市では近年新しい産地が多く見つかった。しかし全国的にみると局地的でまれな種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

産地である東谷山の照葉樹林は、2010年に愛知県の自然環境保全地域に指定された。

都市近郊では、本種の生息するカシ類を含む雑木林が、開発で減少している。

【保全上の留意点】

緑地にナラ枯れ被害が急速に進行しているが、安易に広面積に害虫駆除の薬剤散布を行わないことが望ましい。現存する名古屋市内の照葉樹林は、可能な限り保存することが望ましい。

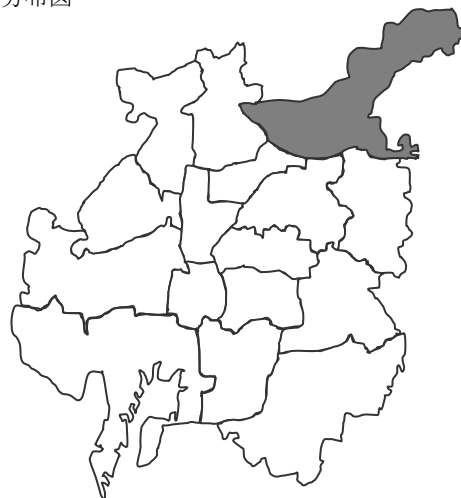
【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中蕃・間野隆裕・蟹江 昇ほか、2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書（昆虫編抜粋）. 豊田市.
田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社，東京.

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

カギモンハナオイアツバ *Cidaripura signata* (Butler)

カテゴリー

【選定理由】

平地から低山地の明るい草地に生息する蛾で、草地環境の衰退に伴い本種も減少傾向にあることから、環境省は、2012 年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定した。名古屋市では近年記録されたのみで、分布の実態がつかめていない。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

開張 28～33mm。前翅は淡黄褐色で、淡色の横線は明瞭、外横線と亜外縁線の内側は前縁近くで濃色、横脈紋は濃くかぎ状にL字型に屈曲しよく目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区明徳公園で2009年8月15日に1雄が採集されている（白谷美代子・白谷由紀子）。

【県内の分布】

岡崎市、豊田市などの平地・低山地で記録されている。

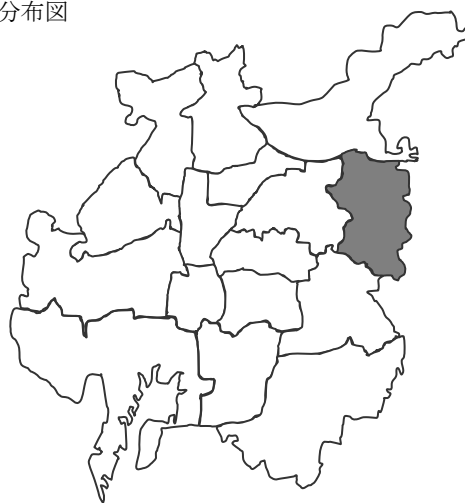
【国内の分布】

本州、四国、九州、屋久島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

明るい雑木林の林縁草地や河川敷などで発生するが、産出量は少ない。群馬県渡良瀬遊水地のような湿性草原のほか、水田周辺の草原、関西では湧水湿地からも発見されている。

5月から10月にかけて年2回発生する。幼虫の寄主植物は未知である。

【現在の生息状況／減少の要因】

明徳公園以外に記録がなく、市全体での現在の生息状況は不明である。全国的な減少の要因は必ずしも明らかでないが、本種が湿性環境に生息するとすれば、埋め立て等による湿地や湿性草原の減少が理由となる。いずれにせよ名古屋市の湿地とその周辺の継続的調査が必要である。

同様な湿性草原に生息する種にアカマエアツバがあり、2010年の補遺版では情報不足に抽出したが、カギモンハナオイアツバが、今回環境省の準絶滅危惧に選定されたので、入れ替えた。

【保全上の留意点】

湿地やため池、河川敷など水系環境は、一見平凡に見えても保護されるべき珍しい種類が生息している場合もあるので、十全な調査を実施するとともに、極力残された自然を生かした造成計画を立てる。また、農薬等の散布には十分な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.

杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.

岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.

（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ホソバオビキリガ *Dryobotodes angusta angusta* Sugi

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

全国的に産地が局限され個体数も少ない、いわゆる希少種であるが、過去の採集例から、平地や盆地などの雑木林（二次林）に生息していると思われる。このような都市近郊の二次林は開発の波にさらされ、本種の産地も、人知れず減少の一途をたどっていると思われる。

【形態】

開張30～34mm。前翅は同属他種より幅狭く、灰黒褐色。内・外横線とも二重で、外横線は鋸歯状。環状紋は斜傾する小楕円形で黒色環を有し中心は淡色、腎状紋も淡色で環を持たず外側の輪郭はぼやける。後翅は淡黒褐色で、より濃色の外横線と横脈紋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区明徳公園で2010年11月20日に1雌が採集されている（白谷美代子・白谷由紀子）。

【県内の分布】

日進市岩崎町御嶽山で記録されている。

【国内の分布】

全国に分布するがまれな種。兵庫県黒田庄町（ホロタイプ）の他、岩手県岩泉町、香川県高松市、小豆島、福岡県福岡市、大牟田市などに記録がある。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国の一部。

【生息地の環境／生態的特性】

暖温帯落葉樹林の蛾と思われ、比較的植生の安定した二次林に発生する。幼虫期を含め生態が明らかでないが、成虫は年1回晩秋11月から12月にかけて出現し、成虫越冬しない。

灯火に飛来し、糖蜜にも来る。

【現在の生息状況／減少の要因】

産地である名東区明徳公園は、市の緑地としての公園整備がなされている。

最新の学研の日本産蛾類標準図鑑では、「全国的に産出は非常に局所的で得がたい種」とある。元々平地産で産出量が少ない上に、都市近郊の雑木林の開発による消滅が、減少に拍車をかけている。

東海三県では今回が初記録と思われる。

【保全上の留意点】

緑地に松枯れのほか、近年ナラ枯れ被害が急速に進行しているが、安易に広面積に害虫駆除の薬剤散布を行わないことが望ましい。現存する名古屋市内の二次林環境は、可能な限り現状を維持し、保全することが望ましい。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京



市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

【国リスト・県リストの新規掲載種について】

今回の見直しによって新たに「国リスト」「県リスト」に掲載された種について、対象種が名古屋市では絶滅危惧種と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* (Selys)

トンボ目 トンボ科 (県：準絶滅危惧)

市内では、ある程度数が観察され、大きな減少傾向が見られない。

2. ウスバカマキリ *Mantis religiosa* (Linnaeus)

カマキリ目 カマキリ科 (国：情報不足)

市内では、ある程度数が観察され、大きな減少傾向が見られない。